

104

104-Ku96-7ウ



1200500724958



始



讀書餘錄



104  
K696  
7

桑木嚴翼



## 序

讀書日記と題して昨年中雑誌「知性」に掲載した隨筆が數種に及んだので、他の雑誌に出た類似の雜文をも一括して此の題目の下に攝し、知性の發行書肆から出版することとした。題目が甚だ雜駁であつて、是等に平等な興味を感じ得る讀者を求めめることは頗る困難と思はれるが、書肆の要求が急なるために、終に大體發表時日の順序に従つて編纂して再び世に問ふこととした。昨春「書・人・旅」を出して最近の諸文を集録したから、今此書に採る所ものは殆ど皆其の以後、昨年中の作にかゝるものである。たゞ一文「哲學の藝術性」だけ十二年の作であるが、是は如何なる故か、前隨筆集に洩れたものである。而して此の論文や其後の諸文は共に本來讀書日記とは稱し難い點が多いが、然し結局は讀書の餘録に過ぎないから、別に特殊の項目を設けないで、均しく他の讀書日記と同様に取扱つた。卷頭の一文は、其の發表の際には讀書日記とは題しなかつたものであるが、或意味に於ては總序となるものである。而して嚴密に此の題目に相當するものは前述の如く第二文以下數篇に止まるのであるが、然し其の著想や書き方に

は一貫せる相似點があるから、簡單を尙んで漠然讀書日記の一部と見ることにした。要するに讀書の他に能のない時代後れの學究が心にうつるよしたしごとを記した隨筆の集録に他ならぬのである。此點から書名を讀書餘録とすることとした。

近來此種のものを書く癖が出来たので、今年に入つても既に數種公にして居る。此書中に收めることも出来ないのではなかつたが、餘り新しいので、其は他日更に其類の文章の集積した時を待つこととした。然しながら元來が意味もない漫談などを一度ならず、二度までも公にすることは甚だ濟まない氣もするが、是も書肆の勧誘によるものだ、責任を他になすりつけるやうな辯解をすることは益々非を重ねることであるかも知れない。然し私自身は、自分の舊稿が一部分でも纏つて居ることは甚だ仕合せと思ふ所である。私は最近散儒といふ言葉が甚だ私共の境涯に妥當するやうに感じて一文を草したことがある。散儒には「ヒマナジュシヤ」と訓してある。即ち此書は散儒の一業として大方の看過せられることを希求するものに他ならない。

昭和十五年二月

桑 木 嚴 翼

## 目 次

知性の宿命……………三  
 ——ヴォルテールと平賀源内——  
 『サンタヤーナ會見談』……………一三  
 『古事記傳』と『難古事記傳』……………二七  
 キェルケゴールとトレンデレンブルク……………三九  
 哲學史外傳……………五一  
 ——デカルト及びカントの獨體のことなど——  
 哲學者の手紙……………六九  
 ——波蘭の老學者のことなど——

一亡命老學者の近著 ..... 八〇

——ロスキイのこと——

學者の自己宣傳 ..... 九七

——ヒュームのこと——

百年前 ..... 一〇二

——高野長英を中心として——

學究の生涯 ..... 一二七

——キュリー夫人の傳記——

『江口』と『石橋』 ..... 一三六

——普賢と文珠、プラトンとカント——

能の西行 ..... 一四四

能及び狂言に於ける山伏 ..... 一五五

讀書と擇書 ..... 一七三

讀書斷片 ..... 一八五

一 いたづら ..... 一八五

二 映畫的演劇 ..... 一九〇

三 夏の音 ..... 一九五

四 雑音さまざま ..... 一九九

五 巴里で觀た新聞研究 ..... 二〇五

哲學の藝術性 ..... 二二一

哲學と科學との交渉 ..... 二三三

——近代科學史と思想史との交渉——

生命觀 ..... 二五五

哲學斷片 ..... 二六九

一 常識・哲學・言語 ..... 二六九

讀書餘錄

目次

二 科學の危機……………三七九

時論數則……………二八五

一 差別即平等……………二八五

二 藝術と道徳……………二八五

三 綴方と道徳……………二九〇

四 比較研究難……………二九〇

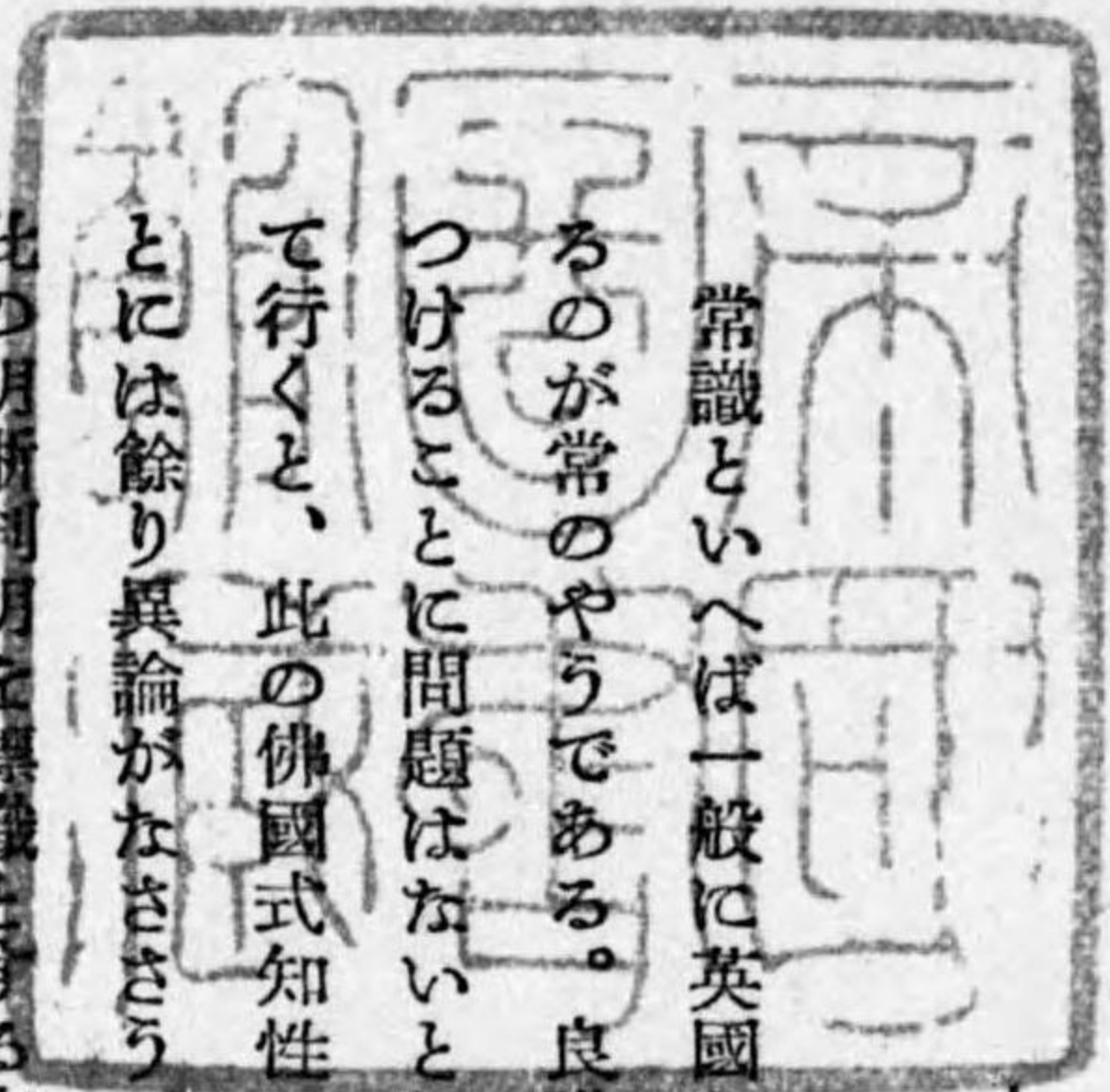
五 試験の倫理……………二九六

六 無用なる知識とは何か……………二九六

四

### 知性の宿命

—ヴォルテールと平賀源内—



常識といへば一般に英國を本場と思ふやうに、良識とか知性とかいへば、先づ佛國を聯想するものが常のやうである。良識は元來佛語「ボン・サンス」の事だとすれば、之を佛蘭西に結びつけることに問題はないとして、知性の方は必しも同様に明瞭ではないが、普通の解釋を辿つて行くと、此の佛國式知性の淵源且つ標本として近世哲學の祖といはれるデカルトを擧げることには餘り異論がなさうである。現に先年巴里で其の初著三百年記念の會があつた時には、此の明晰判明を標識とする方法論書を近世知性開發の魁とすることが通説となつて居た。然し其際別に、此種の思想は機械觀的主知主義に他ならぬとして之に對抗し、もつと深奥な人性の衝動に根據を有するといはれる反主知主義を鼓吹し、其の代表者としてフィヒテなどを擧げる

獨逸の評論家も出た。斯うなると、デカルトも、知性も、要するに通常十八世紀の啓蒙思潮と稱せられるものに全く包括せられてしまひさうになるが、知性を口にするものは恐らくは此の見方を以て満足する事は出来ないであらう。一體此の啓蒙思潮なるものを其後の十九世紀的羅曼派の立場からのみ考察して、淺薄皮相とのみ貶し去ることも如何と思はれるが、とにかく佛國的知性は所謂啓蒙思潮と稱せられるものよりも今少し深刻なものと解せらるべきことは言を俟たない。斯う考へて來ると、今此に佛國自身の評論家等の中にも餘り受けの好くない啓蒙家を捉へて知性の一代表者とする事は或は正鵠を失したものと云ふ非難を免れないかも知れないが、然し知性の一面には明晰判明が要求せられ、而して此の要件を徹底すれば、玲瓏透徹を期する餘り終に何等歸着する所を得ないで懷疑的となることも確かに其の宿命とも考へられるから、佛國的知性の一現象としてヴォルテールを考へて見ることも強ち不倫ではないであらう。

一體知性に勝れて懷疑的となつた例としては、近世の初では先づエラスムスの事に思ひ當るが、佛國に於ては殊に此種の思想家に富むやうに思はれる。デカルトは初こそ懷疑的であつたが、後には寧ろ獨斷的形而上學を唱へたものであつて、其より少し溯りモンテーニに於てこそ

我々は最も好適の代表者を看出し得るのである。近代に於けるアナトール・フランスに就ては何人もこれを認める所であり、ジードも結局其の徒と稱し得べきであらう。今ヴォルテールを是等に比べれば、種々遜色を呈する所があるが、然し一脈の相通する所があることは掩はれない。殊に私の記憶にして誤りがないとすれば、アナトール・フランスは其の文章に於てヴォルテールに學ぶ所が多かつたといふことを巴里で語學の先生から聞いたやうである。乃ち此に知性に富む懷疑家としてヴォルテールを想ふことも敢て當を失したとはいへないであらう。

然し私は今ヴォルテールに就て詳説しようとするのでは無い。幾分か之に類似するものとして平賀源内の事に想到したことを斷片的に記述しようとするのである。源内或は鳩溪が徳川末期に於ける一異才たることは人の洽く知る所である。戯曲家としては神靈矢口渡によつて今なほ劇壇に傳へられて居るし、電氣器械の創案や博物學の知識に於て又其の風來六部集等の戯文によつて其の才能の豊富なることを認めないものはない。此點に於て、戯曲小説等を以て文壇の元老となり、英國の哲學科學を紹介してロック、ニュートンの宣傳者となり更に又其の諸著に於て當時の謬見迷信を嘲罵したヴォルテールと、頗る揆を一にする所があることを覺えざる



を得ない。然も兩者共に知識餘りあつて徳行之に伴はず、一は毀譽褒貶の裡に浮沈し、一は終りを全くするを得なかつた點に於ても相合する所が少くない。而して佛國の文豪はとにかく華やかな一生を送つたが、我が源内に至つては遂に罪を獲て免れなかつたのは惜しむに餘りあることである。

平賀源内に就ては、私は數十年の昔から其の戯曲や戯文を耽讀し、又展覽會で其のエレキテルなどを一見して益々興味を感じて居たが、近年其の全集が出版されたので其の全貌を窺ふことを得た。但し科學文學の兩面に互る奇才としてヴォルテールと比較し得べきことを夙に想像して居たのであつたが、然し仔細に全集を検すると共に其の豫想は多少裏切られた感がある。といふのは、源内の科學的事業は寧ろ多く博物學的方面に存し、例へば「物類品臨」で礦物、植物、動物等に就て記述し、火浣布、陶器等の工藝的製作を創案する等、一個の博物學者應用科學者の趣を具へるもので、此點に於ては寧ろゲーテやレオナルド・ダ・ヴィンチの亞流と稱すべき所があるが、之に反してヴォルテールは科學殊にニュートンの物理學の理解者又宣傳者と稱し得られるが、自ら科學の理論にも應用にも關與する所がなかつたからである。斯様に科學者と

してはヴォルテールの方は到底ディレクタントたるを免れないが、然し其の紹介する所のニュートン物理學が科學的價値を有することが大きいだけそれだけ其の仕事も學界、少くとも一般の知識界に寄與する所も多かつたと云へるだらう。ニュートンに關する特別の著述もあるが、其の英國見聞録ともいふべき『哲學的書簡』の記事は當時の佛國學界を啓發する所が少くなかつたと思はれる。書簡第十四にはデカルトとニュートンを比較し、前者は中世思想の妄を辯じた點に於て功績があるが、所説多く空想を混へてまだニュートンの如き哲學(即ち物理哲學)の域に達しないと斷じて居る。然し英國では兩者とも讀まれてゐない、デカルトの物理學などは最早顧みられず、さりとてニュートンも難解で齒が立たない、たゞ如何なる物理學も皆ニュートンの創見だときめられて居るのは丁度神話の英雄のやうだ、と報道して居る所は、此の惡口家の眞面目を發揮したものである。書簡第十五から十七に互つて、ニュートンの引力説、光學論、無限の數學及び年代考等を紹介し、デカルトの渦動説其他に勝る點を力説して居る。此の如くヴォルテールは當時の新學説を咀嚼した學徒であつたが、源内の方には此の如き理論的著述はない。エレキテル等を創案するためには幾分か物理學的知識の修養もなかつたとは言へ

まいが、然し此點に於ては他の漢學者等に於て更に一步を進めたものが多かつた。源内は若し其の才能を十分に發揮し得たならば、工夫發明に於て優に大業を成し得た人であらう。

然しながら時勢は終に此の才能を伸ばすを得ざらしめたが、之によつて却て別途に於て其の手腕を振はしめ得たことも、亦天の配劑妙を得たものと謂つてよい、即ち其の鬱勃たる不平が發して幾多の諷刺文學となつたことである。源内の戯曲は他に比して必しも拙劣といふべきものではないであらう、現に神靈矢口渡の今なほ行はれるのは技巧に長ずる所があるからであらう。殊に其中に磁石の譬喩を引いた所などは流石に科學者の作と想はせる所もあるが、然も文學として特に他より勝れたとも謂ひ難いやうに思ふ。此點に於てはヴォルテールの戯曲も同様の批評を受けて居る。ヴォルテールの文辭は典雅で誦するに足るものであるが、而かも其の座像は佛國國立劇場に立つて居るが、其劇そのものは今は多く行はれて居ないやうである。其の小説も『カンディード』の如き、今なほ廣く讀まれて居るし、且つ有力な文學新聞の名稱ともなつて居るが、我々はたゞ其がヴォルテールの作であり、其の樂天觀諷刺の意を寓する所に多くの興味を感じるのみである。此の如く兩者の作は共に純粹の文學としては特別の價値を有す

るものと思はれて居ないが、然し其の諷刺嘲罵の文章に至つては辛辣を極めるものが多く、此點に於て異彩を放つ所があつて、謂はば一種の文明批評とも目すべきものである。

然しながら一見すれば兩者の攻撃的は多少異なる所がある。ヴォルテールの鋒先は主として當時の僧侶や宗教上の教説等に向けられて居るが、源内の關心は寧ろ世間の道德風俗等に存するやうである。ヴォルテールは其の『哲學的書簡』の初に於て英國理神教等を紹介し、佛國の加特力教を非難する語氣を示して居るが、更に其の『哲學的辭書』に於ては諸術語を擧げて結局宗教家の意見を擲論して居る。儒教徒や印度の教徒などの話を擧げて賞揚して居るが、何れも基督教攻撃の手段として用ゐたのに過ぎない。「日本」といふ項目があるが、別に日本の歴史や地理等を説明したのではなく、秀吉などが切支丹を放逐し誅戮した事蹟を敘して、其の處置の賢明なことを認めて居るが、要するに宣教師が侵略の手先に使はれることなどを嘲つたものである。「日本人と印度人との問答」といふ項があつて、日本に獨得の料理法が發達して隣邦西藏の方法から脱離したことを説いてあるが、是は日本の事ではなく、英國が羅馬法王の教權から離脱したことを敘したものに他ならない。中に「神主」などといふ言葉が出て居るが、又

ルーテルをテルルー、カルギンをギンカルなどもちつてある所など、随分フザケタ書き方である。其他此の如き宗教の諷刺が多いが、是では如何に一方に、自分は無神論者ではない、もし世界に神がなければ發明するを要すると思ふ、と言つた所で、僧侶の憎惡を免れることは出來ないであらう。而して此の如く當時の知識階級を支配する宗教家を嘲罵する所に、啓蒙運動の特徴を示し又知性の偏倚的發達を表して居るのである。

今之に對して平賀源内の作を見れば、概して當時世間の風俗を描寫しつゝ間接に諷刺を試みたものが多い。源内自身當時の惡風の中に生活して居たのであるから、其の嘲罵は寧ろ自嘲に歸するものも少くないが、然し、其の根柢には才の用ゐられぬ不平を散ずる八ツ當りといった趣がある。乃ち、此の如く動機は或はさほど高尚でなかつたかも知れないが、其の才筆は優に此の如き陰翳を脱して文學的價値を有せしめたのである。殊に世人の狹量なること、無知に甘んずることを罵る所は、滿腔の不平を吐露したものと謂つてよいであらう。然も嘲罵滑稽の文字を假りて往々科學上の見識を示したのものもある。例へば放屁論の如きは之によつてエレキテルの通俗説明を試みたもので、此點に於ては啓蒙家の職を勤めたものと謂つてよい。其の諷刺

の作たる「風流志道軒傳」に仙人の訓戒として「是より早く國に歸り、道に志すといふ文字を取つて志道軒と名を改め、淺草の地内に於て、おどけ咄に人を集め、浮世の穴を言ひ盡して隨分人を戒むべし、汝が咄を聞内にも、女あれば人の氣浮れ、坊主は慢心あるものなれば、坊主と女の毒を云て、暫時の内に追ひまくるべし」とあるが、此點から言へば僧侶を對象とする所はヴォルテールとも類する所がある。現に其の「そしり草」は大部分高僧智識の惡口である。此書はやゝ理窟に過ぎて文學的價値は乏しいが、其れだけ嘲罵批評としては豊富な材料を藏して居る。即ち此點に於て源内も亦佛國啓蒙家と同じく宗教家を攻撃し迷信の剿絶に力を盡したものである。但しヴォルテールは、女人を尊敬しては居ないが、其の害をさほど力説しなかつたやうである。書簡中、ニュートンの一生不犯の操行を賞讃して居るが、一方デカルトが私生兒を擧げた事實を述べつゝ、然も之を酷評するを避けたい、と言つたのは、流石に自ら疚しい所があつたためとも思はれる。

斯様に源内とヴォルテールとを試み對比して見たのであるが、兩者共に當時にあつては最新豊富の知識を有して然も之によつて自家の創見を案じようとはせず、たゞ諷刺冷罵の筆を逞く

した所、知性の曲りくねつた發達を示したもので到底一個の懷疑家たるを免れない。知性と懷疑とは必しも不離とは言へないが、多くの場合には其の一致を見ると言つてよい。必しも、水澄めば魚棲まず、といふことでもないが、又體系家には幾分頭腦の朦朧たる所を要するといふ譯でもないが、とにかく此に又知性本位の思想が非合理主義的思想に容れられない所以を示すものと言つても宜いであらう。

——一四・三知性——

『サンタヤーナ會見談』

讀書日記といふ標題で折々何か書けと言はれた。閑人他になす事もなく、書物を手に離さない習慣になつて居るが、然し其の書物は極めて平凡で何も吹聴する程のものはなく、又會々實のありさうなものとなると、讀過後之に就て書くのは一仕事となる。然もアミエルの日記のやうなものが出来たら愉快だらうが、是は一寸天分の問題だ。然し註文があるといつ引受けてしまふので、果して課題に副ふか否かは不明だが、自分の備忘録を兼ねたやうなものを書いて見る。實は一冊の書物だけでも淋しいので、其の前に、

某月某日

能勢氏の『能樂源流考』を読む。考證の周到精密に敬服し、種々教へられる所があつたの

『サンタヤーナ會見談』

を喜ぶ。云々

某月某日

佐々木博士の『竹柏園藏書志』を読む。貴重書希覯書の萬葉藏に溢れる計りなのに驚歎したが、其中の羅馬字書き（然も所謂日本式なのは其派の人々の喜ぶ所だらう）の短冊や大西博士の書簡などを看出して、聊か自分の世界に近いものに接した氣がした。云々。  
などと書かうとしたが、之を物にするには又々努力を要する。其れで最近私の興味を惹いたもので書き易さうなものを一つ擇んで責を塞ぐこととした。

某月某日

偶然書肆丸善の書架中にサンタヤーナに關する珍らしさうな文獻を發見し、歸來卒讀して種種知見を加ふる所があつた。文獻といふのは僅々八頁の紙片で然も其の本文は三頁に過ぎない。尤も四六判雜誌風で二段に印刷してあるから、全部を譯出すれば相當の紙數を費すことになる。それで此には其の大意を抜抄し、同時に購求した選集中の自敘傳によつて之を補足する。

サンタヤーナに就ては最近其の小説『最後の清教徒』によつて感興を新たにすると共に、其の經歷等に就て更に知ることを欲して居たが、同様の目的を以て其の行方を探求して居た Cyril Clemens といふ人が偶然羅馬で會見するを得たので、其折の談話を記述した。是が實に私の所謂文獻なのである。クレメンスは其の記事を國際的マートエイン協會の例會で報告して其會の傳記輯録中に於て出版したのである。題して『追放せられた米國哲學者』といふ。實に一九三七年の出版にかゝるものである。初稿は其の前年即ち一九三六年九月に公表されて居る。固より實際法律的に追放せられたのではないが、サンタヤーナ自ら其の近狀を之に擬したものであらう。

クレメンスは多年 George Santayana に接近したいと欲して居たが、何人も其の居所を告げるものがなかつた。彼が二十年も教鞭を執つて居たハーヴァード大學宛に手紙を送つて見たが、空しく返戻された。倫敦にある其の取引銀行に質したがやはり判らない。英米の人名録 (Who's Who) を繙いたが、其の宿所を記してない。種々の人に尋ねて種々示唆を受けたが、何れも無効に歸する。近代の世界で斯くまで身を隠すことがありさうにも思はれない。巴里で死體假收容所を通過する際之を探して見たが見當らない。刑務所や精神病院をも聞合せたが、

まだ此所には其の名聲が達して居なかつた。

其後氏は羅馬に旅行することとなつたので、其時には最早詮索を断念して、此の哲學者は新聞にも身を昧して何處かで他界したか若しくはフイジカサモアに行つて土人に哲學初歩でも講義して居るのかと思つて居た。然るに十月（一九三五年のやうにも思はれるが、後に記す所によれば、一九三五年サンタヤーナの小説の出版以前でなければならぬ）の或朝ピンチオ丘陵を散歩する際一舊友に遭遇し、共に此地の文士に就て談話する際、端なくもサンタヤーナが現に此の「永遠の都」に於て靜かに餘生を送りつゝあるとの報道に接した。其の友の言によれば、「サンタヤーナは一八六三年西班牙のマドリッドに生れた。父母共に其國人であるが、九歳の頃米國に移り、ボストンに定住することになつた。其地で教育を受けてハーヴァード大學に入り、一八八六年B・A・となり、後二年間伯林に留學し、歸來母校の教職にあること二十餘年、一九一〇年ジェイムスの歿後は此の大學に於ける最著名の哲學者となつた。」といふ。

「其の初著は何か」といふ間に對して友は、「知らるゝ通り氏は詩を好み、多分一八九四年に『詩歌集』(Sonnets and Other Poems)を初めて出版した。此年また『理性の生活』(Life of

Reason)の第一篇『常識に於ける理性』を出し、以後諸著を公にしてから一九一二年に、世人に惜しまれつゝ、其職を退き、爾後歐洲を遍歴しつゝ冥想し讀書し著作し、最近十年間羅馬に止まつて平靜なる生活を送りつゝある。」と答へた。

クレメンスは即夜サンタヤーナのホテルに電話をかけたが、其の受附から、氏は決して自己では電話に出ないといふ答を得たので、明夜の晩餐に招待する旨を取次がせた。翌朝氏からの通知には、自分は夜分外出しないから寧ろ午後一緒に喫茶に行かう、とのことであつた。

四時には氏はタキシでクレメンスを訪問し、見晴しのよい一旗亭に案内してくれた。クレメンスは其印象を記していふ。「氏は中脊のゾングリした格好で、西班牙人といふよりも寧ろ米國人風であり、溫和でちつと見つめる眼さし、緩徐で立派な歩み振りである。其の沈着な様子は、其の自己と世界とについて全然平安な趣を示して居るが、恐らくは多年身を哲學に捧げた結果であらう、其の態度は最も親しむべく共に語るに楽しき人たることを感ぜしめる。」

さて此の旗亭の廣縁から羅馬の都市を展望し、夕陽の聖ピエトロ伽藍に映るさまを眺めつゝ、ラーゾアスの詩など想起す中に、サンタヤーナは話し出した。

「私は羅馬が好きです。私は獨身で又朋友も知己もありませんから、こゝで全く孤獨の生活をして居ます。此の比類のない美しい背景の下に、靜かに思索し、多讀寡作して時の移るをも覺えずといふ有様です。然も斯様なロビンソン・クルーソー的生活の中にも讀書著作をするには相當の統制をしなければならぬ。それで先づ夜は外出しないことにしました。其のために折角の御招待にも應じなかつたのです。近頃ある書肆で『近世英國書簡集』といふ出版をするに就て私にも一文を寄稿しろといはれて聊か當惑して居ます。所が適當なものがないので、私の論文をといふから、少しも増加變更を加へなければといふ條件で一篇入れることにしました。」

さて話題がポストンの近事に及んだ時に

「私は彼處に四十年以上住んで居て所謂波羅門族(上流家庭)に就て興味を感じて居ました。近頃では金持の家庭では其中に少くとも一人の狂氣染みた者が居ます、もしなければ其は第一流第三流の家庭です。」

然らば小説を書く御計畫かといふ間に對して

「さうです、今現に其を書いて居ます。ナニほんの道樂です。新英蘭の上流社會の者で歐羅巴に行つて種々の經驗をする人々を題目としたものです。其の主な人物たる、全くの新英蘭式老嬢(文字通りに解すれば發狂したナザニエルの妹か従妹となるが、もしや、廣義に解すれば其の異母妹カロラインの事となる、此方らしくもある)は實際の舞臺に現れず、たゞ他の人物の談話等に現れるのみですが、多分表面に出したよりも讀者によく分るだらうと思ひます。」

さて其を何時頃から考へて居たかとの間に對しては、

「自分は其を四十年來考案執筆して居るが出版までにはなほ數年を要すると思ふ、或は遂に出版しないかも知れないが、今まで之を執筆することによつて十分樂しみを得たから、勞は最早報いられたといつていい。」と答へた。

話題がポストン人の銜氣に移つたときサンタヤーナは曰ふ。自分の父はセルヴァンテス、カルデロンの民主的雰圍氣に養はれて居たから、ポストン人が自ら愛蘭人よりも紳士的だと誇る理由を解し難いとして居た。或日さる貴婦人が「西班牙では何時も一等車で旅行します」と言

つたのに對して、自分は三等車による旨を答へ、驚いて聞き質すので「エ、三等車です、何故といふと四等車がありませんからね」と。斯くて話題は漸次滑稽ユーモアの方面に移つて行つた。

さて話題は更に近代の心理學者に轉じたときサンタヤーナは次の如き意見を述べた。即ち曰ふ。「心理學には明かに二種が區別せられる、一は科學的或は生物學的で又學的行動主義的である。一は文學的で人々の有する直覺に基くものである、ジェイムスは其の方面の達人だつたが、將來婦人は之に卓出すべきものである。」と。

心理學から話は自然に哲學に移つたが、其の何派に屬するかとの間に對して、答へて曰ふ。「自分は常にアリストテレスの弟子である、彼は既に哲學的智慧の基本を明晰強力に表現したから今日に於ても之に加へる所は無い。」と（此事は早く『理性生活』中にも説いてある）。

さて轉じて其の幼時が幸福であつたか如何との問となつたが、之に答へて曰ふ。

「私は九歳の折母に伴れられてポストンに來ましたが、其折は英語を一語も知りませんし、又家庭では西班牙語ばかり話すので此處で教へられる機會もありませんでした。幸にポスト

ンの幼稚園に送られて、全く書物を離れて耳と口とから稽古したのでしたが、是が今でも外國のアクセントなどのない原因でせう。然し最も多く影響を與へたものは家庭に於ける遙かに年長の兄姉です。私は何も遊戯などはせず、午後や夕方は書を読んだり繪を描いたりして居ました。特に宗教や建築、地理に關する書物を貪り讀みました。」

さて秋の日も暮れて聖ピエトロの大堂も臙になつたとき話は詩に轉じて、サンタヤーナが一九一一年戰歿學生を詠じた詩が、其子の戰死を歎く母親に慰藉となつたことなど語りつゝ、又哲學者の噂話となつた。是は直接にサンタヤーナに關係ない事であるが、有名なジェイムスの側面觀であり、又話者自身をも現すものであるから、次に之を抄録する。

先づジェイムスの様子に就ては、寧ろ短軀であつたが直立的で元氣よく、鬚深くして男性的であつた、几帳面なのよりも寧ろ少し下卑た言ひ方を好み、粗野な卑近な句でも活々として居ればよいとして居た、といふ。さて人氣如何の間に對しては答へて曰ふ。誰でも彼が好きで、其の御人好しと突つかゝる氣象とを喜んで居た。いはば波羅門族の間に在つて愛蘭人的な人であり、大人物らしい威嚴はなかつた。人々は其の突飛な意見や其の缺點を包み隠さぬ所を喜ん



だ。妙な癖があつて、屢々講義の途中で急に手を頭に載せて、「一體僕は何を講義して居たつけ」と言ふ。講義中窓の外を眺めることが好きで、終講の鐘が鳴ると次の時間まで自分が自分の物になるのが嬉しうに見えた。然し時々は鼓吹されたやうになり、頭を手を倚せて金言佳句を續發する。其は繪畫的で心情から湧出した清新なものであり、善惡兩方の知識が豊富なものであつた。其間には面白い説明を交へ、明快に疑惑を自白し、本能的な選擇を述べたり、時には深刻な學識の斷片を示し、折々は又單純な智慧と物思はしげな敬虔に富む思想で何人も有する伴らざる又人間らしいものを説くこともある。

クレメンスは此の楽しい會談の後辭去しようとしたら、サンタヤーナは其の手帳へ所謂「セメント」と稱せられる語を書いた。曰く

「理性の最良なる果實は我等が如何に非理性的なるか、を知るにあり、哄笑と謙讓とは之に伴ひ來るを得べし」

以上 Number Five of the Society's Biographical Series と稱するパンフレットの George Santayana: An American Philosopher in Exile に據つて敘述したが、此文は豫めサンタヤ

ーナ自身の校閲を経たものと記してある。而して其は『現代米國哲學』中の一編「我が意見の略史」と稱する自敘傳と對照すれば、種々之を補足する所を知ることが出来る。此文は自己の特殊の經歷が如何に相錯綜して其の意見を構成するに至つたか、を示したものであるが、今は其中主として其の傳記に關係する部分を抄録する。

先づ其の父母は、曩の會見談にある通り、共に西班牙人であるが其の關係は頗る複雑である。其の父と母の父とは共にフィリップスの官吏であつたが、其の母は初め先づ米國ボストンの富豪に嫁して三子を設け、必ず之を米國で教育する事を夫の生前に約束して居た。其後此の未亡人は西班牙マドリッドに旅行し、折から世界を遍歴して其の本土に歸還したサンタヤーナの父と結婚し、こゝにサンタヤーナを生んだのである。然し母は先夫との約によつて其の三遺兒教育のためボストンに歸り、サンタヤーナは暫く父と西班牙に止まつて居たが、後九歳の時單身母の許に移つて其地で教育されたのである。斯くて全然新たな英語の教育を受け、一八八三年二十歳の時始めてマドリッドに父を訪うたが、既にヤンキー的となつた米國大學一年生は其の生地に対しては却て異邦人の感を有するに至つた。爾後英語によつてのみ意見を發表するやう

になつたが、元來大學の講壇に立つことを期せず、又一應古今の諸語に通じては居たが深くは之を修めず、専ら慣用の英語によつて著述したけれども、然し之に拘らず、其の思想は却て英國の學風とは離れて居たのである。

其の一家は名義上皆加特力教徒とはなつて居るが、其母は理神論の立場から、神はたゞ世界を創造したのみであるとして居る。父は今一層自由で神を離れ、凡て宗教は空想に過ぎずとして居る。サンタヤーナは其の意見に一致して居るが、然し空想は空想として輕んずべきものではないと見て居る。斯くして、とにかく加特力教的教義や神學が先入主となつて居るから、初めは其の見方に従つて、大學の先生でも、ジェイムスは唯物論者、ロイスは唯我獨在論者だときめ込んでしまつた。なほパーマー及び後には伯林のパウルゼンから哲學史上の諸説が何れも一理あることを聞いて成程とも思つたが、然し何か一説を奉じたくも感じて居た。後には寧ろジェイムスの影響を長く受けたと思はれるが、初めは相應にロイスに惹きつけられたといふ。殊に其の害惡の存在に關する論辯には動かされる所が多かつたが、然し其の事實を歪曲して樂天觀的説明に歸する所に不満を感じざるを得なかつた。斯る中に獨逸に赴いてパウルゼンから希

臘倫理學を聞いて初めて望む所を得た感があり、後年、教授賜暇の際英國で希臘哲學を修めてから、初めて之に就て眞に自ら得る所があつた。其の結果は、其の初著『理性生活』において現れて居る。

此書は理性と詩想との一致を説いたもので、一見少しくプラグマティズムと類する所があるが、然しジェイムスの此説とは到底一致することが出来ないといふ。但し過去のジェイムス、即ち心理學を講じて現實の經驗を重んじ唯物論的心理學を説いたものはサンタヤーナに終生影響した所である。後年のプラグマティズムは文學的空想的心理學を以て現實を無視するの恐れがあるものであつて、實在論者たるサンタヤーナの到底承服し難い所である。

サンタヤーナは自己の意見を略敘しつゝ、讀者が或は之を以て哲學よりは寧ろ詩歌に近いものとするだらうと豫期して居る。其の所説には論理の精鋭なる所もあるが、一面また空想の奔放なる所があることは掩はれない。

私自身は、從來其の哲學説に就ては遂に首肯し得ない所が多いやうに思つて居たが、其の小説を閱讀し、又其の告白によつて世間の學徒を冷眼視する所を見て、其の眞に深い知性の人た

ることを悟り得た。後日閑を得たら、再び其の舊著を読み直してみたいとおもふ。そして此の漫録も其の小説『最後の清教徒』（邦譯もある）を解するに當つて多少の参考となるかと思ふ。

（『最後の清教徒』に就ては『書・人・旅』に書いてある）——一四・五知性——

### 『古事記傳』と『難古事記傳』

讀書日記の續篇を矢繼早に要求せられて、前文のサンタヤーナに比することは不倫であるが、とにかく悠々自適の生活を送る筈の退隱者は頗る當惑した。近頃或る原稿を作成するため若干典籍を涉獵したことはあるが、此の如き詮索的讀書は眞の讀書の部類に入らないであらう。少し前に読んで益を享けた書物には、秋山謙藏學士の『日支交渉史研究』などがあるが、私は之に就て讀後感を書くだけの素養がない。たゞ丁度其頃偶然思ひ立つて『古事記傳』を通讀したので、是から話題を導き出さうと思ふ。

古事記については私は専門上、他に説く資格などを具へては居ないが、然し今まで全く縁なき衆生（少し不適當な語だが）であつた譯でもない。四十餘年前第一高等中學校で久米幹文先生

から大八洲史といふ書物の講義を聴聞したことがあるが、此書は専ら古事記中の史實を其のままに假名交り文に抄録した先生の自著で、今日の所謂現代譯でもなく又古事記物語でもなく、古事記其のものを原形を離れて読みよいやうに書き直したものである。隨て之によつて我々は容易に此の古典に親しむを得たのであつた。次で大學に於ては黒川眞頼先生から古事記其のものの教授を受け、和本大字の古訓古事記をテキストにして、其の初めの方即ち多分神代卷全部と其後一部分とを修了した筈である。當時私は他の方面に興味が向いて居たから、其等の教室では餘り勤勉な學生ではなかつたが、然も兩先生の特色ある講義振りは此の古典の精神の幾分かを窺はしめるに餘りあつた。久米先生の講義の中では、大國主神の難を救ふ鼠の歌に「内者富良富良外者須夫須夫」とあるのや、仁徳天皇の條に枯野といふ破船の焼遺つた木片で作つた琴を弾し給ひし時の歌に「那豆能紀能佐夜佐夜」とあるなどが今だに記憶に残つて居る。黒川先生からは、八百萬は數ではなく「や」は「彌」の意だといはれたことが、其時よく耳に響いたやうである。何れにしても甚だタワイもない事であるが、之によつて何となく古典の世界に逍遙する心地になつたやうに思ふ。大學では圖書館で少しく古事記傳も抜讀みをして考證の精密

なのに驚歎したが、何分當時は他に専門の方で學ぶべき事が多かつたから、斯る雜讀の暇は無くなつてしまつた。爾來本文だけを大雜把に理解する程度に止めて置いたが、近頃偶然思ひ立つて浩瀚な古事記傳を全篇通讀して見た。其れは實に佐々木博士のある講演で眞淵の萬葉集と宣長の古事記との話があつたのが、動機となつたのである。今更ながら其の偉大な文獻學的勞作たることを痛感したが、私の手許にある翻刻本には、終りに難古事記傳が附載してあるので、讀んで此に至つて又特殊の興味を覺えることを得た。そして此に漠然兩書の方法について比較論評したい念慮が動いて來た。然しながら、之を眞の學術的論文とするには幾多の研究を要する。然も恐らくは其の機會も容易に求められないであらう。たゞ讀後感の形でまだ體系化しない想像を説くことは出来るであらう。

私は今勿論古事記傳を批評したり乃至難古事記傳との優劣を判定しようなどとは思はない。殊に古事記其のものに就ては何事をも言はうとするのではない。但し古事記傳に於ける古語の解釋に就ては、私はたゞ之を受容れるより他に術はないが、難古事記傳の序文として千家尊孫

の言つた通り「梓弓本居の翁は古語をとくにさちあり」であつて、「香ぐはしき橘の翁は古傳の本く意をさとるかたにさちあり」となるであらうか、もし本居の説は「たゞかたりごとのうへにのみなづみて、惑へるふし」があるとするれば、其れは果して如何なる點に存するのであるか、といふことを單に方法論上の問題として考察しようとするならば、其れは必ずしも僭越の業ではあるまいと考へるのである。

本居宣長の諸論著、例へば玉勝間、馭戎概言などに就ては、從來其れが我國の事物の特質を尊重する餘り、外國の研究即ち漢學などを一概に排斥する如き方面のみが私の注意を惹いて居た。そして其れが學術研究法として果して全く是認せられべきか、といふことには疑問を挾まざるを得ないやうに思はれた。古事記傳に於ても亦固より幾多のかゝる事例に接するが、今は其の方面に關しては最早多く私の注意を惹かなくなつた。隨て其れが同様の論據から古事記を擧げて幾分書紀を抑へる氣味があることに就ても、其の是非に關しては敢て深く推究しようとは思はないが、順序として少しく之に觸れて行かう。蓋し守部の辯難も多少此點を動機としたものであるかも知れないからである。實際書紀の如き正史に對して、幾分たりとも輕重の言

を爲すことは、其の本旨とするところでは無かつたかと思はれるが、然も是は其の古語尊重の論旨の餘勢で已むを得なかつたのであらう。宣長の見る所では、古事記は最古の歴史で専ら古代の語言其のまゝを寫し取つたものであるから、其所に意事言の三要素が完全に一致することを得たといふのである。然らば斯く正しく傳へられた古史の存在するに拘らず、八年の後に別に書紀を編纂せられるに至つたのは何故であらうか、畢竟古事記に缺陷があつたためではないか。此疑問に對しては本居は明白に之を否定し、時代の趣味に基いて故らに漢様の書振りを要したから別に此修史事業が企てられたのだと断定し、更に書紀編纂後なほ古事記の重んぜられたことは、後世に於ても萬葉集其他に屢々其の引用せられることによつて證せられるとして居る。此の論據はあくまでも理論的である。然も筆を此に止めず、更に書紀の缺點を擧げて第一にはわざ／＼書紀に日本の字を冠したことを失態とし、第二には漢様に泥みて種々こざかしき理窟を述べることをして古意を失することとして居る。此點は恐らく物議を醸したものであり、宣長の學說に就ては假借ない批評をするが、然も其の偉大な學問を尊重する守部も、其人の迷惑を恐れて連て窮迫するを欲せず反復の論議を試みることを避けた所である。此の如く漢學を

單に理窟として悉く排斥する態度は如何にしても偏狹の嫌ひがないとは思はれるが、後世の理窟を以て古代人の心理を推測する研究法の危険なることは正に其の唱へる通りである。即ち古意を事實として傳へることを目的とする點に於て、本居の古事記の文字尊重はまた理論上正當といはねばならぬ所もある。而して此の如き見解に達し得たことは、畢竟其の批評的精神の優れたことに歸せなければならぬ。本居は常に理窟を排するが、其は古人の傳説を眞に解し得る方法を求めるがためであつて、此の如き方法を考案すること其自らは既に明かに銳利なる批評主義の賜物といはねばならぬ。此の批評的精神の發現は、古意解釋の理論に於ては其の師眞淵をも論駁して憚らない所に於ても現れて居る。固より古意を重んずる餘り、漢學の理論を悉く排斥する趣がある點は、一種の獨斷家反批評家のやうに見える所であるが、其の文獻學者としての態度は、明かに批評的精神に富む知性人たることを示して居るのである。

然も或點から見ても一層批評的に見えるものは即ち橋守部の意見であらう。守部が宣長の古語解釋を尊重しつゝ然も之に一致し難かつた點は、其の古事記傳説の取扱方に於て現れて居る。本居は其の漢様排除と古語解釋との方法によつて傳説中の各語文を全く其の言葉通りの意味に

解して、毫も之を漢様な理論に一致するやうに解釋することを許さない。例へば天とか神とかいふ言葉は、凡て其の語言のまゝに解して、天は現に上に見える空を構成する實の國土、神は現人として其まゝ現れ得るものと解せられ、漢土に於ける如く天を上帝と見たり或は神を無形とし神靈としたりする見方は此の眞意を誤つたものとして之を排斥する。即ち古事記は神典であつて、其中に記されて居る傳説は、其の言葉通りに受け容れらるべきものである。然し傳説の中には往々矛盾があつたり、今日の知識では理會し難いものが澤山ある。是等を如何にすべきか。答へていふ、「凡て漢籍の説は此天地のはじめのさまなども何も皆凡人の己が心もて如此有べき理ぞとおしあてに思定めて作れるものなり。此國の古傳へは然らず、誰云出し言ともなく、たゞいと上代より語り傳へ來つるまゝなり」と。又曰く「凡て理のかなへりと思はるるを以て物を信るはひかごとなり。そのかなへつるもかなはぬも實には凡人の知べきに非ず」と。其故に普通の知識には解し難き事も神々の仕業と思ひ又悠久な古代の傳説として其まゝに信すべきものである、と。此の如くして遂に一種の非合理主義を主張して、批評的精神と遠ざかつて來たやうな結果を生じた。實は其の根柢には實證的精神が存するもので沒批評的獨斷主義と

は趣を異にする所があることを認められるのであるが、然し守部の鋭利な批評主義からは此點に於て異論なきを得ないのである。

守部も亦古事記を神典として尊重し、其の傳説は古人の生活と意志感情とを其まゝに保存したものと見て居る。然しながら其が古人の傳説である限り、其が古人の表現法に従ふものであることを認める。而して古人の説話法は、今人の如く單に事實のみを語るを以て足れりとせず、其の事實を傳へ易いやうに又解し易いやうに、或は譬喩を用ゐる或は假設の説話を交へることが常である。之を談辭といひ、又幼談或は稚談といふ。即ち兒童をして倦怠せしめぬためには乳母がお伽話を述べることを要するやうに、古代の傳説家は種々の説話を以て事實を修飾し、之によつて民衆の記憶と理會とに便する。此に神祕の説話も生じ之に伴ふ祕密の儀式等を生ずるのである。其故に此の如き假話の譬喩等を一々實際の事實とすれば、其はたゞ奇怪で矛盾に富むものと見られる結果に終るのである。此の如くして守部は一方には宣長の解釋を論理的に窮追して其が事實に一致せざることを明かにすると共に、他方には又其故を以て普通の事實以外の神祕を其中に看出さうとして居る。前者よりすれば徹底的合理主義の如く、後者よりすれば

一種の超自然論者であるやうに見える。是故に古事記傳に於て傳説を悉く事實と見るのに對して、守部が之を單なる譬喩と見る點は、其の論理的批評的精神を發揮して本居以上の知性人らしくも思はせる所がある。例へば古事記傳に「天浮橋は天と地との間を神たちの昇り降り通ひ賜ふ路にかゝれる橋なり云々」といふに對して、其の難には「例の幼がたりと云ことを知らぬなり」と喝破して居る。然しながら一方には又此の天浮橋を以て現實界と幽冥界との交通路を象徴するものとするから、其の結果幽顯間の神祕的關係を認めることとなり、「梯なくては昇降りする事あたはざる、世の凡人ならばこそあらめ、彼幽顯の隔をさへ自在に出入せさせ給ふ大神の、さる煩はしき物を何にかし給はむ云々」と論ずる。即ち其説は一種の非合理主義神祕主義に歸するやうであるが、更に深く考へれば、其は畢竟合理主義の極致であり、批評的精神の結果に他ならないといふ事を知り得るのである。然も此の如き譬喩を譬喩として解することは、決して今の人の理窟によつて初めて知り得たものではなく、既に古人の知悉して居た所である。此事を守部は古傳説には本辭と談言とあるが「當昔の世の人々は是は本傳ぞ、此は談辭ぞと各其差をよく心得居たりければ煩はしとも思はず、其が隨に語り傳へたるなりけり」といふこと

で裁斷して居る。そして「其談辭といふにも、殊更に添へたること神の御上を姑く凡人の上もて語れると又一の昔話を語り入りなどせるとありて其狀一樣ならず」と區別してある所は、かなり精細な分析を示して居るものと言つてよい。

さてかく比較して來ると、曩に尊孫の序文にある通り、「本居の翁は古語をとくにさちあり」「橋は古傳の本く意をささるかたにさちあり」と批判し得るやうにも思はれるが、然も既に述べた通り本居が傳説を事實と見ることは全く批評を経ない獨斷ではなく、橋が傳説の眞意を説くに及んでは、遂に理論的批評の世界を超越するを要することとなつて居るのである。隨て批評の能力に於て未だ遽かに兩者に軒輊を附することは出來ないと謂はねばならぬ。兩者に共通なる所は、共に古事記の傳説を貴重なる材料とする點であり、たゞ此の傳説を解釋する方法に於て批評の方向を異にするのみである。之がため本居は古傳説を悉く自然的事實と見て之を理論化し或は解釋することを漢様として排斥する態度を生じ、橋にあつては此の傳説の成立事情を批評的に分析し然も其の傳説の根柢に神祕の奥義を求めて超自然的非理性主義を説くに至つたのである。然しながら兩者の自然主義的排理説も合理的超自然主義も共に創意的であり、自由

思索に因するものであり、毫も後世の説に見る如き迎合附和の痕跡を示さない。其の行論が遂に排理排外に導くに至ることや、神祕の論據がなほ未だ明晰ならざること等の點は人々意見の相違する所である。此と彼とは自から別様の標準によつて考察すべきものであるであらう。

以上の比較も論評も私自身は未だ以て十分だとは思つて居ない。そして人々の既に十分説き盡した事を物珍らしく書き立てたものに過ぎないかも知れぬ。たゞ、假りに此の如く兩者の手法態度を比較對照し得るとすれば、兩者の研究法に於て我々は、傳説を文字通りに解釋するものと其の文意を分析するものとの二つの見方が明白に現れて居ると思ふ。之を假りに語言派と意味派とでも名づけようか。ヘーゲルが少時學修した神學説の中、一方には聖書を文字通りに解釋して然も超自然主義立脚地にある一派と之を現實的理論と道德とに照して理會する十八世紀の啓蒙的合理主義とが存在したが、ヘーゲルは其の何れにも満足することなく、遂に宗教や神學に就て別種の見方を持つるに至つたといふことは、其の傳記と著作とに於て周知知られる所である。其の神學論の是非は暫く措いて問はない。たゞ此の二派の對立は會々古事記傳と難



古事記傳とを通讀することに於て端なくも想起せられざるを得なかつた。而して十八世紀の神學論争が何れも根柢に於て合理主義を含有する如く、本居橋兩家の對立に於ても、我々は兩者の根柢に於ける知性的特色を認知し得る。即ち古道を尊重することと理論を徹底することが一般に決して矛盾するものでない、といふ事も亦我々は此の兩知性人に於て明白に實證せられたやうに思惟するのである。

——一四・六知性——

キェルケゴールとトレンデレンブルク

又讀書日記を公にする時機となつた。最近閱讀した大冊には、河竹、柳田二氏著の『坪内逍遙』があるが之に就ては既に依囑を受けて讀後感を公にした。其他、寄贈を辱うして續々机上に備へられたものは頗る多い。『木綿以前の事』（柳田國男氏）『幕末愛國歌』（川田順氏）『日本魂と萬葉歌人』（吉澤義則氏）『正法眼藏の哲學私觀』（田邊元氏）『幽玄とあはれ』（大西克禮氏）『英國の曲線』（出隆氏）などそれ／＼教を享けた所が少くない。其他哲學上の著譯にして廣く世に薦むべきものも許多あるが、今一々之を擧げる遑もない。此間自分で勉強したものを探すと、餘り吹聴する程のものもないことは甚だ恥しい次第である。たゞ近頃帝國大學の研究室で折々キェルケゴールの日記を通讀して居るから、其に就て一寸意を惹いた所を記して見

よう。

キェルケゴールはニーチェと同じく既に三十餘年前に一たび我學界にも傳へられて居たが、近來新しい哲學説と結付いて盛に喧傳せられて居る。之に關する豊富精確なる知識を有する人も頗る多いから、横合から口を出すことは、少しく憚られる氣がしないでもない。實際私も昔ヘフディングの評傳を読んだり、其頃圖書館にあつた二三の獨譯書の一部を覗いたり、又和辻氏の論著を通讀したりしたこともあるが、紹介を離れて原典に就くと十分諒解することが出來ない所が多く、其後十數年前獨譯の全集をも購求して折々瞥見するが、何だか恐ろしいやうな氣もする。ある部分に對して率直の感を述べて、何だか被害妄想の患者のやうな氣がする、などとうつかり口をすべらしたら、定めて諸方の御叱りを受けるだらうと信するが、國學者に向つて源氏物語を非難したり、獨逸文學者に對してゲーテは不良少年で又不良老年らしい、などといつたりすると同様の冒険で、そんな無益な人騒がせをする積りもないから、温順しく其の思想を理會し、之によつて出來るだけ多く啓發せられたいと心掛けて居る。此際偶然研究室で近刊（一九三八年版）の日記英譯に接したので、折々卒讀して見て居るがまだ卒業しない。

然し別に全部讀み通す必要もないから、其中の或點に就て話柄を求めて行く。

此書は「ゼーレン・キェルケゴールの日記」といひ、アレクサンダ・ドリュー (Alexander Dru) の抄譯で其中には一八三四年から一八五四年まで、即ち初めて文壇に出た時から歿前一年に至る間の記録が載つて居る。之を其の經歷や著書等と一々對照すれば種々興味ある記事もあるであらうが、私はたゞ其中哲學史に交渉を有し得る部分だけに就て面白さうな種を拾ひ集めて見るのである。

其の一八四四年の條に次の如き記事がある。即ち、「デカルトの我思故我在といふ命題は論理的に言へば言葉の戯れに過ぎない、何者、『我在』とは論理的に言へば『我思惟しつゝあり』若しくは『我思』といふことに他ならぬから。」といふのである。斯く存在と思惟とを同一視することは明かにヘーゲルの論法と謂はねばならぬ。キェルケゴールは普通辯證法神學の祖と目せられるが、此の辯證法はヘーゲルに於けるものとは大いに趣を異にして居るし、又實際キェルケゴール自身はヘーゲルに對して大なる論敵となつて居た。そして此事に就て後に話題を求めて行くのが實に此篇の眼目なのであるが、然し其初めに於ては、周知の通り、キェルケゴ

ルが全くヘーゲルの影響下にあつたといふことから話を進めて行かなければならない。當時丁抹に於てヘーゲルを傳承したものはハイベルグ、マルテンゼン等があつたが、キェルケゴールがコーペンハーゲンの大學に於て受けた教養は此の思潮に屬するものであつた筈である。デカルトに對する批評が此の精神を示すことは怪しむを要せぬやうに思はれる。

然しながら一八四四年には伯林では既にヘーゲル哲學の霸權が昔日の如くはなつて居なかつた。一八三一年ヘーゲルの歿後、數年にして學派は分裂し、自然科學は漸次勃興して人々は最早昔日の思辨哲學を顧みざるに至つた。一方に一八四一年には昔日の親友で現在仇敵となつたシェリングが、其の講座を襲いで所謂實證(肯定)哲學を説いてヘーゲルの否定哲學を否定して居る。丁度其頃キェルケゴールは伯林に遊學したのであつて、初めはシェリングに傾倒して、其の日記にも「シェリングの第二回講義を聞いたことは無上の喜びである云々」とある。何故に斯く喜ぶかといへば、そはシェリングが「現實」といふ言葉を哲學に結付けたからである。然も其翌年其弟ペーテルに送つた手紙には「シェリングはたゞ饒舌の徒に過ぎない」といひ「シェリングが伯林で講義しなかつたら自分は此地を去らなかつたであらう、シェリングが喋

舌らなければ、私は何も旅に出なかつたであらう」とまでいつて居る。即ちヘーゲルに満足しなかつた現實遊離の弊がシェリングに於て一層甚しいことをキェルケゴールが次第に感得したのである。此の如き状態に於てデカルトに對する此の如き評言を下すことは聊か解し難いやうであるが、然し是は先入見の容易に去り難い一の例と見るべきであらう。尤もデカルトに對する不満は此の場合に於ても其の非現實な所にあつたのであらうが、とにかくこゝでは之を論ずる場合にヘーゲル的一元論を以てした。然るにヘーゲルに對する反對は遂に後に至つて完全に現れるやうになつた、是が次の話題となるのである。

既に述べたやうに、キェルケゴールは初めハイベルグの仲間に入つてヘーゲルに傾倒したが後ジツベルン、モエーラー等の影響によつて全然之と反對となるに至つた。モエーラーは大學に於ける哲學史の教授として活躍して居たが、同時に詩人でもあり、初めはヘーゲル派であつたが、後其の先輩同僚たるジツベルンと共に思辨哲學に反對して實證主義或は寧ろ人間本位主義の立場を取つてゐた。早く既にキェルケゴールの才能を認識し、病んで起たぬことを知つたとき、態々其の死床に於て先輩ジツベルンを通じて其の後進たるキェルケゴールに別を告げて

居る。是程是等三人者は共通の思想を有するものである。而してキエルケゴールに重大なる影響を與へたるものとしては、其の父及び有名な婚約而して破約したレギネの外には、此のモエーラーを學ぶべきものだトドリュエーも言つて居る。斯うしてキエルケゴールの眼はヘーゲル以外に轉ずると共に、自から其の反對の學者に向はざるを得ないことになつた。シェリングは先づ其の選に當つたものであつたが、之に就て直ちに不満を感じたことは既に述べた通りである。但し實は終生其の影響を脱し得なかつたことはヘフディングが指摘した通りであると思はれるが、其他別に明白に賞讃措かざる所の人を有して來るやうになつたのである。其は即ちトレンデンプルクに他ならない。

一八四五年の日記を見ると、其中に次の如き筋書が記してある。

始初の辯證法

下界の一場面

登場人物。ソクラテス、ヘーゲル

ソクラテスは漣立つ河流の傍に坐して涼を取り水の音に耳をすまして居る。ヘーゲルは机に

倚つて對坐し、トレンデンプルクの『論理研究』第二卷、一九八頁を讀みつゝ、ソクラテスに何事か訴へんとして進む。

ソ。我々は我々が假定と稱するものに對して全く一致せず論議を始めようか。それとも、一致して始めようか。

ヘ。――

ソ。君はどんな假定で始める積りですか。

ヘ。全然何物でも無いものから。

ソ。そりや出來さうな事だ。イヤ恐らく君は全く始めないだらう。

ヘ。私が何も始めないツて、あの二十一卷の書を著した私が。

ソ。そりや随分大きな犠牲を捧げたものだね。

ヘ。然し私は無から始めたのです。

ソ。即ちそれが、何物からか始めたことではないか。

ヘ。イ、エ全く逆です。其りや全書冊の最後で始めて理會せられることです。其の書冊中に

論じ盡したものは、實に一切の學問、全世界史等……。

ソ。どうして其の困難を克服することが出来るだらうか、なぜといふにきつと澤山の物を魅するやうな珍らしい事柄が起つたとしなければならぬから(辯舌上の一誤用)。そして君の知つて居る通り、私はあの修辭家ポロスにさへ五分以上は喋舌らせないのに、君は二十一冊を喋舌らうとする。

元來キェルケゴールはソクラテスに關する學位論文を草したことがあり、自ら「ソクラテスの方法で始める」と言つて居る。其の所謂辯證法もソクラテスの辯論法に據る所があるといつてよいから此の一戯文はソクラテスを以てヘーゲルを揶揄したものであらうが、此中に一寸注意を惹く點は、ヘーゲルがトレンデンプルクを読んで居る、と書いてある點である。トレンデンプルクはヘーゲルの歿後伯林大學の哲學講座の主任となり、其頃は既に隆々たる名聲を得て居た人で其の立場は正にヘーゲルと正反對であり、其の『論理研究』には辯證法に關する周到な批評が載つて居る。其の第二卷一九八頁といふのは範疇の一門たる様相の論のある所で、必然性の意義を論じ、或物が他物となるといふ可能性は既に一の否定を包括する、Aが主張せ

られればそれで非A(其の反對)は試みられて居る云々など書いてある。此の部分を冥途でヘーゲルがどんな顔をして讀んだらうかといふことが、此の筋書に示されて居るのであらう。

然しとにかくトレンデンプルクを引合ひに出すことは一寸面白いが、果然一八四七年の日記には次の如く記してある。「トレンデンプルク程に私を益した哲學者は他に無い。『反復』を草しつゝある間には私はまだ其書を読んで居なかつたが、今之を讀んで見ると一切が明瞭になつた。私は彼と妙な關係を有つて居る。長い間私に興味を起して居たものは範疇の論であつたが今トレンデンプルクは此の範疇論に就て二個の論文を書いて居る。そして私は其を大なる興味を以て讀んで居る。嘗て私が初めて伯林に赴いた時にはトレンデンプルクは私が初めから聽講しようとは思ひも寄らなかつた人であつた——彼はカント學者といふことだつたから。そして其時は私は此人に就て學ぼうと言つた同行の若い瑞典人を全然無視して居た。嗚呼餘りにも愚妄な意見に囚はれたこと哉。」なほ『非學の後書』中にはトレンデンプルクを評して「健全に思惟し、希臘的精神によつて好適に影響せられた人」と言つて居る(ヘフディングによる。但し其書に九八頁とあるが其の頁附は一寸判定出来ない)。

さて斯様にトレンデレンブルクを賞讃するが、何所まで其説に従つて居るのか、私には今其著述に就て評論する邊はないが、同じく日記を見ると一八四九年の項に「エキジステンシア」といふ概念を論じてスピノザが之と「エッセンシア」とを同一視したことや、カントが之を區別したことなどを擧げて論ずる所、是が例の實存哲學の眼目だらうが、其處に見える論法には多少トレンデレンブルクを想起せしめるものがある。然も此の如くヘーゲルに代つて此の特色ある情熱家の意に合した伯林大學教授は他の人々から如何に待遇せられて居たかといふことを考へれば、人の毀譽褒貶は様々なものだと思はせるものがあるのである。

先づ彼がヘーゲル歿後漸次伯林大學の首腦となつたことはオイケンの自傳中伯林遊學の條によつても明かであるが、三一年ヘーゲルの歿後、三三年助教、三七年教授となつた當時はまだ單なる一學究で、大學を背負つて立つに適せぬやうに考へられて居た。さればこそ其時の國王フリードリヒ・キルヘルム四世はヘーゲルに代つて一世の木鐸たるべきものを求めて、遂にヘーゲルの論敵となつて居たシェリングを起用することに定めたのである。即ち四一年にはシェリングは今まで吳越の間柄であつた敵地へ老軀を提げて乗り込んだのである。此時トレンデ

レンブルクは如何なる心境に在つたか知る由もない。恐らくは隱忍自重一教授として孤壘を守つて居たのであらうが、やがてシェリングもまた輿望を滿たすことを得ず、國王の夢みる昔日の羅曼派哲學は時勢に合はずして、漸次衰退し、新時代の科學的實證的精神は却て希臘哲學上其の代表となれるアリストテレスを回顧するに至り、之と共に嘗て單なる一學究と目せられたトレンデレンブルクを、其の復興者として登場せしめるに至つたのである。キエルケゴールが初め之に注意せず、後にヘーゲルの辯駁者として興味を有し來つたことは、時勢の轉變の妙を示すものと謂ふべきである。

然しながら、トレンデレンブルクの如き生眞面目な哲學者がキエルケゴールの意を惹くことは、やゝ不適當の觀がないでもないが、然も此の哲學者は奇妙にも屢々一見反對の性格あるらしい人々から推賞せられて居る。オイケンが伯林大學に於て其の庇護を受け、却てゲッティンゲンのロッツェに好意を表して居ないのも既に學說の性質から見ると意外の感がないでもない。更に最も奇とすべきことは、彼のカントの學說中第三可能性の論に關してクローノー・フィッシャーと意見を異にした際、當時伯林大學に學んで居たクレービカーといふ少壯學者は哲學雜誌

の上に於て、盛に此の先生の味方をして居る。クエービカーはズーダーマンの小説『狂亂教授』の粉本と目せられる人で、當時の實證的學風ではあつたが到底伯林大學の教授風な性格とは思はれない人であつたやうに想像せられる。然も辯論は其師を擁護するに力を盡して居る。蓋し是れ又一方にヘーゲル反對といふ點に於て一致の點を有するものであるかも知れない。

詩人的素質を有し、宗教的情熱を具へ、然も生れながら憂鬱懊惱の氣分に満ちて居るキェルケゴールが『論理研究』の著者で伯林の大學や學界で主働となつた學究肌のトレンデレンブルクを推賞して、ヘーゲルやシェリングの如き、却て其の性情の一部に合する如き天才型の人と背くに至つたことは又學界の奇談と目すべきであらう。(クエービカーに就ては『哲學及哲學史研究』に、オイケンに就ては『哲學體系其他』に、トレンデレンブルクの論理に就ては『哲學概論』に書いたことがある。)

——一四・八知性——

## 哲學史外傳

——デカルト及びカントの觸體のことなど——

又もや讀書日記の需が急である。三伏の暑熱を都門の陋屋に送迎して、半ば困睡する他は無かつたが、然し又他に爲すべきこともないので、何かしら讀書して居ない事もなかつた。所が之を筆にしようと思ふと是れといふものも見當らない。丁度新刊書としてリッケルトの遺著(Rickert, Unmittelbarkeit und Sinnedeutung, 1939)を受取つたが、是こそ好資料御座んなれと縋いて見れば、全部既に『ロユス』などに掲載されたもので、今新に抄録すべきものは無い。たゞ緒言の中に弟子のファウストが舊師の事を敘し、そのナチ主義に賛成であつたことを強調し、又常に其の生地ダンチヒが獨逸の領土から分離したことを慨歎し、其の七十歳の誕生日に際してダンチヒ工業大學から名譽學位を贈呈せられたことに感激して、その著書に同大學

へ捧呈する辭を記して答禮の意を示した、といふやうなことを述べてあるのが一寸目についた。其の初めのナチ主義の事は、勿論ナチ政權の下に在つて其の反對者となることはない筈で、又本來獨逸文化に對して深く愛著の念を有して居たことは事實であるが、其の獨逸主義は果してファウストの言ふが如きものであつたかは幾分疑はしい。但し其の後の方にある所の、故郷グンチツヒに思を寄するといふことは當然であると思はれるし、此の地が昨今の大問題となつて居ることを考へれば、感興の深いものがある。然し此の書は此他に別に新に記すべきこともない。其他に若干雜書も通讀したが、別に記すべきものが無いから、最近ラヂオで「學界餘談」として放送したものを骨子として其の一部分を敷衍し、少しく書いて見る。何れも古い話で、又講演の性質上少し卑近に過ぎた所もあるが、要するに讀書から得た知識であるから、滿更此の題目に相應しくないことも無い。

さて此の學界餘談は諸方面の専門家が順次に話す座談會とでもいふべきものであるが、之に就て私は先づ次の如く前置をして説き始めた。

私の専門は、哲學といふことになつて居るが、此の哲學の研究には他と違つて實驗とか旅行とかいふやうなこともなく、隨て其の方の逸話とか珍談とかいふものもないので、一寸餘談の材料に窮する譯である。たゞ多年西洋哲學史の研究や講義をして居る間に、必要上學者の生涯及び其の時代等に就て多少調査したので、其れから何か話題を引出し得るかと思ふ。即ち哲學史外傳と題すべきものである。

さて此の材料たる史傳は勿論正確な事實を傳へたものでなくてはならぬ筈であるが、元來傳記にある逸話は誇張や虚構に屬するものが多く、其の眞偽を判定することは容易ではない。然し火のない所には煙は上らない譯で幾分か種子のあること若しくはありさうなことが逸話になるのであるから、或人の性格や時代の情勢を知るためには、少々怪しい話でも一向差支ない。それで此の場合には俗書も結構である。隨てやゝ小説風な傳記は固より、明かに小説と銘打つたものでも材料にはなる。中には又全然架空な哲學者を主人公にしたものもある。

此の一例としては、少し前の作にはズーダーマンの『亂行教授』を擧げることが出来る。尤も是はある實際の若い學者を粉本にしたものであるが、其の時代即ち十九世紀中頃の學界を窺知するに足りるものである。近いものにはサンタヤーナの『最後の清教徒』がある。空想の産



物であるが、中には哲學者たる著者が作の主人公たる學生の教師として現れて居るし、實際著者自身の心境を作中の人物に寓した所もあると思ふ。此の如き小説や小説的若しくは實録的の傳記歴史の他には、學者自身の書いたものは勿論重要な参考となる。特別な自傳もあり、又論著自身が自傳的となつて居るものもあり、其の他には書簡や、日記類が其の人の性行其の他の社交關係等を示す上に於て甚しく有用であり、又興味に富んで居る。

さて斯様な傳記類の例として『先哲叢談』などは最も普通の書物である。今次に私の多年講義して居る西洋哲學史の範圍に就て述べると、第一に想出されるのは、ディオゲネス・ラエルティオス（西紀三世紀頃）の希臘古代哲學に就て書いた『哲學者列傳』である。其の筆初には希臘系哲學即ち西洋哲學の元祖タレースの事が種々録せられて居る。タレースは周知の通り、水が萬物の本源だと言つた廉で哲學者の祖先となつて居るのであるが、此人は又天文學にも通曉して、或夜餘り空を仰いで星ばかり見て歩いたので道傍の溝に陥つて老婆にたしなめられた、といふ話は古くから傳つて今日誰知らぬ者はなく、哲學者の迂濶を嘲るために何時も引合ひに出される話である。そして其の晩年に年寄の冷水で、餘り長く競争を見物して居たので遂に日

射病に罹り、七賢の一人と謳はれた人らしくもない最期を遂げたと記されてあるのは、前の話と一對をなして居る。斯様に一面には迂濶な學者のやうに描かれながら、又仲々政治家でもあつたやうに傳へられて居る。即ちディオゲネスの書には、其の住地ミレイトス市の人々に對して、リディア王の反波斯同盟加入の勸告を拒絶せしめ、以て其の都市の滅亡を救つたといふことが記してある。尤もヘロドトスの歴史には多少之と反對で、波斯軍に對してイオニア族團結の計畫を策したことが傳へられて居る。それから又其の天文學氣象學上の知識を根據として、或地方の橄欖豐作を豫期し、買ひ占めで巨利を博して世人の輕侮に返報したといふ話もある。其他此人の逸話や警句が澤山ある。何が最も難しいかといふ間に對しては己を知ることだと答へ、さて何が最も易しいかといへば、他人に忠告することだと答へたのは仲々穿つて居る。或時母親に結婚を勧められたので、まだ早いと答へたが、ある時期の後催促を受けたら、もう遅い、と答へたなどは、隨分手に負へぬ代物である。尤も此説を傳へながら、一説には妻子があつたとディオゲネスは記して居る。凡て此の調子で矛盾は一杯であるが、大體最古の哲學者の性行、其の頃の哲學の概念などを窺知せしめるには十分であらう。

なほ此書からこんな記事を探せば澤山ある。例へば、エムベドクレスは、豫て世間から受けた尊信を彌が上にも高めようと、一日エトナ山の噴火口に身を投じて神化昇天したやうに見せ掛けた。所が其際脱ぎ棄てゝあつた慣用の履物から足がついたといふ傳説がある。然し又例の通りに異説も擧げてある、例へば戦車から墜落して脛を打つて死んだともあり、其の年齢も種種になつて居る。

是等自然哲學者の後に出了たソフィスト即ち普通に詭辯學者と稱せられるものに就ては、其の名の示す通り、詭辯逸話が眞偽取り交ぜ諸書に傳つて居る。之に反對して立つたソクラテスに就ても、周知の通り種々の事蹟が傳つて居るが、其れは何れも哲學史正傳の中に入るべきものである。一寸外傳的なのは其の細君との關係であらう。通常其の妻クサンティッペは驕婦悍婦の標本のやうになつて幾多の事例が傳へられて居るが、然し是はディオゲネスの書物にはあつてもプラトン其他には無いのみならず、寧ろ氣の弱い家庭夫人のやうにさへ寫されて居る。それで後世の史家ツェラーは其のために辯解し、實際は世間並の無教養の主婦に過ぎなかつたのが、畢竟ソクラテスの徳を示すために對照的に斯る惡婆に仕立上げられたのだといつて居る。

プラトン、アリストテレスといふ二大哲人に就ても多少の逸話はあるが、其中二人の性格を示し、同時に學風の相違を示すものは、其師に對する關係である。プラトンは、其著に於て見られる如く、師ソクラテスを愛慕し、常に對話の主人公として自己は其蔭に隠れて居たが、アリストテレスは其師プラトンと次第に意見を異にした所を明示した。アリストテレスが「師友は愛すべし、眞理は更に貴ぶべし」といつたことはよく知られて居るが、プラトンが既に「他の門人には拍車を要するがアリストテレスには轡を要する」といつた所を見れば、其れが相當に手剛い學生であつたらしく、其の關係は正に哲學の批評的發達の様式を示すものである。

爾後の希臘哲學は實踐的傾向に富んで來たから益々逸話的材料も多くなつて居るが、其の一を擧げればプロチノスが靈を尙び肉を賤め、肉體に關する生地とか、肉親とかを語るを好まず、無論自分の肖像などを描かれることを拒んだので、門人が竊に畫工を講筵に忍ばしめて首尾よく其姿を寫したといふことが思ひ浮ばれる。然し其のやうに苦心した畫像も今は全く傳はらないから、やはりプロチノスの方が先見の明があつたかも知れない。

さて中世に移ると此にも幾多の逸話があり、殊にアペラールと其の女弟子エロイーズとの情

話を傳へた往復書簡は後世に名高いもので、巴里にはペール・ラシェイズ墓地に比翼塚もある。尤も、此墓は後世の偽物であることは早く知られて居るが、兩人の書簡も最近の詳細な研究書 (Charlotte Charrier, Héloïse dans la légende. 1933) によれば、其の手紙なるものは實はアペラールの假作であり、エロイーズは聖女として行ひ澄ましたのだといふ事である。然しとにかく此の文通は抹香臭い中世の宗教的哲學に色彩を添へるものである。

近世哲學の祖は、周知の通りデカルトで、其の傳記も亦割合に波瀾に富んで居るが、其中の外傳的話題として其の髑髏即ち頭蓋骨の事を少しく詳述したい。身首處を異にす、とは處刑せられた人に就て言ふことであるが、デカルトの場合には、其れが誤つた追慕の念を混じた結果に他ならなかつた。其の遺骨は現在巴里のサン・ジェルマン・デ・プレ寺院に葬られて居るが、其の頭顱の骸骨は同市の國立博物館内人類學教室に保存せられて居る。私は十數年前に、當時巴里滞在中の移川氏 (臺北大學の人類學教授) から其の話を聞き、後氏の好意で其の顱末を詳記した醫學評論雜誌 (Aesculape) の寄贈に與つたのである。今次に之によつて其の概略

を記して見る。

此の雜誌の記事は博物館人類學教授エルノー教授の筆になつた「デカルトの遺物」といふものである。一九一一年學士院の一會員が、會々瑞典の科學者ベルツェリウスと佛國の化學者ベルトロとの往復文書を検した際、其中に、瑞典の化學者からデカルトの髑髏を佛國の同學者に贈與したことを記したものがあり、之によれば、其後博物館に藏せられて居た筈だが、今一向見當らぬ、といふことを發表した。是が大なる感動を惹起したが、筆者たるエルノー氏は翌日自から其の實物を携へて會員に披露し、既に久しく別室に保管せられてあつたことを明かにして騒亂を鎮めたが、更に之を機として、此の遺物の經歷に就て雜誌上に記述したのである。元來デカルトは周知の通り、瑞典の女王に聘せられてストックホルムに渡來したが、間もなく病を獲て歿したので、女王は大いに之を悲しみ、禮を厚くして其地に埋葬し、永へに其の徳を偲ぼうとした。然るに其後佛國のピエル・ダリベが之を本國に送致せんとし、公使の協力により一六六六年發掘を試みたが、時に歿時を距ること既に十六年で、棺も朽廢し、又遺骸も大部分腐敗し骨髄も分離して居るから、之を小箱に藏め封印して鐵の門を附し、コペンハーゲンまで

海路、それよりは陸路で巴里に送ることとした。其際公使は手骨の一部を記念に所蔵することとしたといふ。不吉を理由として乗船を拒む船員を和めたり、其他様々の障害を経て漸く佛國に到着したが、元々其の箱を衣類の匣の體裁にして置いたので、遂に密輸入と誤認せられ、税關で之を開示するの已むなきに至つたといふ。斯くて翌一六六七年一月巴里に到着して一時ダリペー方に運ばれ、初め暫くサン・ポール寺に安置し、六月サント・ジエヌヴィエーヴ寺に改葬せられたが、其際一方の反對者のために公の葬儀弔辭等は禁止せられた。先づ是でとにかく哲人も故郷の土中に安眠するを得たかと思へば、又もや平和の夢は破られて、一七九三年十月かゝる偉人に相當する場所に遺骸を移すべきこととなり、初めパンテオンに改葬せられることとなつたが、其事は已んで、一八一九年二月改めて櫛の棺に移されて前記サン・ジェルマン・デ・プレ寺に改葬せられ、初めて永へに休息することを得たのである。

以上は普通に知られた顛末であるが、又これで落着したのかと思へば、流石に明晰判明を標準とした哲學者の事として、此棺の遺骨に就ても更に又精確な検討を要することとなつた。元來以上の記述だけでは、頭骨紛失のことは毫も言はれて居ないから、是が當然土中にあるべきも

ので外部に保存されて居るなどといふことは却て疑はしくなるであらう。然しデカルトの家族間では既に久しく遺骨の一部がなほ瑞典に残つたことを信じて居たらしい。所で一八一九年最後の改葬の時に立會つた學士院幹事ドゥランブルは、開函した際に、大腿骨のみは判明したが他は殆ど塵となつて居た、と報告して居た。即ち此中には頭骨は見當らなかつたのであるが、更に古い記録を見ると、初めて巴里に埋葬された時も既に四肢の骨以外には殘存して居なかつたことが分る。然し元來頭骨は他の部分よりも割合に長く殘るものであるから、若し其中にあつたとすれば其際見當らぬ筈はない。即ち論理上巴里到着以前に既に頭骨のみは除かれたとしなければならぬ。

然らば何時取り去られたのであらうか。一七五一年出版のアルケンホルツの『瑞典女王傳』によれば、瑞典の一近衛士官が巴里發送のための發掘に立會ひ、其の際「大哲學者の最美の遺物」として此頭蓋骨を保存した、といふ記事が或人の手紙に記されてある。然るに此の遺骨は間もなく此人の歿後債權者の所有に歸し、其れより轉々として暫時不明になつて居たのであつた。一八一九年改葬の後、學士院のドゥランブルが遺骨中に頭骨の無いことを報告したので、

列席の瑞典化學者ベルツェリウスは之を以て自國の責に歸して竊に憤慨して居たが、後一八二一年歸國してから偶然新聞によつてデカルトの髑髏が賣物となつたことを知り、然も一航海者の所藏品と共に三十七フラン半で入れせられたことを聞いて、急卒其の人を尋ね、其の好意により原價にて譲受けることを得たので、直ちに之を佛國の化學者ベルトロの手を経て比較解剖學者キニギエに送り、爾後佛國の博物館に保存せられることになつたといふのである。然しなほ其の遺物が果して眞なるか否かを確める要があつたが、骨相學の専門家ガルが詳しく殘存せる畫像等と比較して其の全然一致せることを確認し得たのであるといふ。爾來佛國の學者でも一部の人は其の人類學教室に藏せられることを知つて居たが、多くの人々は其の存在に就ては全然考慮しなかつたのであつた。所が會々ベルツェリウスの手紙によつて頭骨の別置せられることを知り、然も其れが衆人の目に觸れないので大騒ぎとなつたのが、今當事者エルノーの說明によつて落着いたのであつた。

思ふにデカルトは一面には仲々小心な所があり、他人と論争の渦中に投げられるのを恐れて其の出版を澁つたり、ガリレイの審問を聞いて其の説の發表を中止したり、或は幾分異教的な

道徳論に就ては僅に其の女弟子たるエリザベト公主への書簡で述べたのみだ、といふやうな注意をして居るにも關せず、遂に死後まで其の遺骸を度々いぢくり廻され、知性の哲學を説いた人の知性の宿る所が奥津城に休むことを得ないで、衆人の曝物となつたのは運命の戲と謂はざるを得ない。尤も佛舍利とか大脳保存とか例がないことはないが、又プロチノス流に悟り切り、身心二元論を徹底すれば物質的身體などどうでもよいかも知れぬが、其れにしても、後に述べらる如く同じく知性の代表者たるカントも同様の運命に遭遇したのは奇と謂はざるを得ない。

スピノザとライプニッツにも種々傳記的興味があり、小説の題目にもなつて居るが、今はたゞ兩者會見の有様を畫題とする意見を紹介する。スピノザが其の隱棲の室内から田野に屹立する和蘭名物の風車を眺めつゝ靜かに讀書思索すると、其處へ英國歸來の青年哲學者ライプニッツが訪問する。恬淡寡慾然も不義を憎み正理のために闘ふを辭せざる隱遁の學者は、遂に意を決して其の精魂をこめた論著を此の新來の學徒に示す。既に少年高科に上り又英佛に旅して諸般の學を究めた年少氣鋭の才人も、此の尊敬すべき碩學に對して自ら敬虔の念を生ぜざるを得ず、初めは單に好奇、後には次第に驚歎して此の手書を耽讀する。是こそ一幅の畫圖となる

のではないかと、シュタインとスピノザ (Ludwig Stein, Leibniz und Spinoza. 1890) の意見である。而して是は同時に兩者の史的關係を示すものである。

カント及び其れ以後の諸家フィヒテ、シェリング、ヘーゲル等に就ても詳細な傳記もあり、語るべきことも多いが今は一々之を説かない。カントが初めて直情徑行のフィヒテに面會した時、シェリングとヘーゲルとの交遊と敵視、更にヘーゲルに對するショーペンハワーの攻撃など、何れも自から學説を反映するものがある。然し今は一切を省略して、たゞカントの頭骨について述べよう。

元來詩人藝術家の遺蹟の細心保存せられるのに比すれば、學者の運命は聊か憐むべきものがある。カントの住居は歿後幾許ならずして知人朋友等の抗議にも拘らず、改築せられて旅館料理屋の類となり、當代の哲人が嘗て深甚の理論を提示した講堂は、學生の高歌放吟する集會所となつた。其の後三十年を経て一八三五年齒科醫デペリンが之を買收し、大理石の板牌に「一七八三年より一八〇四年二月十一日まで、イマヌエル・カント此處に住居し講義せり」と表示した。後カントの講座を繼いだローゼンクランツが屢々其の一室を記念館に充つることを提議し

たが、當局の容るゝ所とならなかつた。遺物の蒐集は現在には實行せられて市の圖書館の一室を之に供してあるが、住居は終に一八九三年、カント協會長の抗議にも拘らず、市長の同意によつて全然破毀せられ、其後現に近隣と同様の現代式三層樓となり、たゞ扉に遺蹟の旨を記してあるのみとなつた。

カント生前の住宅は斯く變遷したが、其の埋骨地も亦平靜を保ち得なかつた。一八〇七年佛軍占領の際は、盜難を慮つて墓石を一時取り拂つた。其後一八〇九年には其の墓地たる「教授穹窿」は其の舊友シェツフナーの發議により「ストア・カンティアナ」と名づけられたる廣濶な堂廊に移された。夏は廣場より流れ來る菩提樹の香り高き所で、雨天には其の石床上を教授學生が講義の合間に逍遙するを習ひとして居た。其の東翼にある格子造りの禮拜堂様の場所に棺は安置された。斯くして一八一〇年四月二十二日の誕生日を期して大學部内の人々や知友相集まつて盛大な追悼式を行ひ、講座の後繼者ヘルバルトは先人の學績を述べ、友人を代表してシェツフナーは此處に其の建設した墓碑を除幕した。然るに七年後に至つて再び此の靈域を騒がす事が起つた。即ち歲月の經過するに従つて所謂「ストア・カンティアナ」は漸次頽敗した

ので、一八八〇年に其の東側に新たにゴチック風の簡素な禮拜堂が建設せられ、其の穹窿内に此の大哲の遺骨を埋めることとなつた。そこで其の年十一月二十一日辛苦して遺骨を蒐集して靜かに之を改葬し、其の墓碑上に大學評議員室にあるカントの大理石像の模像を置き、一壁にはラファエルの「アテン學園」の模寫を畫き、他壁には彼の有名な句の「外にあつては星辰の天、内にあつては道德の律」が刻せられた（其後一八九八年此のストア即ち廻廊は朽廢し、此の禮拜堂も風雨に曝されて見る影もなくなつたので、市當局では此の堂を破壊し、遺骨を大伽藍の中に移さうとする計畫があつたが、中止せられ、後一九一三年來此の遺骨を永久に安置せんとする運動が起り來つたが大戦争等のために中止するに至つた）。さて此の一八八〇年改革の際に頭蓋骨を検索したことが我々の題目となるのである。

此の發掘の際の狀況に就ては、發掘者ハディク教授の詳細な畫圖があり、其の記事は同じく立會つた解剖學教授クップファアの報告がある。其の大意は既に記した通り、ケーニヒスベルクのドームキルへ北側のアーケードの東端にある一八〇九年以來「ストア・カンティアナ」と呼ばれた墓所が朽廢したので、八〇年六月二十四日新にゴチック風の禮拜堂を建設し、前地に

埋藏せる諸遺骨を蒐めて金屬製の棺に藏め、將來の混同を避けようとしたのである。是に於て其地を検すると、其中に西より東に併行せる骸骨が二個あり、其の北にある骸骨の頭蓋骨の上には「不滅のカントの可滅的遺灰」といふ語を刻した金屬板があるから、先づ此の方を哲人の遺骨と認知し得たが、なほ其の眞偽を確めるために骨相學的研究を試み、また既存の死面と比較したが、其の形狀が全然符合することを測定し得たといふ。其の要點は

- 一 頭蓋骨内容の平均以上に大なること
- 二 其の長さや高さは尋常だが幅が非常に廣いこと
- 三 上方後方内側面より見て何れも同様に圓形なること
- 四 規則正しい縫合線を示すこと
- 五 上方より見れば著しく不均齊なること、即ち右方が廣いこと

等であつて、ガルが既に骨相學に於て説く所の諸特性を證するものであり、而して今現にケーニヒスベルク國有祕庫に藏せられる石膏面に關して當時の解剖學者ケルヒがカント歿後間もなく即ち一八〇四年四月二日に、ガル説の一證として詳細に記述したる所と一致する點が多いと

54。

此の如く近世哲學の革新をなしたといはれるカントも其の遺骸は皮後屢々衆人の手に動かされ、其の哲學的革新を案出した頭腦の掩蓋も諸人の科學的檢討に供せられるに至つた。而してデカルトの場合と同じく人類學者解剖學者の研究に資せられたが、たゞこゝに於ては其の優秀なることを以て骨相學說の眞理を證せんがためであり、而して其の模型は今日永く人々の眼に觸れて居るが、實體は深く地中に藏せられて居る所を、異なりとすべきである。

何れにせよ近世哲學の開祖源泉と稱せられるものと其の革新者にして新氣運の淵源と目せられるものが、等しく靜かに苔むす奥津城に眠るを得ず、其の知性の物的基體を諸人の前に曝すの已むを得ざるに至つたことは、寧ろ又運命の惡戯と謂はざるを得ないのである。

斯様に話を秩序なく述べ立てれば滾々として盡きない。なほ書簡や日記に就ても言ふべきこともあり、放送に於ては之に觸れて波蘭の學者ルトスラウスキーの事を米國の哲學者ジェイムスの手紙によつて話したが此の項も餘り長くなるから、其れは他誌（政經篇）に譲り此の邊で一先づ筆を擱かうと思ふ。

—一四・一〇知性—

## 哲學者の手紙

—波蘭の老學者のことなど—

哲學史の研究上學說の意味を理會するために其の學說唱道者の生涯及び時代に就て一應の知識を有することの必要は言を俟たない。而して其の資料には勿論史傳が第一であるが、其の史傳には正史のみならず、小説的空想を混じたものでも参考となる點が多い。此他又學者自身の日記や書簡なども缺くべからざる文獻である。私は是等の書類を彼是涉獵する中に自から其方に興味が移つて、餘り學說の研究にも關係ないことまで詮索したりするやうになつた。其の一端を先日「哲學史外傳」と題して放送し、其中の一部を更に敷衍して或る雜誌（知性）に掲載したが、餘り長文になつたので書簡に關する部分は省略することにした。然し其中には目下世界の注意を惹いて居る波蘭の學者のことなどもあるので、其のまゝ空しく原稿を筐底に藏する

哲學者の手紙

六九



ことも物足りないやうに感ぜられ、之を更に敷衍詳説して此の雑誌に掲げることにした。其故に書き出しはやゝ前の話の續きのやうになつて居る。

普通の史傳、即ち主として他人、若しくは稀に自己の記した傳記等から種々哲學者の逸話などを求め得るが、其人自身の記した手紙や日記などからも興味ある材料を求め得て、之によつて其人の面目を躍如たらしめるものがある。哲學者の手紙で最古のものはプラトンのであらう。古くから十三通保存せられて居り、長く其の眞實が疑はれて居たが、今日では其中若干は眞正のものと認められ、殊に第七書簡は自傳的價値のあるものと決定せられて居る。そして之によつて此の哲人が其の政治上の抱負を實現せんとした跡が辿られるのである。其他中世では、才學を以て一世に聞えたアベラールと其の女弟子エロイーズとの情話を傳へた往復文通が古來有名である。尤も是は他の場所で書いた通り、最近の詳細な研究によつてアベラール自身の假作といふことになつて居るが、後にルソーの『新エロイーズ』其他諸文學的著作を喚起したものである。近世諸家のも保存されたものが多い、殊にデカルトやライプニッツなどは非

常に多數である。尤も其の大部分は學術的辯論であつて、又其點で重要なのであるが、間々私生活を反映する外傳的なものもある。スピノザにも、カント及びカント以後の獨逸哲學者にも、興味のあるものがあり、其他英國ではロック、ヒュームなど、佛國ではヴォルテール、ルソーなど何れもとりにくく話題を提供する。然し放送時間にも限りがあるから是等に就て論述する暇はなかつたが、其中一つだけに就て略説したので、次に之をやゝ詳しく述べる。其れは米國近代の心理學者哲學者ジェイムスの手紙である。

斯様な近代のものとなると、事情も判明したものが多いで殊に面白く感ぜられる。元來ジェイムスの書簡集には二種あつて、一は歿後數年を経て（一九二〇年）其子ヘンリー・ジェイムスによつて出版されたものであり、一は數年前（一九三五年）其の弟子ペリーの努力によつて豊富に蒐集せられた資料で、傳説思想の經歷を示すやうになつて居る。前者の中には、例へば其の後進たる佛國のベルグソンを賞揚して親しげに「魔術師」と呼びかけたり、獨逸留學中に出版されたツェラーの希臘哲學史に就て、其れが餘りに組織的抽象的なことに不滿の意を表したり、一般に獨逸學者に其弊の存することを指摘したり、其の論文著作には暗に同僚ロイス

を心中に想像しつゝ之を論敵として執筆することを説くなど、其の學風性格を想望せしめるものがある。後者、即ち近年出版せられたものには又許多の自傳的記事があるが、其の波蘭の老學者ルトスラウスキーに關するものは、今日の話題として適切ならぬこともなからう。

ルトスラウスキーは夙にプラトンの文獻學的言語學的研究によつて知られて居る。此の研究はプラトン著作の『對話篇』に現れて居る言葉や語法の克明な統計的研究によつて、其の類似したものも多く現はれた諸著作の年代を相接近したものと推定し、之によつて全著作の前後を決定したものである。即ち何等先入見を用ゐずして此の史的研究に従事したのである。此の如き研究は希臘語に關する豊富精到の知識を豫想するものであるから、其人は定めて濃厚な學究的考證家であらうと想像せられて居たが、私は一九三〇年に學會で面接し、其の質朴な田舎老爺のやうな風采の中に、宗教的信仰に富み愛國的運動に熱中する心情を藏する人たることを見て、聊か意外の感を得たのであつた。然も英佛獨西其他諸國の語に通じ、諸國の學者に對して其の國語によつて自由に應酬し、常に皮肉の言辭を以て揶揄已まざることを見て、私は竊に、

學界の大久保彦左衛門を以て之に擬して居たのであつた。一八六三年生れといふから、當時は六十七歳であつたのだが、私にはもつと老年のやうに見えた。此の老人がまだ壯年の頃米國の宗教學會に臨んだ折、其の先輩たるジェイムスを訪問したが、其時の狀況をジェイムスは書簡で知人に報告して居る。大分熱心に靈魂不滅論を主張して然も *Souls* を *Zools* と發音するのが耳についた、と記してある。思ふにジェイムスも此の執拗な議論には少々あてられたのであるまいか。之に就て思ひ合はすのは、私が、前記のやうに、英國オクスフォードで開會せられた萬國哲學會で五日間同じカレヂに宿泊したとき、其の學殖に對して豫て抱懐する敬意を表しつゝ、其のプラトン研究の事を話題としたら、今はそんなことを顧みないといふやうな風で、イキナリ「君は靈魂不滅を信するか、神を信するか」などと疊みかけて問ひかけて來た。氏の考へでは日本にはスペンサーかヘッケルかの進化論や唯物論的思想が勢力のあるものと思つて居たらしい。私が此の宗教的問題について性格上懷疑的批評的であると告げると、氏は大いに之をたしなめて、自分の國は貧乏だから大學の俸給なども少いが、君などは日本の大學で高祿(?)を食みながら宗教の信仰を説かないのは間違つて居る、と手厳しく攻撃して來た。そ

して其の主張するメツシア主義の事などを説いた最近の英文著述『實在の知識』が今書肆の店頭にあるから通讀してくれと言つて居た。所謂メツシア主義とは、身を棄て、信を擴め世を救ふ事を説くもので、一たび亡國の運に遭つて辛酸を嘗めた波蘭こそは正に民族として此教を宣傳するに適するといふのであつて、十九世紀の初巴里に流竄したウロンスキー、哲學者チエスコウスキー以來諸家によつて唱道せられたものであるが、今ルトスラウスキーは之に對して其の哲學的基礎を建立せんとしつゝあるのである。而して其の基礎は實に「靈魂の世界」の説に存するのであるから、是が常に其の心中に來往するので、初見の東邦後進に對しても先づ此問題によつて其の一喝を喰はさんとしたのも故あることである。そして此の思想を早く既に有して居たとすれば、ジェイムスが其の粘り強い主張に多少惱まされた事も尤もだと微笑せられるのである。なほジェイムスの他の手紙には、後年ルトスラウスキーから倫敦に設立すべき波蘭大學の學長たることを依頼されたのに對して、自分は從來心靈協會などに關係して居るので世間からもういい加減變人扱ひにされて居るのに、今またそんな役を引受けたりすると、愈々瘋癲病院行と診斷されるかも知れないから、といふ理由で謝絶の意を表したのは、中々對手に負

けない奇抜な返事だと思はれる。

ルトスラウスキー翁に就ては種々の思ひ出があるが、此時初對面で然も先輩として敬意を表して話しかけた私に對して忽ち鋭鋒を向けて來たのは、或は私が獨逸語で話しかけたので、一寸氣を悪くしたからであつたかも知れない。英國で會つたのだから英語で話してもよかつたが、何かの關係で思はず獨逸語が私の口を出たのであつた。勿論氏は獨逸語も自由自在であるが、當時は寧ろ英語か佛語かの方を多く話して居たやうであつた。そして其の哲學上の立場は獨逸の論理的哲學に反對であり、希臘哲學の研究に於ても獨逸の哲學史家と相容れないものがあつた。反獨的思想が斯程まで強いとは知らずに、多くの東歐諸新興國の哲學者なみに獨逸語が第一外國語だらうと臆斷したのは、全く私の迂濶に他ならない。當時其の職務はキルノ大學の教授であつたが、其地は東プロイセンの東方に當り、此の方面は別に目下戰報中に現れて居ないやうであるが、戰局の進行と共に如何なるであらうか。常に詰襟の黒服を着用した老小使然たる此の熱烈な老學究は今日如何なる態度を取つて居るであらうか（其後此のキルノは勿論攻撃され今はソ聯の版圖に入りつゝある）。

波蘭の事物は時節柄注意を惹く所が多いが、是で想起されるのは、昔のサロモン・マイモンのことである。其の生時（一七五四年）は十八世紀の末葉（一七七二年）波蘭が露墺獨の三國に分割せられる時に先だち、亡國の兆既に掩ふべからざるに至つた頃であつた。貴族武士は暴虐専横を極め、人民は蒙昧困窮の中に偷安の日を送る時諸方の壓迫を受けて最も悲惨な運命に呻吟した寒村の一猶太人の家に生れ、然も天性の才能は夙に猶太律法學師として同族の間に重きを爲さしめて居たが、好學の大志は終に小成に安んずるを得しめず、數奇の運命を経て獨逸に入り、節を屈して先づ中學に學び、遂にカント哲學を究めて其の後繼者中に伍することを得るに至らしめたのであつた。其の波瀾に富む一生の經歷を敘述した自傳は、哲學史外傳として最も興味あるものである、而して其の奇才に對するカントの稱揚は、其の書簡の中にも顯れて居る。

然し是は餘り古い話であるが、終りに私自身の經驗に就てなほ二三附記したい。尤も是は、最早學者の書簡の題目からは超脱したことである。先づ三十餘年前（一九〇八年）獨逸で開かれた萬國哲學會で、昨今既に獨軍に占領されたクラカウの一少壯學者と語を交へたことがあつ

た。當時此地は墺領であつたから、此人は無論國籍上墺太利人であり、私との談話は獨逸語で取り交はされたのであつたが、其の世界の學界に公にした學術的論著は數種あつて、何れも悉く佛語によることとして決して獨語を用ゐないと言つて居た。蓋し少しでも獨逸の文獻を豊富にすることを欲しないからである。此の學者は蒼白な一學究のやうに見えたが、實に此の如き氣概を示して居たのである。そして此のクラカウはガリチェンの古都で洪牙利地方に接近して居たが、此人は勿論洪國にも親密の情を示して居なかつた。さて此の洪國人も亦當時墺太利人と反目して居たのであつたことは、私がまた其頃親しく經驗したことである。此會の後約半年を経て巴里の一パンションで諸國の人々と合宿したが、中に洪牙利の一中學教師があつた。私がウツカリ墺太利人（オートリツシユ）といつたら、言下に之を訂正して洪人（オングロア）と言つた。そして佛國の合宿に居たからでもあるが、決して獨逸語を話さうとはしなかつた。當時此の體驗に接して私は墺洪國の存在が如何に困難であるか、といふことを深く感得したのであつた。

さて此の三分された波蘭が再び一國を形成した喜びは容易に想像されるが、一方には汲々と

して軍備を整へ新興氣鋭の風を示し、一方には又古國の文化と學問藝術上許多の偉人を産出した誇を有するに拘らず、國富民力未だ十分ならざることには汽車の旅窓からも察知せられた。トスラウスキー翁が自國の貧窮を歎ずるのも偶然ではない。最近三年前巴里で開かれた學會では此翁に面することを得なかつたが、其際屢々村夫子然たる一老學者に遭遇したので、終に機を得て談話を試みたら、豫測に違はずワルシャワ大學教授であつて、常に此の國際哲學會に出席し、前回にも私を見たことがあると言つて居た。既に述べた通り此時は波蘭は獨立の新興國として、其の國人中には意氣軒昂たるものもあつたり、概してバルカン新興國等の學者などは佛國學者の意を迎へるに汲々として相當勿體振つた人もあつたが、此人は溫厚謙遜の學究らしく然も毅然とした所も具へて居た。談ルトスラウスキーの事に及んだら、聊か冷笑の意を示して居たが、蓋し此の國際學術界の大久保彦左衛門は自國のアカデミッシュの側にも聊か彦左式戰場初陣話などをやつて持て餘されることもあるのではあるまいか。ともあれ、惣じて波蘭出身の學者は古くはコペルニクスを初めとして、最近にもキューリー夫妻を初め、メエルソン其他頗る多いことは多辯を要しない。

亡國若しくは多難の國土の學者から聯想するのは、もと露西亞の學者であつたロスキイである。國情變革から其の本國を去り、一時は波蘭に赴いたやうであつたが、其後はプラハの露系大學の教授となつて居た。其の直覺主義的論理學は獨英等の譯によつて早く諸國に知られて居た人である。三年前巴里の學會で偶然隣席に坐して初めて語を交へたが、此の著名な老學者(と云つても私より四歳上に過ぎないが)は極めて謙遜慙懃な人であつて其徳を偲ばせる所があつた。是が縁となつて爾來屢々其の論著の寄贈に接するやうになつたが、其の論文が何れも皆英語で記されてある所に四圍の事情が察せられる。而して其の宛名には何時も亞細亞、日本、東京云々と記してある。獨逸や英吉利へ送る書簡に一々歐羅巴と記さないやうに、此方からも特に亞細亞と記したこともなければ、先方でもさう記す人もないが、此の宛名は一寸面白く感ぜられるのであつた。プラハの大學もチェッコが獨逸に併吞せられて以來果して如何なつたであらうか(之を總として次にロスキイを紹介する。但し。)  
(やゝ専門的書き振りでだからとばしても可い。)

斯様なことを書き續けると、話は哲學者の書簡といふ所から餘り懸離れて來るから先づ此邊で終りとすることにする。

一亡命老學者の近著

——ロスキイのこと——

先頃「哲學史外傳」と題して放送を試み、其中に會々波蘭の老學者ルトスラウスキーの事を傳へたが、後此の放送の中から「哲學者の手紙」の部分に抜抄増補して一雜誌に掲げる際、此の亡國の若しくは亡國に近い運命に遭遇した受難國の諸學者を語ると共に端なく同じく亡國の運に遭つた流竄の客ロスキイの事に及んだ。ロスキイはもと露國ペテルスブルグ大學の教授であつて、革命後チェッコスロヴァキアに入り、プラハの露系大學の教授となつて居た老學者であるが、其の寓地も亦獨逸に併吞せられて後、今は如何にして居るか詳かにしない。私は三年前巴里の哲學會で偶然隣席に坐したので語を交へる機會を得、爾來屢々其の論著の寄贈を受けることになつた。其説は必しも私の同意する所ではなく、又近著は單に昔日の思想を要約する

ものに過ぎないが、とにかく現代の直覺主義の一代表者として夙に世に聞えて居る人であるから、次に少しく其の諸著を参照しつゝ、其の最近の一論著を紹介しようと思ふ。

ロスキイ (Nikolai Losskij, N. Lossky) の著書は一九〇八年ペテルスブルク大學の講師の際に著はした『直覺説の基礎』以來數種ある。是等の中私の所有若しくは讀過したものは此文の後に記して置いた。其説は要するに其の初著の範圍を出て居ない、一九一九年英語に譯せられた『知識の直覺的基礎』も、一九二七年獨語に譯されて居る『論理學』も、根本思想は同一であるが、常に其の時代の新學説との關係を注意すると共に一方には次第に宗教的色彩が濃厚になつて居るやうに見える。一九三〇年オックスフォードの哲學會に於ける講演は、其の立場を簡明に敘述したものであるから、之を摘録すると、大體次のやうに説いて居るやうである。即ち認識論上の直覺説とは、主觀が客觀を其自體にあるものとして、即ち之に向けられる認識の作用を離れて存在するものとして認識する、といふものである。此の直覺とは主觀がよつて以て客觀を認識する作用であり、其の非合理性或は具體性を意味するに非ずして、たゞ其の直接性を示すものとする。次に觀念的實在論といふ立場は、世界が觀念的存在物(超空時的)に

基けられる實在的存在物（空間及び時間中の出來事）を包有するとする學說である。所謂實在的存在物は感覺的直覺により、觀念的存在物は知性的直覺によつて認識せられ、而して神秘的直覺の對象は超論理的存在物であるとして居る。斯くして認識には主觀的及び客觀的兩方面を存するもので、前者は主觀の注意辨別的作用、後者は超主觀的非心的實在である。即ち此の直覺主義の論理學は全然心理主義と分離したものである。而して此の立場から、論理形式の基本たる判斷を常に理由と歸結との關係を表明するものとして説明して居る。

以上の所説は純粹に論理問題の範圍に於て論究せられて居るが、其後其説は次第に宗教的神秘的色彩が濃厚になつて來た。一九三四年プラハの哲學會に於ては「全面的綜合としての基督教的世界考察」と題して、基督教が宗教的及び科學的世界考察の綜合に對する基礎たることを説かうとした。其の所謂基督教はニカイア及びコンスタンチノブルの會議で決定せられた信條に由るものである。即ち神は世界の創造者であり、又其の目的であつて、世界は其神の存在の絶對的價值や、永久生命や、並びに其の完全性に於ける愛美善及び完成せる眞を分有せんと努力すべきものである。而して此の基督教的世界考察こそは哲學の諸方面、即ち形而上學、價值

哲學社會哲學の全面的綜合の基礎となり、又科學と哲學との綜合に對する基礎となるものであるとして居る。

以上の所説からロスキイの宗教的哲學觀の立場は之を察知するに難くないであらう。此の傾向は一九三七年巴里の哲學會で講演した「宇宙の形式的理性」に於ても顯著であるが、今之を同年プラハの露系科學研究協會報告（Bulletin de l'Association russe pour les recherches scientifiques）第五卷に掲載せられた論文「創造的活動、進化及び觀念的存在物」（Creative Activity, Evolution and Ideal Being）によつてやゝ詳細に紹介する。蓋し此の報告はプラハの露系大學の機關であつて、一九二八年以來一九三三年まで大學紀要の形で Travaux scientifiques de l'Université libre russe à Prague と名づけ第五卷まで刊行せられ其後一九三五年から前記報告の名稱で發行せられて居る。其の第一號にはロスキイの「知的直覺と觀念的存在」を出版し、爾後諸家の英佛獨露各國語の論文が續刊せられて居る。ロスキイの論文としては第十二號の「直覺説」があり、第二十一號に「感覺的性質の超主觀性」第三十號に今主題とする論文がある。初二は手許にないが、大抵他の論文で表示されて居る。第二十號の「感覺的性質

の「超主観性」は其の實在論を説いたもので、經驗論的感覚論や主観主義的觀念論に對して、感覺性質即ち色音等が如實に客観的存在を有することを、感覺及び錯覺等の例によつて説いたものである。是等諸論文を豫想しつゝ、私が接手した最新の論文では其の形而上學觀ともいふべきものを説いて居るのである。

さて此の「創造的活動、進化及び觀念的存在」は大きく「創造的活動と進化」及び「普遍的と個別的」の二章に分れて居る。就中第一章は「觀念的存在物と創造的活動」「存在物の範圍の進化」の二節に分れ、第二章は「具體的個體の普遍に對する優越」「個別的事件に於ける法則及び規則の實現」「感官的知覺の對象及び科學的思想の對象の實在性」の三節に分れて居る。

(一) 觀念的存在物と創造的活動

ロスキイは先づ時間空間内に於ける事件（即ち前述の通り是は實在的存在物である）を創造する各活動の基底には其の事件の全體の觀念といふものが存在し、而して此の觀念的存在物は

時間に於て示現せられる創造的活動の可能性の障壁ではなく、逆に其の必須要件であり、各發明發見の基底には、其が外圍の影響に負ふ所が多い時でも、なほ且つ何等かの觀念が存する、とする。かくて外界の影響により鼓吹せられた創造的活動の任意の例證を以て其論を證して居る。例へば或る小説家が、其の主人公の詐欺が發覺して百計盡きた時に發する歎聲として最効果的なものを考案しつゝある間、偶然鷺が鳥を逃がしたのを見つ Sorvalos といふ語を發し、是こそ其の小説に適する語だと考へつたといふ。蓋し此語は先づ「シマッタ」「しなしたり」とでもいふ意味であらうが、此語が小説用語とせられるまでの過程を聯想心理學的に説明したのでは真相を逸する、寧ろ藝術品は全體として既に藝術家の心中に存し、常に之に没頭して居るから外界の印象は之に利用せられるのに過ぎないのである。

斯く觀念を主體とする見方を直覺説と稱するが、此説に想ひ到つたロスキイの回想談も既に此の一例となし得るものである。蓋し氏は十八歳から二十五歳まで形而上學の問題に没頭して居たが、初はデモクリトス流の唯物論に傾き、後其が認識上維持すべからざることを認めたら、なほ容易に其の先入見から脱することが出來ず、世界を原子的とし、意識内在觀を支持して唯



我論懷疑說に陥つて居た。かくして一九〇八年のある薄暗き冬の日に友と散歩する際、獨り心中に「我は我が心生活を知るのみだ」など默想しつゝある間、霧深く立ち籠めて萬象其中に没する街に至つて突然「一切は一切の中に内在す」といふことを悟り、大聲を發して其の妙理を叫んだので、友は又驚愕したのであつたが、其時の呆れ顔は今なほ記憶に鮮かである。而して爾來「世界の一切遍滿的合一」の理を以て直覺說を立てるやうになつた、といふ。是また全體の觀念が其時の外圍の印象を取り入れたものではあるまいか。

時としてはかゝる觀念的存在物の所有者即ち「實體的作因（能作者）」（ヌースといはうか、エンテレケイアといはうか、或は眞我とでもいはうか）と稱せられるものが、低級中樞の働きとして顯はれ、ために意志も作用せずして、恰かも外部から與へられたもののやうに思はれることがある。かくして又高低兩種作因の共働によつて創造的活動が生ずることがある。前掲小説の用語は完成した全體觀念の下に生じたものであるが、未完成抽象的な觀念が漸次具體的となることもある。種々の發明は概して此の順序によるものである。

人身全體の機能に就ても此理が當てはまる。其の有機體を構成する中央實體的作因（謂はば

靈魂のやうなもの）は其の諸機關や相互の關係等を單純な觀念として覺知し、他の低級諸作因と協同して其の觀念を實現する。生物的過程は其の作品を満足せしめる間不變の規則性を以て繰返され、其の目的意匠を實行する手段を供給する。斯くて現在人體を有する實體的作因（即ち心魂の如きもの）には必しもかゝる身體の觀念が併置せられるものとは定まらない、即ち更に低い水準に立ち得たかも知れないが、是等が協力動作する中、遂に此の如き現在の狀態の萌芽を生ずるに至つたのである（抄者註。此點に於ては直覺說もやゝ空想的となりつゝあるといはねばならぬ）。

諸作因がより高き作因に屬して其の觀念を自己のものとする限り、其の合一は緊密となり一の作因から發したもののやうになる。斯くて有機體の中央作因は超空間的で直接に之に従屬する他の超空間的作用に影響し、合して複雑行動を作して恰かも一作因から出たもののやうになつて來る。例へば危難が身に迫ると、覺えず跳躍するのは、心身作用の機械的結合によつて生じたのではなく、直接の直覺的活動によるものである。意識的以下の生物作用に於ても此の如き作用の存することは聯想によつて白血球の増加する有名な實驗によつても證明せられる。

尤も生體の統一は病氣其他によつて攪亂せられて、其の個體の觀念が完全に實行せられないこともあるが、然し之によつて直ちに全體が個體に先だつとする理を破るには足りない。各纖維等はそれ／＼或度まで獨立であるが、然し是等個別的觀念には其の核心に人類其のもの一般的非個體的觀念が具つて居る。同一のことは他の動植物に就ても言ひ得る。即ち是等は唯一の同一觀念の上に基く合一體であるが、然し其の種なるものは全くたゞ論理的で、獨立の生的存在物と稱することは出来ない。

(二) 存在物範型の進化

さて斯る種の觀念や之に従屬する個體觀念は、其自體は不變であるが、之を其の生活に實現する所の創造的實體的作因は之を其の新經驗に適するやうに變形する。そして此の有機體變形の觀念が萌芽細胞の實體的作因に取り上げられればこれは遺傳して新種を生ずるに至る。即ち是が進化の過程であるが、此事は生物以下の一切物に起るもので、下はエレクトロン、プロトンより次第に複雑となる段階を示す。而して其等は無意識で心的努力を示さないが、然し一種

の心的な物 (Psychoid) の中に又之を通して行はれて居る。斯くして次第に新種を生じて植物、動物、動物、人となる。然し其の新生活は各實體的作因の自由活动によつて生ずるものであるから、一直線に神の王國に進む譯には行かず、善に向はずして一時惡に向ふこともあり、神の道はたゞ理想として存するのである。

さて此の進化の方途をスペンサー流の進化過程で分化凝集等の法則のみで示しては進化の途上に於ける脱線を脱線と定めることは出来ない、それで終極は「善に向ふ進歩」といふことを標識としなければならぬ、即ち人に於ける生物的機能は超生物的となり、結局進化は神化としなければならぬ。此の神化に向ふ創造的行動は絶對に有價値であるが、之を絶對的個體的と稱する、之に反して神から墮した作因の生活は我儘となり、たゞ自己のみを他と睨離して主張するものであるから、其の價値は相對的である、之を相對的個體的と稱する。

有機體の進化即ち新種發生過程に於ては、一の個體的作因の試みた改良が屢々他の作用によつて模倣せられる。是が進化論者の所謂模倣態現象である、之によつて生物は自體を保護することも出来るが、又一の生物體が自から他生物體を保護するやうな作用を示すことのあるのは、

植物と昆蟲との相互補助或は自己犠牲的行動によつて明かである。即ちこゝに是等を超越する超個體的心的存在物（即ち神）を假定するを要する。斯くして電子から人に至るまでの進化の究極目的は更に進んで神の王國に近づくにあることを知るのである。

以上ロスキイは其の創造的活動の説によつて進化に關する特殊の見解を披瀝して居るが、其の或點はベルグソンを想起せしめるものがあることは容易に察知せられるであらう。然も或點に於ては宗教的たる點に於て其の直覺説は一層神祕的形貌を有するが、一面には又論理的方面を顧慮する點に於て特色を有する。次に述べる第二章の問題は之に當るものである。

（一） 具體的個體的の普遍的に對する優越

抽象的觀念は形式的と質料的とを問はず、自己を實現するとか、或は何等かの仕方では活動的である事は出來ない。凡て各實體的作因は其の規範的個體的觀念によつて絶對的に個體的である、而して又それは生活的存在物であり、其の超性質的創造力によつて創造的且つ活動的である。

かくて根源的な所創造の存在物は超時間的實體的作因であり、又具體的個體的である。而して實在の抽象的方面例へば抽象的ロゴスの形式は是等の具體的存在物に從屬する。是等の見解を次の具體的有機的觀念に實在論或は人格主義の諸命題で表す。即ち

一、具體的なるものは抽象的なるものよりも首位にある

二、個體的は普遍的を統御する。（イ） 個體的な實體的作因によつて實現せられる觀念は其の活動をたゞ規範として規定する。（ロ） 實體的作因は存在の類的種的等の範型を規定する。（ハ） 規則と法則との實現は個體的實體即ち實體的作因に依存する。

三、此の哲學的觀念の中心觀念は創造的目的活動としての生活觀念である、力と意志とは變化の法則ではなく、創造的活動の源泉と見るべきものである。

敘上の實體概念をカッシーラーの如く函數概念で置き換へることは出來ない。若し然かし得るとすれば、實體は單に範疇となり、抽象原理が首位に屬するやうになるであらう。之に反して各實體的作因は形式的・抽象的ロゴス全體を負擔するものである、そしてそれは又觀念の内容を建設し、時空中に觀念を實現する創造的活動の條件としての意志を有する。かくて作因の意

志とロゴスとは其の感情と實質的に結合する（即ち事物の客觀的價値に向けられる情緒的直覺の活動と結合する、今日の流行語でいへばパトスとでも謂ふべきであらう）。時空中の實的各行動は觀念の實現であるが然も此間に前後の別があるのではない、即ち實在的と觀念的とは同一不二である、同一物の存在の二法に他ならない。此の關係を自然界の創造活動に於て認め得るが、之を如實に示現するものは藝術的天才の事業である。要するに直覺説の視點よりすれば、具體的對象に關する我々の知識は甚だ不完全であるが、たゞ神の愛によつて其の全面に達し得べきものである。而して之を例示するものはたゞ神祕的藝術的知覺に存するのみである。

### (二) 個體的事件に於ける法則及び規則の實現

「法則」は主としてこの決定項或は其の群の間の形式的關係で、絶對必然性を以て實現せられ、毫も主體の自由意志に影響せられないものである。「規則」（按ずるに「規範」にも相當する）は事件の内容間の結合で、事實として實現せられるが、絶對的必然性を有たぬものである。それは物理學や社會學等諸學の中にあつて、通常法則と目せられて居るが、實は規則と稱すべきも

のである。而して法と規とは諸學に於て同様に精確に定められるかと言へば、其處に幾分の相違がある。法則は例へば數學に於ける如く全く精確に定められるが、規則はさうは行かない。たゞ或る抽象によつて之を精確にすることが出来る。例へばアダム・スミスが經濟活動を其の一面からのみ説明したやうなことは可能であるが、然し是は全面の事實に當てはまらない。即ち人を經濟的方面からのみ説明するには其の純利己的動機の説は妥當するが、人に存する同情心等を考慮する場合には適合しないことになる。此理は更に單純な自然現象に就ても同様であるから、要するに自然の齊一は假説的たるを免れない。

### (三) 感官的知覺の對象及び科學的知識の實在性

感官的知覺の對象としての自然と科學的知識の對象としての自然とは異ふ、而して諸哲學者は是等兩面を超主觀的實在たり得ないとして居る。ロック等は感官的知覺の内容は主觀的で、科學的知識の對象は超主觀的實在の模寫だとして居るし、マッハ等は前者は超主觀的實在で、後者の對象は思想の構造だとして居る、而してカントは、前者は人の個體的心的な主觀的經驗

で、後者の対象は是等個々經驗に結合して人間思惟を一般的に結束する所の思想の構造だとす。其他又ジョードは諸領域はそれ／＼實在的だとして居る。而して是等に對してロスキイの持説は、凡て存在物の領域は直覺によつて主觀により直接に認識せられるといふのである。

感官的知覺に於ては、人々は其の外圍を實際的に解釋するために、たゞ生命のない「物」に關する。科學的知識は主として対象の非感官的方面に關し、又其の觀念的方面を採求する。然るに別に神祕的藝術的知覺が更に包括的に實在の創造的心髓に透徹し、自然の何處にも生命を見ることが出來、之によつて前に述べた感官的知覺や科學的知識の一面性を脱却することが出来る。かくて是等偏倚した認識の合一した所に自然に於ける各個的全體性は一の生的全體として見られるのである。此の見方によつてシェリングやライブニッツの如く自然の各所に生命や活動を認め得る。但しシェリングに於ては自然の衝突する諸力を知的直觀の可能性の條件から演繹するが、今此には各主觀の終極目的は存在物の絶對的充實であるとする。そは独自の主張によつて互に孤立することがあつても、他面には世界の殘餘と常に結合を保たなければならぬ。畢竟實體的作因の創造せられる所以の目的意匠は其中に抽象的ロゴスのみならず、エトス

及び意志の現存を豫想するものである。

以上抄し來つたロスキイの意見は其の宗教的神祕觀を以て論理問題の基底を解決せんとするもので、此點は最早論議の域を脱して居るが、私は今之に就て批評を加へることを欲しない。たゞ既に漸く衰へ來つて居るらしく思はれる所の、舊時のスラヴ系諸國に存する思想を紹介するに止めて置く、而して其の思想がメツシアニズムを主張する波蘭の老學者ルトスラウスキーと一脈相通する所があり、舊露西亞の思想家として知られるソロギエフと同傾向に屬することは特に注意するまでもないであらうと思ふ。

終りにロスキイの著書論文等我々の目に觸れたものの名稱を列記する。然し是が重要な文献だといふ譯ではない、たゞこんなものを外國語で公として居る人だといふ事を示すだけである。

1. Dr. Nikolai Losskij, Die Grundlegung des Intuitionismus. 1908.
2. N. O. Lossky, The Intuitive Basis of Knowledge. (Preface by Prof. G. Dawes Hicks) 1919.
3. N. O. Losskij, Handbuch der Logik. 1927.
- a. Enzyklopädie der Philosophischen Wissenschaften: N. O. Losskij. Die Umgestaltung des Bewusst-

seinsbegriffes in der modernen Erkenntnistheorie u. ihre Bedeutung für die Logik. 1927.

b. Idealismus (Jahrbuch für die idealistische Philosophie) Bd. I. N. L., Das menschliche Ich als Gegenstand mystischer Intuition 1934.

International Congress of Philosophy.

1. The chief characteristics of a System of Logic based upon Intuitionism in Epistemology and Idealism in Metaphysics. (7th Congress. Oxford. 1930.)
2. Die christliche Weltauffassung als allseitige Synthese. (8th Congress. Praha, 1934.)
3. La raison formelle de l'univers. (9th Congress. Paris. 1937.)

Bulletin de l'Association russe pour les recherches scientifiques.

- No. 1. N. O. Lossky, Intellectual Intuition and Ideal Being.  
 No. 12. N. O. Lossky, Intuitionism.  
 No. 21. N. O. Lossky, Transsubjectivity of sense-qualities.  
 No. 30. N. O. Lossky, Creative Activity, Evolution and Ideal Being.

## 學者の自己宣傳

——ヒュームのこと——

新聞紙の傳へる所によれば、醫師が其の業務上の廣告等をなす場合に種々新たな制限が加へられるさうである。自家廣告或は自己宣傳といふやうなことは一般に餘り上品と思はれないから、昔流の仁術といふ觀念に拘泥する譯ではないが、醫家のやうな先づ謂はば社會の上層に位する職業の方面に於て野卑な吹聴で世人を誘惑するやうなことを慎ませる政策には十分の理由があることと思ふが、又何等かの方法で自己に對する正當な評價を要求する心理には一應恕すべき點もないではない。國家對立の場合に、自國が不當な誤解を受けることを避けたいと思ひ、其點に關する宣傳の方法に違算なきを欲することは人の常である。其故に個人の場合に於ても、全然超世脱俗の生活を樂しむ徒は暫く措き、普通の社會生活を營むものたる限り、幾分の

宣傳的行爲に屬することがあつたとしても、直ちに之を惡德呼はりすることは人情を無視するものと謂つても可いであらう。乃ち此の如く宣傳其のことは必しも悉く咎むべからざるものとしても、中には大體許容すべきものもあり、又擯斥すべきものもあり、或は事情諒察するに足るものもあり、若しくは一笑に附すべきものもある。一體に自己に對する謙遜と他人に對する稱揚とが禮儀とし常識とせられる社會にあつては、宣傳がましいことは全然無用であり、又擧蹙すべきことと考へられるが、諧謔の文字や形容の辭句を解せざるもの若しくは解せざる眞似をする者の群居する時代に在つては、或る程度までの自家主張を公言するの必要に迫られることもあるであらう。然しながら此の場合に於ても、自家の主張が他人を侵害するに至らば徒らに嫌惡の情を起さしめるに過ぎないから、此の如きは既に其人の下劣なることを證明するに畢るであらうが、中には又其人の悲惨なる状態を暴露するものもあり、寧ろ憐憫の情を起さしめるものもある。中には又其の大言壯語が却て滑稽の感を催さしめるものもあり、或は又反對に先進の功績を認むるに吝なる後進の無知を矯正する資となるものもある。年寄の手柄話も鼻につくが、うつかり御世辭も言へない險惡な時勢には、正直に自分の吹聴をする必要があるか

も知れない。然し何れにしても我々の習慣では宣傳は餘り高尚とは思はれないし、實際多くの宣傳には毒氣のあるものか、若しくは慢氣のあるものが多いが、茶氣のあるものならば又興味がないとも言へぬと思ふ。今其中で少しく風變りな、先づ表面上茶目氣タツプリで全く毒氣のない、而して情狀憐れむに堪へぬやうな眞劍味のある宣傳について語つて見たい。但し其は約二百年前の話で、英國の哲學者デギッド・ヒュームの書いたものに他ならないのである。

ヒュームに就ては、嘗て其がカントを獨斷の微睡からゆり起して眼覺時計のやうな働きをした人で、通常懷疑論者とか無神論者とか呼ばれて居るから定めし危險物騷な人物と思はれるかも知れぬが、實は常識的な濃厚篤實な學者で、やゝ粘液質的でもあつたらしいことは、其の初著が默殺せられたのに對して徒らに落膽もせず、又憤懣もせず、致々として第二の著述を公にし、初めて成功を得たことなどによつても推察せられるとして、之を其の自傳や手紙などによつて證明して見たことがあつた。其の大體の結論に就ては今尙大いに異なる所はないが、其際の敘述に就ては少しく言ひ改めたいこと若しくは増補したいことがある。即ち其の初著の失敗に關しては、前文によると、何等意に介する所がなく失望も憤慨もしなかつたやうに解せられ

る恐れがあるが、實際に於ては人並みに之に關心を有つて居たので、又之を挽回する方策を講じたのであつて、其事は最近出版せられた自著梗概によつて明白である。而して其が一種の自己宣傳であり、而かも聊か滑稽の觀ある方法によるものであることは、學界の異聞として傳へるに足るものである。

ヒュームの初著といふのは周知の通り『人性論』で、其の初二卷は一七三九年一月末其の二十八歳の折匿名で出版せられて居る。ヒュームは相當に此著に對する自信を有し、既に三十七年十二月には、其友人ヘンリー・ホームに書を送つて、其の全然斬新な意見を豫め梗概を以て報道し得ないのを遺憾として居る。然るに此書が漸く出版せられた曉に及んで、其は全く黙殺に附せられた。ヒュームはホームに書を送つて、愈々二週間前に出版せられたけれど、其書に就て何等反響のないことを恐れる旨を告げて居たが、成程半年を過ぎて夏に至つても何等の批評をも見なかつた。其の自傳中には「世の文學的企圖中我が人性論ほど不幸なものはあるまい。其は全く出版界の死生兒であり、凝り固まりやの中の呟きさへも聞えなかつた」と記してあり、其秋には愈々最後の手段に出て公衆の注意を惹かうと決心し、匿名で自作の要點を摘記して世

に訴へんと欲したといふ。然も其の梗概は後長く世に傳はらず、而して偶然の事情が其の梗概の著者に就て訛傳を生ずるにまで及んだ。

今少しく詳しく其の事情を記すと、ヒュームは初め自ら梗概を作つて『學者著作史誌』といふ定期刊行物に掲載しようと思つたが、其際此の雜誌に長文の評論が現れたので自己の計畫を中止した。然し此の評論家はヒュームを目して多大の才能はあるらしいがまだ若輩未熟の所があるから一段の用意を要する云々と高飛車に出て居たので、此の少壯學徒は内心頗る平かならざる所があり、終に一七四〇年一單行本として其の宣傳文書を倫敦で出版し、標題を『近著人性論梗概云々』と名づけたが、其後散逸して傳はらず、今日までヒュームの傳記家にも知られなかつたのであるが、最近即ち昨年に至つてキーンズ及びスラッファ兩人の力で原著の模刻が出版せられるに至つたのである。然るに此著に就ては長く訛傳が存して居た、といふのは恰かも一七四〇年ヒュームがハッチソンに送つた手紙の中に「小生の出版書肆はスミス氏に拙著一部を送附致候が氏は定めて貴翰と共に之を受取られ候ことと存居候。氏が彼の『梗概』を如何に處置せられ候哉未だ承知致さず候が何等か御聞及びに相成候哉。小生は之を倫敦にて出版致候



但し例の書評雜誌には無之候同誌には梗概送附以前に既に拙著に對するやゝ口汚なき評論掲載致され居候」とある。其れでバートンが其のヒューム傳中に此のスマスを當時グラスゴーで修學中で僅に十七歳のアダム・スマスであらうと断定し、ハッチソンが其の才幹を認めてヒュームに勧めて一本を寄贈せしめたのであると推定した。其後レーといふ人のアダム・スマス傳には、當時此の弱冠の學生が自ら此の梗概を作成しつゝあつたとして様々の推測が試みられたが、其後諸家の論議を経て、今日では一般に此の梗概が後にヒュームの道德説を遵奉した當時の學生アダム・スマスの作であることを信するやうになつた。然も是等の傳記家は何れも此の梗概を實見したのではなく、たゞハッチソン宛のヒュームの手紙にある「スマス氏」の苗字とヒュームとアダム・スマスとの後年の交際とより推して「スマス氏」を直ちに經濟學者のスマスと同一視したのに過ぎないのである。

然しながらスマスといふ極めてありふれた姓を見て直ちにアダムの名を推定することはかなりの速断といはねばならぬ。又虚心平氣にヒュームの手紙を読めば彼が既に此の梗概を出版した事は明記されてある。且つヒュームとアダム・スマスとは此時より約十年を経て始めて面會

して居るのであるから、此時に兩者の間に何等の關係があつたとは想像し難い。然らば此の手紙の意味を如何に解釋すべきであらうか。之に關する詳細の考證は煩はしいから此には省略するが、要するに所謂スマス氏はダブリンの書肆で、當時此地にはまだ版權の法律が施行されて居ないから、ヒュームは此人に一本を送つて其の著書の別版を發行せしめ、併せて其の梗概の原稿をも添へて、之を何等かの雜誌に掲載せしめんとしたものであるらしい。而して其の梗概がヒュームの自作なることの有力なる證據としては、ヒュームの後に至つて出版した人生論の部分が暗示せられてあることなどを擧げることが出来る。

さて梗概其のものに就ては此に詳説する必要もない。要するに人性論の第一篇知識の論と第二篇情感の論とを三十二頁に約説し、殊に第一篇に就ては知覺、印象、觀念等の説明から、其説の最も異彩ある部分として因果律論を説いて居るのであるが、其事は今此で問題としようとはしない。たゞ其の説述の方法、殊に巻頭の或點に就て注意を惹く所があるのであつて、是が又實に此文を草する動機となつたものである。

所謂注意すべき點とは、此の梗概が表面上全く原著者以外の人の手に成る如く記してある事

である。此點が此書を以てヒュームの自著ならずとする議論の根據とせられるのであるが、然し其所にヒュームの宣傳方法に於ける茶目氣が存すると思はれる。先づ其の序言に、斯る簡略なる梗概を作ることの困難を豫想しつゝ然も一般讀者には斯る短篇が却て理會し易いことを述べて居るが、其の書き方は極めて空々しく全然他人の手に成るものの如くしてある。そして著者に對しては暫く忍耐して學界の公認を得る時機を待つことを勧誘し、今日の默殺は畢竟此の批評が少數學徒のみに委せられたるものによるから、寧ろ廣く一般民衆の判斷に仰ぐことを要する、而して之がためには讀み易きやうに簡潔なる敘述を試みねばならぬ。梗概は畢竟此の目的のために作られたものであるから「著者も我がおせつかいを諒とせられるであらう」と辯じてある。之を讀めば一應は梗概の作者と著者とは別人らしく思はれるであらう。然も此に其の宣傳の狡猾手段が藏されて居るのである。

更に人を食つた書き振りは本文の冒頭である。今其の大意を抄すれば大體次の通りである。即ち曰ふ、此書は近年英國に流行する諸他の著作と同一の計畫の下に成つたもののやうである。最近八十年間全歐を通じて進歩し來れる哲學的精神は此の英國にも亦同様に流行し、諸家は人

類の安慮利便を約する哲學を説くこと從來嘗て存せざる域に達して居る。蓋し古代の諸家は單に情操の微妙、道德の中正等を示す所はあるが、必しも推理反省の深奥を期して居ない云々。然も今や諸現象を検して是が一共通原理に基くことを知り、更に是等諸原理を推究して其が少數の究竟原理に歸すべきことを見た。而して此事は特に本著者の期する所であつたらしい。斯くして人性を正しく解剖し、經驗に準據するに非ざれば何等の斷案を下すことなきを約束し、常に假説を輕蔑し之を道德哲學の領域より驅逐したる人々こそ、實驗的物理学の祖たるベイン卿よりも一層功績あるものであるとした。其の人々とは即ちロック、シャフツベリ、マンドヴィル、ハッチソン、バットラー等で、其説は種々差異あるも經驗に基いて人性を論ずる點に於て一致して居る云々。

今此の文中に著者の意圖を推測するらしい口吻を示した所は如何にも他人の筆に成るものらしく見えることであるが、其の假託である事は此書の模刻出版者の説く所の通りであらう。而して若し此の判斷を謬なしとすればヒュームの宣傳方法も亦ユーモアを含むものと謂つて可いであらう。自著が默殺せられることは何人も内心忍ぶ能はざる所であらう。カントが『プロレ

『ゴメナ』を著したのは純粹理性批判の無視と誤解とに不満なるために先づ其の撮要を示す必要があると感じたからであつて、是も亦強て言へば一個の宣傳であらう。即ちヒュームが梗概出版に焦慮したのも必しも卑俗と謂ふには當らぬと思ふ。然も其の方法が此の如き稚拙の技巧を弄するものであることは一興を催さしめるものである。而して此の虚言も早晚暴露しさうな淺薄な計畫である所は、却てヒュームの人物の無邪氣な所を證明するものではあるまいか。即ち私が嘗て之を常識家、粘液質的といつたのは必しも大なる見當違ひでもなかつたと思ふ。殊に其の宣傳方法が滑稽ではあるが、何人にも害を及ぼすことのない點は、學術史の一挿話として又宣傳文學の一標本として長く話題となり得るものと謂つて可いであらう。

——一四・七中央公論——

## 百年前

——高野長英を中心として——

『理想』が百號に達したので記念號を發行するといふ。其れに就て一文を寄稿せよと、大分難しい題目を提供されたが、其の方は先づ辭退して例の雜文を草することにした。嘗て或雜誌(思想)が二百號に達した際、私は「二百年前」と題して其頃の學界を回顧したことがあつたから、又もや其の意匠を繰返すやうでもあるが、百年前といふ題で何か書かうと約束した。

さて手近かの年表類で調べて見ると、先づ百年前は我國では天保十年に當るが、此年の事件で一寸眼を惹いたのは、渡邊崋山と高野長英とが罪せられた、といふことである。崋山は二年の後天保十二年に自刃したのであり、長英の方は一時出獄し變裝して暫く世を眩ますことを得たのであるから、天保十年はまだ其の終末では無いが、とにかく其の生涯の運命を決した時期

である。其他此の前後を検すると、二年前には大鹽の亂があつて、之を學界の事變と見れば、即ち陽明學の實行的學者を失つたことになる。所が其の同じ年には、爲永春水が自ら人情本の元祖と稱して諸著を出版し其の全盛期に達したといはれる。而して又其の十年には鳩翁が歿し、後數年を経て『鳩翁道話』が刊行されたりして、心學の普及せられたことを示して居る。政治其他の方面に於ては内外頗る多事で、幕府も漸く末路に近づきつゝあることを示して居るが、然し其は今日から見た話で、當時の人々は何とかして切り抜け得るものと思つて居たのであらう。寧ろ長い泰平の間に培養された文化は正に爛熟の期に達したとも言はれ得る所もある。即ち文化の爛熟であるから、其の發生や隆盛の時期に於ける如く清新創造の意氣に乏しい所もあり、一面に於ては亞流的頹廢期の趣が萌して居ないではない。國漢の學術に於ては既に元祿享保の間に於て大家輩出し、洋學に於ても所謂蘭學事始の時期に於て、其の基礎が樹立せられたのであつた。文學に於て當時の春水種彦馬琴等はもとより各独自の領域を開いては居たが、其の源泉は寧ろ西鶴近松の時代に存するといへよう。心學の流行や、或は實行的な陽明學若しくは文獻考證學風の勃興等、何れも其自身十分に文化的意義を有つて居るものではあるが、然も

同時に前代の學術を通俗的に普及化し、若しくは實踐的に發展せしめた趣を具へて居ることは掩はれない。要するに若し獨創や組織を以て文化の絶頂とすれば其點に於て此の時代は稍亞流たるを免れないが、然も文化の人心に浸潤し得た點から見れば、歴史的には特殊の意義を有しないとは言はれないであらう。而して此點から考察すれば、此の時代の學者に共通な特色を規定するに當つて困難を感じない。發生以來尙日淺い蘭學に於ても既に一面には此趣が存して居ることを見るのである。是を以て觀れば、會々天保十年の事件の中に、やゝ實行的精神に富む二人の蘭學者が罪を得たことのあるのは、百年前の回顧に當つて最も代表的な話題を提供するもののやうに思はれる。

然しながら私は特に是等の人々の事蹟に就て研究したこともないから、其の知識は斷片的であり又平凡である。其の人物性行に關しても、近來の文學的著作によつてやゝ深刻に解釋せられたものを一二瞥見したことはあるが、ともすれば却て昔の戯曲や物語などで感じたことが印象せられて居る。即ち黙阿彌の作によつて、團十郎の崑山と左團次の長英との舞臺姿が想出される。尤も是は實際に見たのではなく、當時の劇評や筋書などで得た印象に過ぎないのだが、

不思議によく覚えて居る。そして長英といへば勿論志士ではあるが牢名主になつたり、變名して妾宅に居たりするなど、少し悪黨がかつた豪放な人間のやうに思はれてならない。然し是は勿論芝居に適するやうに作爲せられて居るので、要するに憂國の志士で又傑出した學才を有する人であつたことは言を俟たない。たゞかなり才を積み氣を負うて禍を招く恐れもあつた人であるらしく思はれるが、此點から見れば正反對らしい性格の崋山も同様の運命に遭遇したのはたゞ時勢の然らしめる所と歎ずるの他はないであらう。

崋山に就ては暫く之を措き、今私は主として長英を話題としようとするのであるが、然し之に就てもたゞ蘭學者としての一面を少し述べて見るだけである。周知の通り、彼はシーボルトの弟子であつたが、先年覆刻されたシーボルト文獻によつて、其の攻學中に試作した種々の蘭文が公にせられて居る。シーボルトは今日の外國語教師のやうに、種々日本の事物に關する簡単な作文を生徒に課して、一は生徒の語學練習に資し、一は自らの日本研究に材料を供給せんとしたのであつた。それで諸門人は日本の地理歴史や、江戸其他の名所舊蹟や、飲食風俗等に關する短文を草して居るが、毛筆を以て綺麗に筆寫してある所、其の文章の相應に要領を得た

らしく判讀せられる所を見れば、是等の學徒が刻苦勉勵した有様が察知せられるのである。志士として又俠醫として幾多の壯烈な行動に出た長英も、學生としては忠實で又細心な用意を有したことが窺知せられる。其の後に公にした諸譯書が當時絶讀を受けたといふことも淵源深きものがあり、而して獄を脱して百方生命を保全しようとしたことも、一は其の才能によつて我國の知識開發に資せんがためであつたことを想へば、其志は又悲しむべきものと謂はねばならない。

高野長英の事業が醫學のみならず、兵學、政治經濟等種々の方面に互つて居ることは周知の通りであるが、此に我々に取つて興味のあることは、一種の哲學史を書いて居ることである。蓋し此種の著述の嚆矢ではあるまいか。其著は『聞見漫錄』中の一編で、今は全集第四卷に收められて居る。私は不幸にして此文を草するまでまだ此の全集に接する機會を得ないが、嘗て或る雜誌（學藝）に引用してあるのによつて之を知つたのである。間接の知識で説くことは聊か恥づべきことであるが、全集を入手するまで暫く、の拔萃によることとする。本文には別な哲學史といふやうな標題もなく、又哲學に相當する語は使用してない。且つ其中には所謂自然

科學をも併せ論じてあるので、勿論嚴密な意味での哲學史ではない。先づ書き出しには「西洋に學師の創りしは又甚だ尙し、其の嚆矢をタレス及びヒタゴラスとす」とあることは、正に紋切型の記録である。タレスの事を、西洋厄勒矢亞國のミレテンのヨニインといふ處に生れ七哲の第一で「ヨニイン贊の祖」と記してあるが、ミレトスとイオニアとを少し取りちがへてある、又其の弟子の中にはアナキサゴラスをも算へて居る。次にヒタゴラスの事を説き、「其の子孫にアルセイラウスといふもの出づ。又其門にソコラーテスといふものあり」善を以て一家の教を立て」と記し、其の及門の學徒中「プラトといふもの秀出せり」とし、「古より此人を讚美してゴットレイキの語を冠らす、蓋し亞師の義に當る」と説いて「猶孔子の顔子の如きか」と註記して居る。其の門下には「アリストテレスを以て第一とす」とし、「アリストテレスに至りて諸科を纂輯して一家の學を立てた」としてある。其の學の中、文理解（論理學或は辯證學）を一科とせず、又「其の窮理學は一に無用の謎語汪洋たる事を辯ずるを主とす」と批評して居る。此にアリストテレス及び中世の學術に反對して起つた近世科學の精神を示す所が現れて居る。希臘哲學に就てはなほアルセシラウスの懷疑説、セノのストア派やエヒキュルス等の事を説

き「數百年の間プラトの學も自ら衰へ、唯アリストテレスの學のみ盛に行はれたり」として、一轉、中興紀元千四百七十三年、プロイセンに延表するの處トルンにコーベルニキユスが「地動の眞理を發明」したことを特筆し、更にフロレンセにガリリウス・デ・ガリレオの出でたことを記し、其説を尊信せるガッセンジの名を擧げ、「此同じ時にレネ・デル・カルテスといふもの起りてコーベルニキユスの説を崇び其説を補益したり」と記し、「但し舊染の存する所免るゝを得ずして其の論眞偽相半すと雖も世人千古の學風を棄て、實學の眞理に入るは此人の力なり」と評して居る。「但し此の以前にも既に諸名哲ありて舊説の非を知り新説の善を稱するもの多し」として「イギリス國にてはカンセリール・フランスにてはヘルラムの隱君ベッコ」を擧げて居る（此「フランスにては」は或はフランスか、又カンセリールは固よりチャンセラー、隱君はロードに當る）。そして此ベッコ即ちベイコンから新説の眞始めて明となつて「遂に三大家興る」としてニュートン、レイブニッツ、ロツケの三者を擧げて詳説して居る。「此より後數家の名哲出づと雖も其中に拔出して今時の師となるもの、學師ウルフを以て第一とす」とし、其説が數學を基とし確實なることを賞揚して居る。「此に各實測に仍りて一も虛妄の空論なく日を

逐ひ月を積むに從て明亮確實の説漸々新たなり、是れ西洋開闢以來五千八百四十年の間學師の興廢得失を論ずるの梗概なり」とあつて、所謂啓蒙時代に筆を絶つて居る所を見れば、其の資料は此のヲルフ派の蘭書に存することは明かである。而してアリストテレスを貶しデカルトにもやゝ服せざる所があり、而してベイコン以後の學風を揚げる所、其の學風を察するに足りる。なほ其の諸學科を分類して五科とし、レイデンキユンデ（「假りに理義學と譯す」）、セーデンキユンデ（道學、教學、政學等）、ナチウルキユンデ（格物窮理學）、ホーヘンナチュウルキユンデ（精神學、世界學、鬼神學等）、ウイスキユンデ（算學、度學、星學等）で、なほ史學を之に附するものとして居る。

以上に就て長英がなほ如何なる點まで研究を進めたかは知らないが、十八世紀の經驗論的學風を以て哲學の變遷と體系とを説いた所は注目するに足りると思ふ。之より後暫くにして和蘭に留學した西周其他が哲學を説いたことは周知の事實であるが、哲學といふ語こそ用ゐないけれど、古來の大哲人の名稱をかほどまで詳しく記したことは、我々に取つて寧ろ驚異に値することではなければならぬ。『聞見漫錄』は天保七年の作であるから、罪を獲た天保十年より三年

前に著はされたものである。入牢後は兇惡無智の囚人と伍して徒らに月日を送り、後一時出獄の機を得てから又歸らず、變裝して逃竄して居たが、最早世を忍ぶ身で凡て自由を缺き、たゞ他の命によつて翻譯を事とするに止まつて居た。斯くして當時一世に傑出した學才を抱きながら、空しく世を逝るに至つたことは惜しむべきの至りであるが、其の壯時の學習の状態や、早く西洋の哲學までも理會した點に於て、尋常の志士と選を異にする所あるを見て、益々其人を追懷するの念に堪へない。古來學者として此の如き運命に陥つた者は絶無とは言へないが、然し稀有の事に屬すると謂つて可いであらう。

翻つて同年代の歐洲を見れば、各國は佛國革命、ナポレオンの盛衰を承けて、到る處革命叛亂等の氣運が動き不安動搖の兆が現れて居る。而して此間に於ける文化は、十八世紀の餘勢を受けて爛熟の域に達し、新興の科學は漸次勢を得て形而上學の國土と稱せられた獨逸に於ても自然科学全盛の期に至つたが、反對に哲學に於ては、十八世紀末から十九世紀初に現れた諸體系家は有力な後繼者を得ずして亞流の時代を現出しようとして居た。歴史的部分的研究が主潮となつた獨逸の學風は正に之を證するものである。試みに手許の年表に徴すれば、一八三九年

にはツェラーの『プラトン研究』が出版せられ、翌四〇年にはトレンデレンブルクの『論理研究』が公にされて居る。而して又四一年には英國にカーライルの『英雄崇拜論』が出て居るが、斯くカーライルやエマソンが活躍せることは、即ち十八世紀末から十九世紀初に至る獨逸古典哲學が一般化普及化せられたことによるもので、此點に於て元祿享保の學術から天保の時代に至る學術民衆化の趣を聯想せしめるものがある。但し歐洲には此間に於て大鹽中齋の如き高野長英の如き運命を有する學者を見ないやうであるが、是は大體に於て十八世紀革命時代の學者に於て類例を覓め得べきもので、自から彼我社會文化の相違を示して居るものとも思はれる。然し學者にして生命の危険まで曝されなまでも、種々の迫害を受けたものは、百年前の歐洲にも其例は決して稀有絶無どころではないのである。

百年前の回顧は此の如く東西の類同を示すものがあることを告げるやうである。人は多く兩極端の事例を捉へて「東は東、西は西」といふ。然も上來所述の如くすれば、人心の發達に自から同一の段階のあることを認め得ないとは言へないであらう。知らず現在果して如何。

——一四・一〇理想——

## 學究の生涯

——キユリー夫人の傳記——

あまり評判の高くなつた書物はつい読みそびれてしまふ癖がある。「キユリー夫人傳」といへば近頃大抵の人の折紙付きの書となつて居るが、嘗てタイムズ新刊批評か何かでその英譯の紹介を見た時、其中に原文を、と思ひながら機を得なかつた。其後間もなく邦譯が出て大評判となつたので、意頗る動いたが例の癖が出て躊躇して居た所、たうとう娘や孫の耽讀して居るのを借覽して一氣呵成に通讀した。成程評判の高いのも尤もである。原文で讀んで見たい所もあるが、然し流石に譯者に其人を得たか、原文を拾ひ讀みしては得られないであらう感興を、自由な通讀によつて味はふことを得た。それでつまらない依怙地を廢めて私も素直に此書の禮讀者になることにしたが、さて讀過中感じたことを少し記したくなつた。今更遅時きに此書を批評しようといふのではない、又必しもキユリー夫人のみに關したことはない。此書によつ



て惹起された學者の生涯運命に關する感想といつたやうなものである。

私がこの書について自分だけの特殊な興味を有ち得た點は、この書の主人公を直接目撃して居る點と、その生活の幾分を親しく體驗し得る心地がするからとである。とかく自分の事に引きつけて考へるのは、年寄りの常と恕して戴きたい。言ふまでもなく、私は夫人の學問的事業の眞意義に就ては全く理解し得ない門外漢であるが、不思議の縁でその講義を聽聞し、謂はばその警咳に接したのである。今から三十年前の昔、一九〇九年のことで、恰も非業の慘死によつて中道挫折した夫教授の後を繼いで、夫人が巾幗者流の身を以て同じ學府の講壇に立つて居た時である。當時私は巴里に留學して居たが、一日宿の老主婦の發意で、宿泊者一同で講義傍聽に出かけたのであつた。一行は洪牙利の中學教師とか、獨逸の語學研究將校とか、露西亞の女學生、佛國地方出の建築學生、その他語學教授と美術研究とをして居る宿の二令嬢などといふ顔觸れであつた。その他には丁度その折、物理學專攻の私の弟が伯林から旅行して來て私の宿に滞在して居たので、無論之に参加した。専門知識の方では弟のみが理解力を有つて居た譯で、他の人々は假りに言葉は分つたとしても、斯る高尚な科學は馬の耳に念佛の手合のみであ

る。だから一行は傍聽といふよりも寧ろ見物に行つたといふ方が適當なので、又皆其積りで出掛けたのである。たしかガレリー即ち二階の席か或は高い階段の上方かに陣取つたのであつたが、やがて時間となると、髯面の立派な助手の實驗など對手に此の夫人教授は滔々とその研究について講義を開始した。その服装容貌などは今書物の口繪肖像にある通り、詰襟の質素な黒服である。其頃は年齢などは察知せられなかつたが、書物によれば四十歳前後で當時の私共よりも遙に年長であつたから、其頃は無論相當の年輩の人と思つて居たが、今となつて考へると、男子の教授としても隨分若い方だつたと言はねばならぬ。然も此の傳記によれば、二人の遺兒を教育しつゝ、悲しみを包んで先人の遺志を紹介んとする最中であつたのである。當時は其等の詳細については知る由もなかつたが、たゞラヂウム發見によつて數年前から著名であつた學者を窺知することによつて、私共は大なる満足を得たのであつた。今此書を読んで其頃の記事に至れば懷舊の念頗る切なるものがある。

私の宿の老夫人が何故に斯るアヴァンテュールを行つたか。此人は軍醫の未亡人で勿論多少の教養はあるが、特に學界に關係を持つて居るのではない。然も此の如き學に出たのは、これ

は巴里の人々には珍しからぬことで、畢竟ルーブルやノートル・ダムを旅客に案内すると同様の心持を以て、佛蘭西名物を紹介する目的に出たのに他ならない。そして佛蘭西では周知の通り、大學の講義は大部分公開的であるから、ソルボンヌの大講堂には、他に業務を有する官吏、教員や、労働者も、日々徒然に苦む閑な老人夫婦や、或は數日間の滞在で赤表紙の旅行案内を携へる忙しい旅客など様々の聴講者が堂に満ちて居る。それで其頃既にベルグソンなども同様各種の參詣者を集めて居たが、キュリー夫人のは婦人の科學講義といふ點で特に此の軍醫未亡人の感興を惹いたのかとも思はれる。然しこれは私の宿に限らないことで、諸方に於ても同様の計畫があつたのである。現に此日も他の同様の聴講者を見受けたが、斯る彌次馬の闖入は講義者自身に取つては必しも便利とは思はれない、却て迷惑とも察しられるが、然し學術文化に對する市民の關心の大なることを示すものと認められるであらう。

佛蘭西の大學講義の公開的な點は他に類の少ないことのやうである。獨逸大學でも昔は聽講が比較的自由であつたが、それでも一般には學生の籍にあるものに限られて居た。佛蘭西にも若干學生のみに對するものもあるが、然し公開のものは頗る多い。其他また臨時の講義も概し

て公開であり、新聞にまで毎回案内が出て居るものもある。而して此の聴講者には妙に老人が多いから、私も何の氣兼ねなく最近巴里滞在の間屢々語學練習の目的を兼ねて講堂の後に坐して居た。三年前の事であるが、或日新聞の記事によつて和蘭の文化藝術の特別講義を傍聽に行つたことがある。教室も小さかつたが、聴衆は初め僅に數名で、揃ひも揃つて男女の老人であつた。後次第に増加したが、結局十數名を出なかつた。此人は和蘭の學者であつて幾分和蘭の宣傳用事を帯びて居たらしかつた。幻燈使用の講義で却々面白い繪もあつたが、然し斯る老人のみに講義したのでは餘り張合がないのではないか、とも餘計な心配をしたことであつた。然しそれはとにかく、斯様に聴講を老後の楽しみとする習慣は、如何に見ても非難すべきこととは思はれない。

話が傍道に外れたが、次にキュリー夫人の傳について私が感興を起し得た點は、その學者關係の事である。キュリー夫婦は恬淡寡慾でたゞ研究心に燃える學究であつたから、その攻學に便利なためには大學の地位を選んだが、其他に何等の虚榮をも望まない。それで佛蘭西で少し名聲のある人ならば必ず帯びて居る筈の勳章をも辭して居たが、學士院に入ることだけは人々

の勧めに従ふことにした。學士院即ちアンステイテューに入ることは日本流に考へれば勸告に従ふも何もないことであるが、佛國では少し事情が違つて居る。此事に就ては生化學者で學士院に籍を列するリシェーの隨筆的著述『ル・サヴァン』に面白く記してある。先年私は興に乗じてその大意を抄譯したこともあるが、(『哲學と文學との間』参照)之によれば、會員に缺員の生じた場合には候補者が公定せられ、選舉を争ふやうになつて居るのである。而して之がために候補者は豫め選舉者たる全會員を歴訪しなければならぬ。我邦のやうに當選の報道が本人に取つては全く寢耳に水であるのは大に趣を異にして居る。日本では又代議士などの選舉運動にも戸別訪問を禁止してあるが、佛國の學士院に入るためにはあらゆる先任會員を訪問し、面會を得なければ、名刺を以て其意を通じなければならぬ。實際反對派の會員などが之に對して如何なる態度を執るか、といふことも想像せられて面白い。先年屢々日本に渡來して帝國學士院の客員に推薦せられたシルヴン・レギー氏は此の歴訪を屑しとせずして遂に自國では此選に入るを得なかつた、といふことを聞いたこともある。キュリー教授の性質としては、斯る事情にあつて此の會員たることは其意に適せぬことであつたらうが、知友等の切なる勸告によつて

其の運動を承諾し、僅に一票かの多數でとにかく當選したのであつた。

さて夫人の場合は、第一先づ婦人として大學教授となる事に一の難關があつたが、是は法令の改正によつて途が開かれたらしい。現に私等の聽講した時は既に此の問題の解決した後であつた。然るに今又新に學士院入りの勸誘があつた。夫人も初は辭して居たが終に其の運動を開始することを承諾したらしい。然るに此の傳記の示す所によれば、その反對候補者は加特力教の一學者で許多の資縁を有する勢力家であつた。それで夫人は本來外國人であるとか、婦人の會員は違例であるとか、其他斯る場合に有り勝ちな例の猶太人であるとか(是は全く事實でないが)様々な虚構の報告や、相互矛盾する故障の申立などが宣傳せられた。而して其の結果は終に夫人の失敗に歸したのであつた。此の記事を讀みつゝ私は端なくジードの小説『法王廳の抜穴』にある同様の説話を想起す。尤も是はアカデミーの方で、或はジード自身の感想を記したのであるかと思はれるが、選舉の方法などはアンステイテューでも同様のやうである。學者は本來名利に恬淡たるべきものであることは當然のやうに思はれるが、一方には又極端に偏狹で我儘の所もある。是が凝つては不撓不屈、權勢に媚びないやうな精神にもなるが、罷り間違

へば依怙地で偏屈になつてしまふ。前記リシェーの書物にはその諸態を面白く敘述してあるが、キュリー夫人の挫折も畢竟この犠牲になつたものに他ならない。夫人ももとより神の如き超越した心情を有つては居まいから、既に中原の鹿を争つた以上、失敗したことには幾分の不快を感じぬことはなかつたであらう。而も隠忍屈せず、且つ高名な女人に對して有り勝ちな悪評などのためにも頓挫することなく、靜に天職を守つて學界の光榮を一身に荷ふやうになつたことは、常人の容易に企及すべからざる所である。

夫人の一生は學徒に取つて幾多の教訓を與へるものであるが、其の周圍の狀況も學界稀有の幸福を伴つて居る。夫人の艱苦して育成した二女の一は後夫人に繼いで又ノーベル賞を受けた科學者となり他の一は藝術に身を投じて現に斯の如き文學的作品を以て母を傳へる彩筆を有して居る。更に其の兄弟姉妹を質せば何れも努力の中に勉學して各一家を成して居る。その父母は又共に學術に傑出した人々であり、波蘭人の困阨其極に達する中に在つて教師として其職を全うするのみならず、博學多識常に新知識を趁うて居た。斯の如き家庭の雰圍氣にあつて早く頭角を顯したキュリー夫人が、一たびは自らその天分を犠牲として姉の攻學を助け、後遂にそ

の力によつて己の欲するが儘に學事に勉めることを得た頭末は、百般の修養書よりもよく人を感奮せしめるものである。更にキュリー氏に嫁して後も、微力なる市立の専門學校で致々研鑽し、遂に學界に大發見を齎したことは、世間幾多の研究家が徒らに資金の不足と設備の缺陷とのみを口にする者に考慮を促す所があると思はれる。然し私は此書からかゝる安價な御談義を引出さうとするのではない。平凡な修養論をするには此の人々の事蹟は餘りに美しいのである。

私は此傳を讀みつゝ、巴里の地圖を開いてキュリー教授の遭難したドオフィヌ街のあたりを回想した。此の附近は私の近年屢々宿泊したマドレーヌ附近とソルボンヌの中間にあり、常に往復して熟知の所である。其傍にある學士院も嘗て卅餘年の昔傍聽に赴いたこともある。更に其の學究夫婦の所謂愛の巢を營んだグラシェール街は、私が卅餘年前夫人の講筵に臨んだ折宿泊して居たポル・ロアイヤール大通の附近である。今是等を追想すれば、舊新の記憶は雜然として私を夢幻の裡に導かんとする。然しこの如き私事をのみ管々しく記述することは餘りに老の繰言らしくなつてしまふ。私は此の感想の筆を茲に擱くことにしなければならぬ。

——一四・二中外商業新報——

『江口』と『石橋』

——普賢と文珠、プラトンとカント——

嘗て謡曲『山姥』の構造が、其儘一系の哲學論文と見立てられることに興味を感じ、之を「日本文學に於ける哲學」と題して分析を試みたことがあつたが、實際之と同様に取扱ひ得られるものとしては先づ『江口』を學び得ると思つて居た。爾來其の構想が念頭を離れなかつたが近頃思ひ立つて少し詳しく檢べて見ると、益々其の想念を確實にするやうな氣がしてならぬ。所が『江口』は釋迦の右脇侍たる普賢菩薩の事を説いたものであるから、之に關聯して、左脇侍たる文珠に關係ある『石橋』の事にも言及したくなつた。そこで江口、石橋兩曲其自身から延いて普賢、文珠の事を調査したくなり、辭書や註釋を參考して、それから坐右にたゞ陳列してある大藏經を盲探しに探し廻り、華嚴經や法華經、さては、探玄記、玄義など其註疏類

を少しばかり涉獵して見たがどうも茫漠として容易に纏りさうにもない。其處で其等は他日に譲ることとし、主として『江口』を吟じ『石橋』を觀るもの感想だけを綴ることにした。謡や能に關係もない理窟は、其れこそ「花見る人の長刀」の嘲りを招く恐れがあるが、是も持つたが病の、無くて七癖の一つでは是非もない。

『江口』の荒筋は大體次の通りである。西國行脚の僧が都から淀川を下つて江口に着き、此所は昔、西行法師が、雨宿りを辭られたので「世の中を厭ふまでこそ難からめ假りの宿りを惜しむ君かな」と詠じた舊蹟である、と口吟んで立去らうとする所に、忽然として里女が現れ出で、其の宿主は「世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ」と返歌して眞は宿を惜しまなかつたのであると辯じ、實は我こそ其の折の江口の里の遊君であるといひつゝ消え失せる。更に僧の讀經の中に、昔の姿を現じて、華美な舟遊びの趣を示しつゝ、實相無漏の眞諦を説いて、遂に己が普賢菩薩の化身なることを打明けて其舟の變じた白象に打乗り立去る、といふのである。

此の江口の里で西行が遊女の宿を借りて歌問答をしたことは、西行自身の著といはれる『撰

集抄』第九の中にも詳しく記述してあり、其の歌は新古今和歌集や山家集、西行物語などに採録されて、其の女の名も、妙といふ、と記されてある。但し遊女が普賢の姿を現することは性空上人が室（周防の）で實見したことのやうに撰集抄第六に出て居る。そして又別に西行が江口の遊女の尼となつたものと「月はもれ雨はたまれと思ふには（謡曲では「とにかくに」となつて居る）賤が伏屋をふきぞわづらふ」の連歌を試みたことも同書第五に出て居て、是は謡曲『雨月』では老人夫婦と西行との話にしてある。此の江口の老尼が果して前の遊君と別人であるか否かは分らない。全體此の説話が西行の自筆でもなく、又全然假託かも知れないが、此にはそんな詮索は必要ではない。たゞ此書に顯れる限りでは、西行は此種の遊女に相當好意を表して居るらしく、同書第三にも播州竹岡尼發心事と題して、もと室の遊女であつたものが庵を結で行ひ澄す尼となつたことを記して「哀に貴くも侍る」と賞讃して居る。とにかく世俗を超脱した行脚僧と歡樂に沈湎する遊君との對照は優に詩興をそゝるに足るものと見え、此の説話は謡曲を経て他の俗曲にも取り入れられてある。長唄『時雨西行』は大體に於て謡曲に從つて居るが、河東節の『江口道行』では西行と遊女とが道行をすることにたり、西行が「草津に濡れ

衣、裾も袂もしつぽりと裾（濡？）れた姿を伴ふを水にわるきその人は花色衣といひやせん」といふと江口は「聞いて打笑ひ、なんにも障りは御座せぬに、何しに人の申さんと謡ひつ又は戯れつ云々」とある（偶然佐々氏の俗曲評釋中にて知り得たもの）。なほ他にも種々あるであらうが、斯うなると妻子珍寶を蹴飛ばした世捨人もとんだ俗界の遊蕩兒扱ひにされた譯である。

江口が「天下第一の樂地」たることは大江匡房の「遊女記」によつて人々の洽く知る所である。「自山城國與渡津。浮巨川西行一日。謂之河陽。往返於山陽南海西海三道之者。莫不遵此路。江河南北邑々處々。分流向河内國。謂之江口。」そして此附近の神崎蟹嶋等に至るまで比門連戸。人家無絶。倡女成群。棹扁舟。着檢船云々とあつて、其の遊君は皆是俱尸羅之再誕。衣通姫之後身也とあつて、上自卿相下及黎庶。莫不接牀第施慈愛。云々とある。然も此江口の遊君も何時しか菩薩の化身として後の世までも渴仰されるやうになつたことは『謡曲拾葉抄』に「江口は在攝州西生郡中島丑寅河端、近世一字を建立して本尊に普賢菩薩を安置し、普賢院と號す、江口の君の御影あり、其邊に小き池あり云君淵」と記して烏丸資慶の高野之紀行を引證して居る所によつても察しられる。斯うなると、西行にしる、性空にせよ、高が一娼女を禮拜

渴仰しても怪しむを要しないことになる。然し此の如き意味もない考證に耽ることは此篇の目的と餘り懸け離れることになるから、拾葉抄の簡単な斷言に従て「私云、此語は西行法師江口の遊女に宿かり給ふ事と性空上人室の遊女普賢菩薩と拜まれ給ふ事と此二義に依て作るなれ共、語の始終は皆西行法師の事に作りなしたり」とある通りにして本論に進んで行かう。

此曲の作者に就ては古來『山姥』と共に一休禪師の名が傳へられても居たが、是は固より俗説で、大體金春禪竹の作と推定せられてある。但し一休に「題江口美人勾欄曲」といふ詩があり、「右金春遊客江口歌題之」として「以與禪竹老僧者也」とあるから、俗説も全然關係のないことでもないことは、狂雲集や禪竹關係の書類で知られる通りであらう。實際曲中には佛教の説法があること、山姥と同様であつて、然もまた此點に於て私の哲學的解釋も誘致し得たのである。但し其の文句は大部分解脫上人貞慶の『愚迷發心集』や其他の諸末書から出たものであることは拾葉抄に註してある通りであつて、佛教専門家の眼から見たら極めて平凡な言説かも知れないが、其中に一種の哲理を、然も曲の發展と共に順序正しく説いてある點に特殊の感興を催さしめるものがあるのである。

今端的に結論を説けば、山姥の語る所は煩惱流轉の世界で即ち意欲としての世界であり、江口の示す所は普賢即ち理徳或は定慧に現はれる絶對智の世界であり、而して石橋は文珠即ち妙徳或は智慧の容易に到達し難き超越世界を説いて居る。思ふに慧眼なる讀者はこゝに直ちにシヨーペンハワーとプラトンとカントとの對立を想像せられるであらう。

『江口』は先づ求法の僧の「月は昔の友ならば世の外いづくならまし」といふ句（次第）を以て始まる。拾葉抄の解によれば「閑居の身は鳥の聲、松の風、月雪を友とす、然らば世を外にする身の月を友とするならはいづくにか世を外にせんとなり」といふ。即ち月もなほ世外のもと言はれぬとすれば、何處にか眞の絶對超越の境地を求むべきぞ。是が正しく全面のライトモチーフとなり、全篇のテーマとなる所のものである。

斯くて此の諸國一見の僧の懷抱する問題は、昔西行法師の同様な問題を解決し得た江口に於て等しく又解決の機に觸れることが出来たのであつた。僧が江口の里に着いて西行の故事を想

起し、然もたゞ西行の提出した問題歌のみを吟誦しつゝ過ぎんとすれば、人家も見えぬ方より忽然と出でたる里の女は先づ其の解釋の緒を暗示する。即ち西行の歌は雨宿りを拒む主を諷して、例の「世の中を厭ふまでこそ難からめ假の宿りを惜しむ君かな」と言ひ、感覺相對の世界に對する叡智絶對の世界を問題とすべきことを注意したが、女性は「世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ」と返歌して、西行にもなほ執着があり、眞の絶對を體得しないことを揶揄して問題解決の途の却て其の窺知せざる方面に存することを指摘したのである。

里の女は僧に向つて往事を辯じつゝ「惜しむこそ惜しまぬ假の宿なるを、などや惜しむと夕浪のかへらぬ古」を誤まらぬことを勧めながら、終に己の本體がその江口の遊君に他ならぬことを顯して「たそがれにたゞすむ影はほのく」と見え隠れなる川隈に江口の君とや見えん耻かしや」と言ひつゝ、やがて「江口の君の幽靈ぞと聲ばかりして失せ」去つた。是に於て苟くも此の世界に於て經驗せられるものは、其の經驗せられる限り悉く皆感覺世界に屬して厭離すべきものなることを知つた僧は、恰かも洞窟に面して常に影像のみを見る所の、彼のブラトンの譬喩に於ける感覺人が、忽然として他に眞實の善美を極めた世界の存することを曉得し

た時の如き感を懐いたのである。然しながら眞實の境地はまだ容易に凡俗の眼に現することはない。僧は先づ此の眞如實相の假現に接して驚歎の念に打たれるのである。

能樂に於ては此に江口の遊君が伴侶と共に「川道遙の月の夜船」に其の艶麗の姿を現す場面となる。

地「川船をとめて逢ふ瀬の浪枕／＼浮世の夢を見ならはしの驚かぬ身のはかなさよ。佐用姫が松浦瀉、かたしく袖の涙のもろこし船の名残なり。又宇治の橋姫もとはんとせぬ人を待つも身の上と哀なり。シテ「よしや吉野の地「よしや吉野の花も雪も雲も浪もあはれ世に逢はばや。

斯く抄し來れば、往昔の夜船は髣髴として目前に現じ來り、吟誦の意頓に動いて、最早之を勃率の理窟化する氣も疎ましくなるが、勇を鼓して更に幻影破滅の筆を進める。本文の僧も亦求道の他に餘念のない無風流漢である。面前此の美しい幻影に對しながらなほ論理分析の常道を脱し切らず、現實と夢幻との差別に拘泥して圓融相即の妙諦を悟了しない。「そもや江口の遊女とは、それは去りにし古への」と愚問らしいものを發するので、遊女の靈も聊か持て餘し氣



味である。「よし／＼何かと宣ふとも言はじや聞かじむつかしや」と、所謂悟性的間接智の問答を排して再び歌舞音楽によつて直接智を誘致し眞諦を示現せしめんとする。「秋の水、みなぎり落ちてさる船の月も影さす棹の歌、歌へや歌へうたかたの哀れ昔の戀しさを、今も遊女の船遊び、世を渡る一ふしを歌ひていざや遊ばん。」

斯くして遊舞の歌詞によつて深玄の妙理を提唱する。其の言辭は既に述べた通り先づ大體解脱上人貞慶の愚迷發心集によるものを以て始まる。貞慶は平安末期から鎌倉時代に互る法相宗の有名な學匠である。其の教説は果して普賢菩薩の眞意を發揮するに足るか否かは詳にしないが、謡曲は此の辭句を以て人々の妄執に囚はれることを説明する。「夫れ十二因縁の流轉は車の庭に廻るが如く鳥の林に遊ぶに似たり」といふ起句は同じく解脱上人の筆に成れる『六道講式』によるものとせられるが、續て「前生又前生、曾て生々の前を知らず、來世又來世、更に世々の終りをわきまふることなし。或は人中天上の美果を受くと雖も顛倒迷妄して未だ解脱の種を植ゑず、或は三途八難の惡趣に墮して患にさへられて既に發心の媒を失ふ」と説く所は發心集の「夫無始輪廻以降、死此生彼之間。或時鎮墮三途八難之惡趣。所得苦患而既失發心之謀。

或時適感人中天上之善果。顛倒迷謬而未殖解脱之種。先生又先生都不知生々前。來世猶來世無辨世々終。」を巧に詞曲化したものである。然も此の如き一般の迷妄の境地に沈湎する遊女の身上に於て其の最も顯著なる實例を示し得たのである。斯くて「然るに我等たま／＼受け難き人身を受けたりと雖も、罪業深き身と生れ、殊に例しすくなき河竹の流れの女となる、前の世の報ひまで思ひやるこそ悲しけれ」と歎息し、春の花秋の紅葉さては松風蘿月に詞をかはず賓客まで「心なき草木、情ある人偷いづれ哀れを遁るべき」ならぬ世の中に、なほも「色に染み貪着の思ひ淺からぬ」皆人は六塵の境に迷ひ六根の罪を作る事」を凡て皆人の迷ふ心なりと斷じて、感覺世界の畢竟臆見（ドクサ）の世界たることを徹底的に會得せしめる。

能に於ける靜寂なる舞は此に一轉して「面白や」の一句によつて典雅な序舞に移るが、其の辭句も亦一轉して問題解決の團圓に達するやうになつて居る。蓋し現世の相對界は迷妄であるが、之を離れてまた何處にか眞如の絶對境を求められようぞ。斯く觀じ來れば實に是れ「面白や實相無漏の大海に五塵六欲の風は吹かねども隨緣眞如の波の立たぬ日もなし」である。然も「浪のたちぬも何故ぞ」と問へば、たゞ「假なるやどに心とむる故」と答へる許りである。臆見

の世界に住し洞窟の中に縛せられてたゞ對壁の陰影のみを凝視するのみなる感覺人も、一たびイデアに對するエロースの念に専らとなれば、直ちに眞知の境に安住することが出来る。其故に「心とめずば浮世もあらし、人をも慕はじ、まつ暮もなく、別れ路もあらし吹く花よ紅葉よ月雪の降ることもあらしなや」と觀することが出来る。何となれば身は有爲轉變の生を受けても其儘に心を常住不滅の境に置くを得るからである。

有漏の人界に在つて、殊に罪障深き身と生れながら、既に此の妙諦を説いて「假の宿に心とむなと人をだに諫め」得たる遊女である。最早之を尋常の女人と目すべきではない。果然此の妙理に曉得した僧の眼にも女人は即ち「普賢菩薩と現れ、船は白象となりつつ、光と共に白妙の白雲に打ち乗りて西の空に行き給ふ」姿と現じて、此に「有難くぞ覺ゆる、有難くこそは覺ゆれ」と悟道の果を結ぶことを得たのである。

此の如くして、江口の女は遂に普賢の化身に他ならぬことを示した。さて何故に是が普賢でなければならぬかといふことは、まだ普賢に關する重要なる文獻に徴して論證するを得ない所

であるが、普賢即ち三曼多跋陀羅の語義に徴しても、其が理若しくは定の徳、所謂三昧の正心行處、息慮凝心によつて直ちに絶對眞實の世界を捕捉する本有智を象徴し得ることによつて幾分理會し得られるやうである。即ち『江口』一曲は迷妄の中に直ちに實相を觀じ得る眞知を示したもので、正にイデア界を傳へ得るエビステーメーを説いたものである。而して此點に於て恰かも、釋迦の左右に分れて之と對峙せる所の、文珠の智慧と對照をなすものである。蓋し文珠といへば俗にも智慧者の代表の如く思惟せられ、『維摩經』に於ても獨り身を挺して維摩の方丈に進んで智を闘はし得る如く説かれて居るが、之を普賢と比すれば自ら特色を示して居る。華嚴探玄記十八には「釋有三義。一普賢當法界門是所入也。文珠當般若門是能入也。表其入法界故。二普賢三昧自在。文珠般若自在。三普賢明廣大之義。文珠甚深之義。深廣一對故。」とある。其説の詳細は遽に理會し難く、一見すれば諸解の中幾分一致し難い所もあるが、要するに普賢は理徳を表し、文珠は智徳を表すると稱せられるが如く、普賢は本有智を表すると共に其の智の對境其自身を示す所に三昧自在であり、文珠は修生の智徳證徳を表して飽くまで智徳に止まつて居る。所入能入の別もまた此意を示すとすれば、普賢が認識即實在の客觀境を表し文

珠は認識思惟の主觀域を表するものとも見られるのではあるまいか。智惠の主觀的活動は幾多の障碍妄想を破らなければならぬ。之を象徴して、文珠の住する清涼山に於ける毒龍の害に對して獅子の猛威を要するものとせられる。尤も文珠獅子に乗する姿は金剛界に於ける姿であつて、胎藏界に於ては白蓮臺に坐し既に靜平超脫の狀を具するものとせられるが、一般には獅子に乗するものとせられて居る。此に獅子を主題とする『石橋』の謡曲が成立するのである。

『石橋』は本來伎樂舞樂等の獅子舞に因づくもので、歌詞もたゞ之を示すに足るものに止まり、其の文辭中には特に佛典等の内容として擧げるべきものもない。即ち能としては其の舞樂に多大の興味があるが、文辭はたゞ一には石橋の奇觀を敘すると、一には獅子の威勢を示すものにと歸するやうに見える。然も又實際の舞樂としては後世の藝術に影響する所が多く、長唄にも謡曲を其のまゝに傳へた石橋を始として越後獅子、英執着獅子、鏡獅子其他何々獅子の類が頗る多く、其他の諸曲にも之を題材とするものは算するに暇ない程であり、猛き獸王も牡丹に戯れ胡蝶と遊ぶやうな愛すべき姿態を示すやうになつた。此の如き親しみ多い曲を又もや理

趣に累すことは頗る心ない業ではあるが、少しく之に言及して此の談義の終結を作りた。

『石橋』の構想は頗る簡單である。寂昭法師が入唐して清涼山——實は五台山にあるといふ——の石橋を渡つて文珠を拜せんとすると、樵童に制せられて暫く文珠の奇特を待つ。其の童子こそは文珠の化身である。人力の越え難き石橋を渡ることを止め、やがて影向の時節となれば獅子に舞樂を奏せしめて、文珠の淨土を遙かに相望するに止まらしめる。こゝに又種々考證することも出来るが、今は割愛する。

寂昭法師は普通の感覺界に住して直ちに一切知識を修得せんとするものである。「松風の花を薪に吹き添へて雪をも運ぶ山路」に在つて既に眞智の境地を窺ひ得たる般若自在の文珠童子は、此の如き感覺人の到底こゝに到達し難きことを「たやすく思ひ渡らんとや、あら危しの御事や」と禁止する。法師も是に於て始めて人知の有限なることを覺知して「唯世の常の行人は左右なく渡らぬ橋」と觀すれば、童子は更に語を續けて此橋の「人間の渡せる橋」に非ざることを力説して「神變佛力に非ずば誰か此橋を渡るべき」と思ひ止まらしめる。

然らば橋の彼岸には何物が存するか。「向ひは文珠の淨土にて常に笙歌の花降りて簫笛琴箏篋

夕日の雲に聞え來目前に奇特あらたなり」といふ。然も其土に至るものは凡俗の倒見を排する大勇猛心を奮起さなければならぬ。即ち其の威徳は百獸の王の姿を假りてのみ現れ得る。而して其の自在なる威勢は既に一切の苦難懊惱を解脱する。即ち「獅子團亂旋の舞樂」となつて牡丹の「花に戯れ枝に伏轉びげにも上なき獅子王の勢ひ」を示すものとなる。然も此の如きは「萬歳千秋と舞ひ納めて獅子の座にこそ直りけれ」といはれるものにのみ存する境地である。即ち此に文珠師利は其名の表する妙徳、妙吉祥の智徳を以て、人間認識の有限なることを覺知せしめ、たゞ其の限界たる石橋の彼岸を想望せしめて、單に思惟し得べきも認識し難い物自體の世界たることを意識せしめたのである。

此の如くして定慧、理體を表す普賢は江口の君ともなることを示して求道の僧に開悟の機を與へ、智慧證徳を表す文珠は石橋と獅子との象徴によつて認識の有限と活動とを人間に説くことを得たのである。

然しながら以上は觀能の間に會々擡頭し來つた理窟辯の妄語に過ぎない。舞臺に於ける江口

の幽玄と石橋の豪壯との妙技は、此の如き言説のために毫も累はされる所がない筈である。

——一四・六文藝春秋——

## 【附記】

此稿偶々同學の舊友村上俊江氏の目に觸れ、華嚴學の造詣深き氏の教示を導き出すことを得たり。今之を私するを以て足れりとする能はず、或は私信を公にする罪を犯すの恐れなきに非ざるも、其中の一部を掲載して余が粗漏なる解釋を補足する所あらんとす。

氏は第一信に於て曰ふ、

……本日偶然文藝春秋を繙き大兄の江口と石橋と題する御近稿を發見し候に付早速拜讀致候處清涼大師が其三聖圓融觀に於て哲學的に説明せるものを大兄は兩謠曲を借りて之を文學的に解釋せられたるものと相認め洵に面白く讀了仕候……

次に第二信に於ては更に其の蘊蓄の一端を披瀝せらる。曰く、

御返翰難有拜見仕候長らく佛典に遠さかり居候小生も端なく大兄の御近稿に刺戟せられて種々の感想を催し候茲に更に其一片を陳へて御高教を仰ぎ候

『江口』と『石橋』

元來大乘經典の多くは其教理を戲曲的に説きたるものなれば其内より文藝的作品の脱化し來たることの尠からざりしは怪むに足らざれども小生は寧ろ今日迄一層雄大高遠の佛教的大文藝の顯はるべくして顯はれざりしを訝る者に御座候小生は謠曲には全く門外漢にして江口も石橋も未だ一讀せざるも御近稿に依りて想像するに江口の作者は華嚴經入法界品の善財童子・南游歴論中第二十六善知識婆須蜜女に往詣したる一齣（小生は茲に特に齣の字を用ひ候）からも多少のヒントを得たるものにあらざるかと愚考致候佛國禪師の文珠指南圖讚の中には此一齣を讚して

相逢相問有何緣高行如來一寶錢執手抱身心月靜吻唇嗙舌戒珠圓人非人女皆隨現天與天形應不偏三德已明貪欲際酒樓花洞醉神仙

佛國禪師は婆須蜜女を以て朝に吳客を送り夕に越郎を迎ふる一游君と爲したるものゝ如く候……

以上の詳説により余は華嚴經入法界品を精査し、氏の着眼の正鵠に中たることを感じ得たり。乃ち舊稿一篇（獨逸にて發行せる『ニッポン』に掲げたるもの、其の原文は『哲學と文學との

間』に収録せり）を贈呈して謝意を表したるに、更に又教示に接するを得たり。即ち第三信とす。曰く、

獨文山姥論御惠贈被下難有拜受、早速一讀所得不尠御芳情を拜謝仕候此謠曲は小生も餘程以前一讀致したることあり唯そは當時只ムヤミに佛教用語を陳列したるものと感じたことを記憶致す而已に御座候今回始めて貴稿に依りて佛教の法身流轉五道名衆生といふ流轉門の思想を文學化したるものと相知り申候既に流轉門の文學あれば之に對して衆生が法界に歸入する還滅門の文學なかるべからず是が例の「江口」にはあらざるかと想像致候併し何分山姥も江口も原文を見ざれば評すべき限にあらずと存候唯其後更に思ひ付き候は江口の遊君を普通ならば觀音の化身と爲すべきに其の作者が態々普賢の其と爲したる處に華嚴經入法界品より取材したる證據を見出すべきにあらざるかといふ事に有之候蓋し普賢菩薩の十大願中第九願が恒順衆生の願にて所有ものに化現して一切衆生を濟度する本願なれば……

## 能の西行

能の西行などといふ標題を掲げると能樂が西洋に流行することでも言ふやうに思はれるかも知れぬが、さうではない、たゞ能樂或は謡曲の中で西行法師に關係あることを摘出して見るのに他ならぬ。實は近頃『江口』の事を持前の理窟癖に結付けて或雜誌（文藝春秋六月號）のために執筆したので、少し許りに關する文獻を涉獵した結果、其の故事に關係ある西行の事にも及んだので、實際の副産物たる結果を書いて見ようと思ふのである。然し精密な考證は専門外の事で力が及ばないし、又此の詮索は元々能や謡に何の關係もある譯ではなく、全く閑文字に過ぎないのであるが、たゞ雜誌『寶生』の二百號記念に稿を求められたので、其の責を塞ぐ料とするのに他ならぬ。

『江口』は周知の通り、西行が江口の宿を借りようとした時の事に因んで構想せられたものであるが、西行は直接に自身此曲に現れて居るのではない。同様の關係にあるものは『遊行柳』である。是も周知の通り、西行の歌「道のべに清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立止りけれ」によつて作られたもので、然も此柳は實際に存在して居るのではなく、此歌といふのがただ或る繪畫の題贊として詠まれたものであることは西行物語や西行物語繪詞などによつて明かに知られる。此兩曲とも西行の生涯を幾分傳へたものと言つても宜いが、更に西行自身を題目としたものを尋ねると『雨月』と『西行櫻』とを擧げることが出来る。西行櫻では、約三十年前の事かと思ふが、たしか尾上始太郎氏のワキで「誰か知る行く水に三伏の夏もなく、淵底の松の風一聲の秋を催す事云々」の閑寂の趣が今なほ記憶に鮮かであり、雨月では、最近寶生新氏の「又あれを見れば釣殿のほとりとおぼしくて火の光の見えて候云々」の詞にさながら其景を髣髴たらしめると共に、半葺いた小屋の中に老人夫婦（シテ野口氏）の端然たる姿を示す所は、活人畫風などといふ言葉を用ゐては如何かと思はれるが、實に夢幻境に遊ぶの思ひあらしめるものであつた。是だけ記せばそれで澤山であるが、少しく共に蛇足を附け加へて見たい。

さて雨月も西行櫻も、何れも西行自身を現出しては居るが、共にワキであつて主働者の位置にはなつて居ない。此點は江口でも遊行柳でも同様であるし、又後に述べんとする番外の諸曲に於ても同様である。蓋し能の構成上、西行の如き人はワキ僧として取扱はれることは自然のやうであるが、其れだけ之によつて西行の性格描寫などの詳しいものを期待することは出来なうと言へよう。然も江口は西行の歌を機縁として實相無漏の世界の妙理を説くやうになつて居るから、其點に於て『山姥』と同じく私一流の哲學的解釋を促す所があるが、他の雨月、西行櫻等は寧ろ歌道の説明若しくは景物の描寫が主となつて居るから、如何にしても私の没風流な説明を容れる餘地は無いやうになつて居る。其故に此にはたゞ是等の曲に對する簡単な考證を説くだけに止まることになる。

『西行櫻』の由來に就ては『謡曲拾葉抄』に雲玉集を引いて次の如く説いてある。即ち

雲玉集云西行西山に山居の時、花に人あつまりきにければ

「花見るとむれつゝ人のくるのみぞあたら櫻の科にはありける

かくよみしくれつかた、花のもとに白髮の老人現れて

「つみとかはいかにあらしの花櫻ながむる人のわが深山木を

と返して失にけり、花の精なるべし云々

此説にもとづきて此謡を作る成べし。

とある。此の西行の歌は『山家集』にはたゞ「閑ならむと思ひける頃花見に人々のまうで來ければ」といふ題詞で出て居るが、若し拾葉抄の所傳の通りだとすれば、構想の創意は既に雲玉集に出て居て、謡曲には存しないことになるであらう。然し全篇の美辭麗句は初に群集を點出して西行の咏歌を喚起し、更に花精の辨明を導き出す結構の妙と相俟つて渾然たる戯曲美を發揮し、こゝに能作者の才能を示して居る。更に作者が櫻樹の精としては、普通直ちに想到すべき美人を現はさずして、却て老翁を以て之に擬したことは、固より老樹の精といふ點にもよるのであらうが、又西行の性格に相應する所があるといへよう。即ち此點に於て遊行柳の構想を聯想せしめるものであるが、然し一方に於て柳と櫻との別を失はしめぬ用意は其曲に於て現はれて居る。此の如くして此曲は群集の平俗な花見の喧噪と西行の見佛開法の結縁に伴ふ花實翫賞の幽寂とに繼で櫻花自身の「草木國土皆成佛」觀を示すに至つて一段の高所に達して居

る。其の主とする所は櫻花の贊詞であるが、其中にまた西行に相應する妙理も説かれて居る。老木の精は之を簡單に説いて「浮世と見るも山と見るも唯その人の心にあり、非情無心の草木の花に浮世の科はあらじ」と辨じ、西行の「御意こそ少し不審に候へとよ」と詰問して居る。此點に於ては「江口」に於て遊女が結局普賢と同一體なる妙理を示すものと相通する所があるとも云へる。然しながら是は固より此曲の側面であつて、曲そのものは西行の悟道とは關係なく花の精の歌舞を示すことを主とするものである。

轉じて『雨月』を見ると、是は半ば西行の事蹟に基いて結局歌道を説いたものである。雨月の故事は西行の自著と傳へられる『選集抄』五に、江口遊女事と題して西行が或聖と伴つて江口の里を過ぎた時の記事から出て居る。其中に曰ふ。

「冬を待えず、村時雨のはけしめて、人の門に立やすらひて、内を見入侍るに、あるしの尼の時雨のもりけるを侘て、板を一ひらさけて、あちらこちら走ありきしかは、無何となく「賤かふせやをふきそわつらふ」と打すきみたるに、此尼さばかり物さわかしく、走あわつるか、何とてか聞きけん、板をなけ捨て、「月はもれ雨はたまれと思ふには」と付侍き。さも儼に見過しかたか

りしかは、彼庵に一夜とまりて連歌なとし侍て云々」

是が『江口』の遊女とどう關係するか知らないが、『雨月』では之を換骨奪胎して、宿の主を老人夫婦として、一が雨を喜び他が月を賞でる所から、屋根を半葺にするといふ奇抜な趣向を案出し、老翁の感想が其儘歌の下の句になるので、西行が之に對して上の句を附けて宿を許されるといふことになつて居る。即ち選集抄の記事とは丁度歌の上下が入れ代つて居るのである。江口の尼は其の連歌によつて西行の「胸をこがし」、「さも戀しき江口の尼かな」と賞讃されて居る、そして其が果して普賢菩薩の化身と同人であるか分らないが、雨月の老翁は住吉の歌神に他ならない、といふことが後シテの言によつて明かにせられ、全篇和歌の徳を頌したものと成つて居るのである。即ち此曲に於ては、西行は主として歌人として描かれて居るのである。

さて現在普通に寶生流などで行はれて居る西行關係の曲は、以上四種に止まつて居るが、私は竊かに西行物語や選集抄の中から、他に適當の材料を求め得るのではないかと思つて居た。



其中最も好適と思はれるものは、上田秋成の『雨月物語』によつて著名となつて居る所の、かの白峯の御陵の事である。家集や選集抄等には西行が此陵に詣でて感慨を催すことが記されてあるが、雨月物語には西行が新院の靈に謁することになつて居る。即ち「よしや君昔の玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん」の歌を中心として、御陵の凄愴たる光景を敘することを得る筈であるが、私の寡聞なる、未だ此種の謡曲等に接したことはない。或は餘りに憚多くして何人も之を試みなかつたのであらうか。……

斯う一旦書いて見たが、其後、私はある學友(菊池氏)との談話によつて、偶然「松山天狗」の正に此の趣意を示すものなることを知るを得た。此曲は金剛流に現存するもので、私は其の能を觀たことはないが、野上氏の『謡曲全集』などで其の文句は確かに一讀したことを後に想出した。當時多分、此曲が平生考按する所に幾分類似するのを見て快を覺えたのだらうと思ふが、其事も記憶を脱し去つて、自己の希望のみが念頭を離れなかつたものと見える。其故私の前段の感想は全く無意味となつたのである。然し此曲があつたとしても、種々の關係上今後は恐らくは廢曲同様となり。實演の機會もないであらう。

斯くて私は期待する曲を多く求め得なかつたが、番外謡曲として傳はるものに偶然二曲あることを發見した。共に『國民文庫』に採録されてあるもので、一は『現在江口』といひ、一は『實方』といふ。何れも文辭といひ趣向といひ、流石に残存せる現行諸曲の比ではないが、餘談として記事には適せぬことではない。

『現在江口』のワキは即ち西行自身で、其次第は『江口』と同様である。斯くて西行が江口の宿に雨宿りを求めれば、シテの女は「旅人ならば宿を參らせう、こなたへおはしませや、聖にておはします上、餘の方をとほせ給へ」といふ。西行が之を詰問すれば、彼是と答辨して擲揄する。そこで西行は「小傾成どもになぶられてあまりに無念に候程に門に短冊をおさばやと思ひ候」と憤慨して去る。跡で遊女は其人の西行たるを知り、其短冊に例の「假の宿を惜しむ云々」の句を見て、急ぎ追ひ行き返歌を吟して呼び戻し、己は性空の拜んだ普賢ではないが、何か悟道の便にはなるであらうと歡待する、そこで「江口の悟りを開きつゝ後の世までも頼もしき値遇哉云々」といふことで終るのである。

斯様に此曲の敘述は頗る現實風で、又明白に性空と西行とを區別してあつて、然も理窟が一

向道理になつて居ない。要するに後世の模倣作であるが、西行が刪られる所など、可なり露骨で稚拙である。然し西行も初めは此の江口の女に厭味を言つたらしい事は、西行物語繪詞に「日暮て江口と申す所に宿を借りけるに、すみそめのたもとをあやしきらひけん、やどをかさゞりければ」などと傳へられた所で推察せられる。其が又一轉して江口遊君禮讚になつたことは前に述べた通りである。固より是等は凡て一に虚構かも知れないが、とにかく此話は相應に傳説界を賑はしたものである。

次に『實方』は、西行が陸奥行脚に赴いて實方の舊跡を訪ふ時に、一人の老人が顯れて當時新撰の新古今和歌集の事を尋ね、次で歌壇の批評に移り（此邊が蘭曲になつて居る）、昔、實方が賀茂の臨時の祭にて舞つかまつれるさまの事を想出して之をまなぶといふ筋である。西行が實方の墓を訪うたことは西行物語にも記事がある。

ある野の中を過けるにことありかほの塚の見えければ、道にあひたる人にあれは何と申つかそと尋ねれば、中將實方朝臣の御墓なりと申ければ、いと悲しき勝りて、其のかみ賀茂のりつしの祭の時、みたらし河に影をうつして我身とも覚えぬぞかし。院内の若女房たちはちかことには實

方の中將のにくまれかふらんとたてけるそかし。

さる都にすくれていみしき人のこの國に下りつゝ佛法の名字もきかぬ野中にて掇ばかりしるへにてあはれさよと思ひて云々

とある。即ち此事が謡曲の材料となつたものであらう。そして實方が舞に長して居た事は其の家集中の歌によつて證せられる。

實方は何故にかく奥州に下るやうになつたか。『十訓抄』によると、行成に怨を含んで其の冠を打ち落したが、行成は之を忍んで争はず、かくて行成は藏人頭に拔擢せられたのに、實方は「歌枕見て參れと陸奥國に流しつかはされける」といふのである。其の風姿に自ら誇る所は所謂ナルシズム的であつて、然も漫りに人を打つ所は又容易に情に激する性質であつたのだらう。其歌で我々の熟知するものに「かくとだにいやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひは」とあるのを見ると、（但し集にはない。集の歌は普通の技巧的なものが多いやうだが）其の情感的なることが推知せられる。西行も佐藤兵衛意清であつた時には幾多の不平があつたのを思へば、此の北陸の地で此の不遇の熱血漢の事を偲んで、感慨無量であつたことが察

せられる。然し實方は「藏人頭になられで止みにけるを恨にて、執とまりて雀になりて殿上の小臺盤に居て臺盤をくひけるよし人いひけり」と傳へられて居る。自ら美貌に見とれる程の伊達男で又直ちに人を打擲する程の直情徑行肌の情熱家が小雀と化して盤をかじるとは甚だ興味ある傳説である。然も謡曲では流石に後シテを雀の靈にすることは出来なかつた（「實方」は謡曲にもあるが、曲中の歌人評判の部分のみであつて、西行にも實方にも關係はない。）

以上何の意味もない閑談で、又有り觸れた材料のみによつた漫筆に過ぎないが、若し是から導かれる一つの結論を擧げるならば、其は現存の謡曲が番外諸曲とは比すべからざる價值を具へて居る、といふことである。

### 能及び狂言に於ける山伏

今頃のやうに登山の季節になると、其の人々の中に法螺貝など携へて先達といはれる人を見かけることがある。五十年前の昔、學生で房總邊を旅行した折、偶然さういふ人と同宿したことがあつたが、それは羽黒山の山伏といふことであつた。野人然たる姿形が其後も長く眼に残つて居るので毎年盛夏の頃にはよく之を想出す。一方には又、芝居や能などで辨慶が扮する山伏姿の堂々たる風采には何となく威壓されるやうな心地がする。此の山伏とか修驗道とかいふものに就て、學問的にも知りたいと思つて居るが、其は先づ専門家の業に譲ることとして、今はたゞ平素能や狂言の中で感じたことを拾ひ集めて隨筆風に記して見ることにする。固より有

り觸れた材料のみによるもので、斯道の人々には知れ切つたこと許りではあるが、たゞ其の間に多少關係をつけて見たいと思ふのである。

山伏或は修驗道は今日では二派に統括せられ、一は當山派と稱し、眞言宗に屬して三寶院に管せられ、一は本山派と稱し、天台宗に屬して聖護院に管せられるといふことである。先年聖護院門跡の峯入姿の法衣其他が三越か何かの登山展覽會に陳列してあるのを見たことがあるが、中々壯麗なものであつた。以上二派は大和紀伊の間の峯入を各自其の方法に従つて行事とするものであり、又山伏の究竟目的は此の葛城大峯に參することであるが、往昔は諸所に小派が存在して、例へば彦山派とか、或は羽黒山派とかは、冷く人々に膾炙して居る。私の會つた山伏が羽黒山といつたのもそんな因縁で勿體をつけたのかも知れない。『攝待』で鷲尾が卒然佐藤の母から「どこ山伏」と質問せられて、咄嗟の間に「是は出羽の羽黒山より出でたる客僧にて候」と言つたが、すぐ看破されたことも想起せられる。とにかく斯様に山伏は長い歴史を有し、諸方に散出して人々の信仰畏敬を受けて居たが、是には又利弊相伴つて居たやうである。今次に是等の例證を能と狂言とから求めて行かうとするのである。

山伏の起原を謡曲の所傳に求めると、何人も直ちに念ひ浮べるのは「それ山伏といつば役の優婆塞の行儀を受け」といふ『安宅』の文句である。即ち文武天皇三年伊豆に流された役ノ小角以來のものとすれば、今から千二百五十年許りに溯ることが出來て、相當に古い歴史を有つて居るものである。又此の山伏或は驗者が、文字通り山に臥し野に寝ねて難行苦行する結果、社會からも尊敬せられて居たらしいことは『葵上』で横川の小聖を請する有様でも察しられる。葵上が六條御息所の生靈に苦しめられて「御物の氣以ての外に御座候程に貴僧高僧を請じ大法祕法醫療様々の御事にて御座候へども更にその驗なく候」ために終に此の修驗者を招聘することとなつたが、此時「九識の窓の前十乗の床のほとりに瑜珈の法ツ水をたたへ三密の月を澄ます所に案内申さんとは如何なるものぞ」と勿體ぶり、遂に「此間は別行の仔細候へども大臣よりと承り候間參らうするにて候」とやう／＼承諾する程の見識を示して居る（但し之を權力の前に屈伏したとまで皮肉に解しないでもよからう）。而して其の修業の有様も『野守』などにある通り「宿鹿島野の草枕、子に臥し寅に起き馴れ」て、つまり毎夜睡眠時間は四時間、そして其間には『葛城』にある如く「篠懸の袖の朝霜起臥の岩根の枕松が根の宿りもしげき嶺續

き山又山を分け越えて」漸く目的地たる大峯葛城に到着し、さてこゝに修行する有様が時々土地の人の眼に觸れるから、却て「葛城や木の間に光る稻妻は山伏の打つ火かところ見ぬ」といふ歌さへ生ずるに至るのである。都にあつても朝夕の勤めにいそむ所は、源氏物語夕顔の巻に「明かたも近うなりたり梟の聲などはきこえてたゞ御嶽精進にやあらん、たゞ翁びたる聲にぬかつくもきこゆる云々」とあるを引いて『半部』に「隣を聞けば三吉野や御嶽精進の御聲にて南無當來導師彌勒佛をぞ唱へける」とあるのでも知られる。斯く嚴肅な教規を奉ずると共に、服装なども甚だ異様で、頭巾篠懸に法螺を携へ笈を負ひ、殊に太刀までも帶して居る。長唄の安宅勸進帳や芝居の勸進帳の文句にあるやうに、「帶せし太刀は唯物をおどさん料なるや誠に害せん料なるや」といふ間に對しては、「是ぞ案山子の弓矢に等しくおどしに佩の料ならず、佛法王法に敵する惡徒は一殺多生の理に依つて忽ち斬つて捨つるなり」などの答もあり、勇氣凜々として尋常一様の慈悲忍辱を主とする求法念佛の法師などとは著しく趣を異にする所がある。此の心構へだけは羅馬法王のために身命を惜しまなかつたジェズ・キリスト教徒と比較され得るやうである。

二

さて山伏といふものに關して、大體斯様な概念を構成して置き、次に能の中に、どんな材料があるかと探して行くと、實は餘り格別な收穫もないので、聊か失望しないでもない。舞臺では屢々山伏姿に接するやうに思つたが、全數約二百番或は百八十番の中で十六番位のものである。そして其中にも作り山伏が多い。『安宅』『船辨慶』『攝待』など皆さうで、然も何れも辨慶及び其の一黨である。其他には『大江山』の頼光一行なども同様に作山伏である。——たゞ前者は敵を味ますため、後者は酒頭童子といふ鬼を欺くため、といふ相違があるのみである——尤も辨慶の前身は所謂「三塔の遊僧」で、つまり山伏的であつたかも知れないが、修驗者としてよりは寧ろ義經の參謀、軍師といふ點が表面に現れて居る。そして此の作り山伏は武士即ち人間たるのみならず、更に又天狗が其の本體であることが多い。此に天狗とは如何なるものぞ、といふ問題が起るが、其はとにかく、次に述べる如く山伏とは離れ難い性質を有つて居るものやうであり、而して其の種々の性格が之に取材した謡曲の中に現はれて居る。

先づ『鞍馬天狗』は「鞍馬の奥僧正谷に住居する客僧」といふ扮装で出て來るが、平家の一

門の横暴を憤つて「源の棟梁」たる牛若に「兵法を授け奉り平家を討たせ申さん」といふ熱情家で、「我慢高雄の峯に住んで人の爲には愛宕山」と言はれる魔性ではあるが、流石に「霞となびき雲となる」變通自在の大威力を有する「鞍馬の奥僧正が谷に年経て住める大天狗」である。次に「大會」の山伏は嘗て鳶に化して、京都を飛び廻る中、誤まつて墜落して兒童に捉はれ、既に生命を失はんとせる所を幸に一人の僧侶によつて助けられた、といふ人間的弱點を有する天狗である。恩人たる僧の望みに従ひ、「釋迦如來靈鷲山説法の御有様」を現ぜんとして眷屬どもを集めて莊嚴なる大會を演出したが、豫ねて注意を加へたのに拘らず、愚直な「僧正忽ち信心を起し隨喜の涙眼に浮かみ一心に合掌し」たがために、魔性の身分で釋迦に擬することは一大冒瀆であると認められ、忽ち帝釋天のために驅逐せられるに至つたので、寧ろ氣の毒な親切な天狗である。さて「車僧」に出る山伏は、「嵯峨野のあたりに車を立て四方の景色を映め」るやゝ増上慢の嫌ひある車僧、即ち自在力を以て車を動止せしめる深山和尚といふ僧侶を魔道に引き入れんとして、辯證法の秘術を振ふ哲學者若しくは詭辯家ソフィスト型のインテリ天狗である。「浮世をば何とか廻る車僧まだ輪のうちにありとこそ見れ」と公案のやうな問を

發すると、車僧から「浮世をば廻らぬものを車僧乗りも得るべき輪があらばこそ」と答へられる、即ち何だか判つたやうな判らぬやうな菟藟問答がある。そこで更に「乗りも得るべき輪があらばこそといふは誰ぞ」とむつかしい問題を提出すると「空洞風涼し」と言ひ抜けられる。「我」とか「絶對無」とかが論ぜられて居るやうで、又梁武帝が對朕者誰と問ふのに向つて達磨が「不識」と喝破したことを想ひ出させる。結局辯論では決せられず、實際に車を動かす得る力の如何によつて其の勝敗が決せられる。天狗の知よりも僧正の行、といふ所であらう。最後に「是界」の山伏は「大唐の天狗の首領」で日本の佛法を妨げんと渡來した陰謀家、政治家であるが、結局「かほどに妙なる佛力神力今より後は來るまじ」と退散してしまふ。是等の天狗は謂はば、正義心に富む兵法家、恩義に感じ一廉の天才を有する藝術家、ある程度の哲學的知識を有するが實踐的行的に缺けるメフィストフェレス流の詭辯家、自家の思想を以て隣國統制を企圖する陰謀的政治家等の四類に歸する。即ち最後の天狗のみは危険思想を以て隣國攪亂を計畫する者であるが、然し是も我國の力には敵し得ない。畢竟天狗なるものは、能に表はれる限りは、何れも人を助けるか、或は人に服するもので、魔力の範圍にも限界のあることが知ら

れるのである。即ち能の天狗はさほど恐るべきものとして感じられない。其の假面たる大癡見なるものが熟視すれば、やゝ滑稽な感を興へ親しみを覚えしめることは、之に相應するものと言つてよいやうに思ふ。

以上山伏には直接關係のない天狗に關することに餘り深入りしたやうであるが、然し山伏の深山幽谷に於ける生活は幾分天狗を聯想せしめるもの、否、天狗の傳説は幾分か山伏の生活から構想せられたものかも知れないから、是も亦能の作者や其の時代の人々の山伏に就て懐く觀念、若しくは觀念聯合を示す所が無いとは言へない。此事に就ては後に説く所によつて證明することが出来るが、今轉じて暫く眞正の山伏其ものを描いた能を考へて見よう。

## 三

能の構造上山伏は何れもワキになつて居るから、特別に著しく取立てゝ言ふべき性格の現れて居ないものが多い。既に述べたやうに『葛城』や『野守』など何れも其の難行苦行を告げて居るのみである。『飛雲』や『船橋』なども同様であり、『葵上』のもたゞ修業の結果尊敬を受けて居ることを語つたのみである。其中に就て『壇風』のワキたる師の阿闍梨は日野中納言資

朝の遺子阿新丸（能では梅若となつて居る）の請によつて仇討の助太刀をするやうな、一種義氣に富んだ性格を示して居るが、是は必しも山伏としての特質には限らず、寧ろ一種の武俠氣質に他ならない。尤も此の仇討は聊か道理に合はぬ所があり、阿新丸が仇と思ふ本間三郎は寧ろ彼等に好意を有するものであるから、之を殺害するのは、聞狂言たる本間の臣下のいふ通り「近頃憎ふ御座候」といふべきことであるが、さうして阿闍梨も一應は説諭して見たのであるが、此の場合の義理に迫られた心持から、遂にかゝる擧に出たものである。斯く苟くも頼まれれば理非を顧みずに引受ける、といふ所に山伏等の有する一種の律法的道德感を示して居る、而して此點の最も明かに現れて居るのは『谷行』である。

『谷行』はワキ方に於ては『壇風』と同じく極めて重いものであるが、シテの方ではさほど重要でないので減多に演じられない。近年壇風も谷行も或る特別の催物として出たので、壇風は見ることを得たが、谷行の方は差支へて見なかつた。たゞ四十餘年前に見たことがあつて、其の印象が今なほ深く浸み込んで居る。今熊野の山伏が峰入りをするについて、其の稚い弟子松若の家へ暇乞ひ旁其の母の病氣を見舞ふと、其の松若から、母の病氣平癒の祈願のために是非

一行中に加へてくれと頼まれる。「難行捨身の行にて幼き者の叶はぬ事」なる由を言つても承知しないので、已むを得ず其の孝心に感じて母の承諾を得て伴ひ行く。斯くて一行は勇ましく都を出て程なく葛城一の室に著いたが、松若は道より風の心地となる。先達は之をたゞ「習はぬ旅の疲れ」として掩ひ隠さうとするが、眞は病重く「今は存命不定に見え」て來た。斯る病人に對しては「痛はしながら大法にまかせ谷行」にすることが習はしとなつて居る。即ちかゝる修行の途中で發病した者は前世の業因によるものとして罰を受けねばならぬ。それで生きながら谷に投げ落し上から石や土を掛けて埋めることになつて居る、之を谷行といふ。今や松若の運命は定まつた。一行の手前、先達も如何ともすることが出來ない。「いかに松若たしかに聞け、此道に出でゝかやうに病氣する者をば谷行とて遙かの谷に落し入れ、忽ち命を失ふ事、是れ昔よりの大法なり」と宣告し、「命に代るものならば、御身のために捨てん身の何か命も惜しからん、返す／＼進退きはまりてこそ候」へと歎息するが、松若は「此の道に出てゝ命を捨てんこそ望みのまゝの心なれ」と潔く決心し、故郷の母を偲びつゝ大法に従ふ。先達はもとより一同も悲歎の念に堪へないが、「かくて時刻も移るとて、皆面々に思ひ切る、邪見の劍身を碎

く、心をなして彼の人を、嶮しき谷に落し入れ、上に蔽ふや石瓦、あめつちくれを動かせる、心を痛め聲をあげ、皆面々に泣」いて居る。

此に先達もきつと覺悟を定め、夜が明けても出立たず、「歎きも病氣も同じ事」自己の如き悲歎にくれるものは同じく大法により谷行に行はるべきものだと言張する。大法の前には忍ぶべからざるものをも忍んだ修行者は、遂に其の大法によつて己をも罰せんとしたのである。人々も此の理義明白なることには抗辨すべき道を知らぬ。やがて思ひ出した事は、大法は守るべきものだが、年來の修行によつて、神明佛陀の冥感を得ることも考へられる、といふことである。「年月の行徳もかやうの爲にてこそ候へ、一祈り御祈りあつて松若殿を再び蘇生させ御申しあれかしと存候」といふ。是に於て人々は精神をこめて「大聖不動明王の威力又は山神護法善神、殊には開山役の優婆塞、哀愍納受垂れ給ひ、使者の鬼神の伎樂伎女を遣し助けおはしませと祈れば、此に行者も孝子を救助して之を師匠に與へて、「さがしき路を分けつくぐつつ登るや高間の雲霧傳ふや葛城の人の目にこそかゝらざれども、まことは渡せる岩橋を大峯かけて遙々と虚空を渡つて失せ去る。」斯くて此の『谷行』に於ては山伏の難行苦行、其間の大法の峻嚴



なること、行力の極、天を動かし神を感ぜしめることを描き出してある。蓋し山伏の理想は此に盡されたものと謂つて可いであらう。

四

思ふに此の如き崇高なる修験者も許多あつたのであらう、而して民衆の信を繋いで居たこともあつたであらう。然も此曲に既に現れて居る通り、其の生活法は徹頭徹尾いはば斷言的命令「カテゴリッシェル、イムベラチーフ」を守つて常人の及ぶべからざる勇猛心を起すものであつたであらう。隨て其の弊も亦此處から生じ得べく、之を横して他を騷がすものも漸次多くなつたであらう。既に源氏物語にも「柏木」の卷に「けにくく心づきなき山伏どもなどもいと多くまゐる」とあり、例の口悪の清少納言は「すさまじき物」として「験者の物怪調すといみじうしたりがほに獨站や珠數などもたせてせみ聲にしぼり出し讀み居たれど、いさゝか退氣もなく、護法もつかねば集めて念じ居たるに、男も女も怪しと思ふに、時のかはるまで讀みこゝじて更につかず。たちねとて珠數くりかへしてあれと験なしやとうちいでて額より上さまに頭さぐりてあくびをおのれうちしてよりふしぬる」とあり「にくきもの」には「俄にわづらふ人

のあるに験者求むるに……このごろ物怪に困じけるるや居るまゝに即ちねぶり聲になりたる、いとにくし」とある。斯く其の修行の程の覺束ない癖に持前の威張り癖は失せず、世人の迷惑となつたことも多いらしい。其れで宇治拾遺物語には「ゆゝしくことごとしく斧負ひほら貝腰につけ錫杖つきなどしたる山伏のことくしげなる」とあつて其の滑稽な生活を説き、又百鍊抄十四には「山伏等數百人群集法成寺邊……曉夕吹螺衆庶驚耳目尤奇怪事也」とある。なほ斯様に次第に墮落して行つた有様に就ては、最近柳田國男氏の隨筆集『木綿以前の事』の中に俳諧の連歌に徴して其の生活を想像したのを見て、大に啓發された所があつた。勿論是はずつと後世の事になるのであるが、例へば芭蕉の「秋山に荒山伏のいのる聲」は其の荒行を想像させるものがあるし、又同じく「山かげは山伏村の一かまへ」には是等の人々の部落があつたとを示して居るが、

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮

中にもせいの高き山伏

いふ事をたゞ一方へ落しけり

飽及び狂言に於ける山伏

を柳田氏は「旅の山伏の氣味の悪い言ひがりの癖を可なり活き／＼と寫し出して居る」と解し、又

夕雨の篠懸乾しに舍りけり

子を褒めつゝも難少しいふ

を解して「禪僧も知らぬやうな鋭い機鋒を藏し、それをやたらに常人の上に濫用して威壓を以て世を渡らうとしたのが後世の旅山伏」と言つたのは卓見である。而して斯る生活を承認すれば、狂言に於ける山伏の意味がよく理會せられるやうに思ふ。

## 五

既に述べたやうに能の山伏は皆威嚴があり、又業力もあつたやうに描かれてあるが、これが狂言となると一つ残らず滑稽嘲弄の對手にせられて居る。今日普通行はれて居るものは七、八種あるが、何れも不朽の面白味を具へて居る。私は常に狂言の中には現在の世相にも通ずる諷刺の多いことを認め、丁度モリエールの喜劇が、其の十七世紀的被覆の下に今なほ生命を有するのと比し得べき點があると思つて居る。山伏物は大して諷刺にもならぬものもあるが然し何

れも翫味せられ得るものである。其中に出て来る山伏は何れも皆空威張りはするが、修行の方は極めて未熟で失敗のみをする。先づ能で「旅の衣は篠懸の露けき袖やしをらん」と難行の一端を示して居る所には、狂言の方では「貝をも持たぬ山伏の途々うそを吹かうよ」と修行未熟を標榜する。祈りをしようにも呪文を知らぬ悲しさ、「それ山伏とは山に伏すによつての山伏なり、何と殊勝さうか」などと胡麻かしのみをやる。然も威張り散らす所は「彌宜山伏」や「犬山伏」などによく寫されて居る。茶店の亭主を叱咤し、先客たる彌宜や坊主を追ひのけて、はては自分の荷物を持たせようとするが、亭主の計略によつて、「飛ぶ鳥をも落す」と誇つた法力でも跳びつく犬を和め得ず、或は大黒の木像に扮した小童に打たれる。「柿山伏」では柿樹に上つて盜食する所を見つけられ、散々に罵られて遂に木から墜落し、「梟山伏」では梟につかれた人を助けようとして却て己も其につかれ、「蟹山伏」では蟹の化物を退治し得ずして之に脅かされる。尤も中には少し許り力量のあるものもある。「腰祈」で老人の腰の曲りを直さうとして却て祈が利き過ぎるのは少し修行の功もあつたやうであるし、「蝸牛」で自ら蝸牛と稱して太郎冠者を欺き遂に隱身の術を行ふ所なども幾分修験者らしい趣を示して居る。其他又「菖山

『伏』では晝寝の間に悪漢から罪をなすられるが、法力で之を辨するやうになつて居る。是等は何れも狂言的興味に富んだもので、中には好人物らしい山伏を寫したのもあるが、多くは空感張りの藝無しで、人々から嘲けられ又幾分厭はれても居たやうになつて居る。

固より狂言は教訓でも何でも無いから、山伏によつて人々に反省させようといふのではないが、たゞ其の或るものは滑稽に伴ふ自己の諷刺を含み、其は又世相に適ひ、そして山伏の實際の墮落と世人の之に對する畏怖と嫌厭とを示したのもも見られるのである。之を平安期の文學に見える記事や、前の俳諧の描寫と比べ合せると、思ひ半ばに過るものがあり、又其が能で寫された眞面目の山伏から墮落し來る徑路を辿ることが出来る。實際『谷行』などに見える山伏の生活も一變すれば外形のみの遵法や強情冷酷に轉ずる恐れがある。そして山伏と天狗との合同に就ても、兩者の間に幾多共通の性質が存することを示すものであり、而して天狗の化身たる山伏が一轉すれば狂言の山伏となる素質をも具へて居ると言へる。既に述べたやうに天狗の假面には何となく滑稽味さへ發見せられるではないか。

以上何のとりとめもない漫談であるが、平生感じて居たことを纏めて聯絡をつけて見たので

ある。而して斯く述べて來ると、私の經驗に於ける野人的山伏と辨慶的山伏との關係も明かとなり、能に於ける威嚴と勤行とは狂言に於ける滑稽と疑似（インチキ）とに轉化するが、能に於ける天狗の描寫法は其の橋渡しを示すものであり、而して其の社會生活上に於ける長短の對照は、正に諸文學に示される所に一致するものであることを知るのである。是に於て我々は狂言のみならず、能も亦案外實際生活と關聯するものがあるのを發見するのである。

——一四・八放送。覺書——

讀書と擇書

讀書の意義に就ては、嘗て他の論文中でも説いた通り、之を嚴密に言へば、全然何等の目的もなく、たゞ讀書のために讀書するものにして初めて其の三昧の境に入つたものと言へるのである。即ち歸する所、漫讀雜讀で何等の選擇もなく、凡て行きあたりばつたりの讀書でなければならぬと思ふ。だから讀書と擇書とは本來矛盾な概念といはれさうである。然しそんなに狭く見ないで、少くとも或る特別な職業若しくは學術研究等を目的としないで書物を涉獵する場合をも、やゝ寛大な意味で讀書と稱することにしたい。即ち單に一個の人間として其の知識力量に相應する書物に接觸する場合を指すこととする。之を普通に精神の糧などと呼んで居るが、要するに修養とか教養とかいふことになるのであらう。此に修養と教養とを對立せしめた

が修養といふのは人格の修養などといつて幾分道德的品性に關すること、教養といへばやゝ廣く一般に人の諸能力を向上せしめること、といふやうに大體區別せられる。然し兩者の間にさう判然たる區別が無い場合もある。又教養の意味を些も含有しないやうな修養談は平凡卑俗で聞くに堪へないし、教養ある人は自から所謂修養の要求に適ふやうになつて居る。流行語でいへば、修養は徳性或は行に當り、教養は知性或は知に當るのであるが、一段の高所に於ては兩者は本來合一すべき筈であるから、以下も其の區別に拘泥しないで説述する。然し根が讀書であるから知的方面が強調せられることを免れない。隨て此の如き言説は、或は今日の如く行を主とする時代に當つて舟中大學を講ずる如き愚と目せられるかも知れないが、實際船中でも何かしら書物を読まないものはない。行動の傍には常に反省の餘裕を存しなければならぬ。而して所謂教養のためにする讀書は之に資するものに他ならないのである。

さて反省に當つては何人も先づ直接に現在の自己に就て一層明かに知りたいたく欲ふであらうが、此の如き場合の鏡となるものは史傳である。殊に古今の偉人に就て自己と同傾向の人々を發見し得た場合には、ために會心の笑を洩すを禁じないこともあるし、又は發奮立志の基を開く

ことも出来るであらう。而して其の場合には史傳は必しも學術的に正確眞實なることを要しない。隨て多少小説的なものも避けるに及ばないし、又全然架空の人物を描いた小説でも目的に適合すると思はれる。要はたゞ之によつて自分の現在の姿を反映せしめ、若しくは其の望ましい状態を描寫して自ら樂しみ或は自ら戒めることが出来れば足りる。隨て前に述べたやうに、自己と同様の職業地位學問藝術等の人に關するものは最も目的に適合する譯であるが、然し全然境遇を異にする人の事蹟によつても多少類似の效果を得ることがある。例へば私自身は哲學者或は科學者文學者等の傳記や小説によつて直接に感得する所が多いが、然し藝術家や或は政治家等の偉大なる事蹟によつても教訓を受けたいではない。約言すれば現實の若しくは想像の傳記によつて現在の自己教養を求めらるるのである。

此の如き現在の教養は直ちに自己の將來にも關係する。蓋し史傳によつて自己を反省すれば、其と共に自己將來の發奮の機會が與へられるからである。其故に史傳は其まゝ自己將來の教養に資するものであるが、然も自己の進路をして徒らに他人に追從するに終らざらしめぬためには、其の進路に對する正當な判斷を下すことが出来なければならぬ。而して其の任に當る

ものは理性を明晰にする諸種の學術、殊に哲學の書に他ならない。尤も此の場合の哲學も科學も其が一般教養を目的とする限り必しも専門學者の間に行はれる組織體系等を具へないでもよいが、然し學に必須な論理だけは固より缺くことは出来ない。若し然らざれば其の求める理性も結局混濁せるものたるを免れないであらう。

自己の現在及び將來に關することは勿論教養の中に含まれて居るが、然し大部分は又其人の職業等の實際的方面に屬する事であるから、隨て其の場合の讀書は幾分か純粹の教養と遠ざかる所がある。之に對して自己の過去に關するものは、現在及び將來の生活に對する基礎を確立するものたる點に於て固より又實際的方面に關係を有するが、然し直接には知識の點に於て生活に資するものであるから、此點に於て最も多く教養たる性質を具へるものと言つてよいであらう。

さて自己の過去に關する教養には、前述の如く自己の生活の根柢を造るものに就て讀書の資料を求め行くのであるが、此の自己なるものはもと單獨に存在するものではなくして歴史ある國民として生活する人類である以上、その歴史を構成する源泉たる古典に於て其の據る所を求

めなければならぬ。我々が幼時、話に聞き又自ら讀んだお伽噺は、即ち民族的及び人類的源泉を示す古典の雛形である。斯く童話と古典とを比較することは、國學界に於ける独自の思想家たる橋守部が既に古事記の解釋に於て執つた所の態度である。お伽噺によつて、兒童は其の欲求の實現せられることを經驗しその本來の姿を空想に描き得る如く、古典によつて、我々は祖先即ち過去に於ける自己の生活を想望し、其が現在の生活にまで發展し來れる跡を顧みて、今日及び明日の生活に確乎たる根據の存し得ることを覺ることが出来るのである。古典に描かれた生活は今日に於ては、最早其儘では存在し難いかも知れぬ。然し我々は自己の過去が此の如く悠久な歴史を有することを覺れば、之によつて將來の生活に對する希望を懷くことが出来る。而して此の古典中、自國のものを繙くことによつて民族的生命の繼續を自覺し、更に廣く世界の古典を探ることによつて人類全體の宇宙に於ける地位を意識するを得るのである。更に又、此の古典の中に於て、我々は過去生活の事實若しくは古代人が事實たらんことを希望したものの記録と、この事實に基いて聖賢若しくは詩人等の考察し感觸したる結果を集録したものとを區別し得る筈である。前者は史書或は神話傳説であり、後者は經典詩歌である。然しながら實

際に於ては判然たる區別を立てることは難しい、兩者相混合する場合が多い。

さて此の古典の名稱を一々列記することは煩雜でもあり、又必要でもないが、たゞ其中若干を例證として提示すれば、先づ我國の古典に就ては、古事記、日本書紀、萬葉集等を擧ぐべきことは言を俟たぬ。記紀は史書であるが、然も其中に隨所に經典的詩歌的意義を有し、萬葉は詩歌であるが時には經典的であり、また往々史書の缺を補ふものである。我々は之によつて我自身の過去の生活を反省し得る。但し其中に含まれたる事實性や教訓性等は今日まで持續しないもの、又持續するを要せぬもの等もあるが、然し古典の世界は古典として存在し得るし、其が今日の生活に發展し、或は全然別様の状態を示し得たる所に、却て又古典の力の存することを認め得るのである。我國に於て發達したるものは、其後の文學と言はず、又實際生活といはず、其の根本に於て古典の精神の作用することを見ないものはない。時としては一見反對の觀あるものがあるが、是は勿論消極的に連結して居るものであるし、又或は何等關係のないやうなものもあるが、然も之を溯り行けば遂に記紀萬葉に達すると言つても過言ではないであらう。

然しながら我々は個人として他の個人と交渉なくして存在し得ぬやうに、民族の一員として他の民族との交渉なくしては存在し得ない。交渉には調和もあり對抗もある、而して調和も其中に對抗を豫想し、對抗も結局調和に到達する、何となれば對抗がなければ調和すべきものなく調和の共通基礎がなければ對抗することも出来ないからである。其故に我々は自國の古典を學ぶと共に、之を喜ぶと否とを問はず、他諸國の古典にも眼を閉ぢてはならぬ。然し斯くいふもの、元來其の目的は専門の學術研究にあるのではないから、精細な學術的比較研究などを試みるに及ばず、又ある標準を定めて各國の古典間に優劣の價値を定めることを要しない。自國の古典に對してはたゞ古典の心を以て之を見るに止めて現今の立場から解釋してはならぬやうに、世界諸國の古典をもたゞそれ／＼の古典として觀察し、其の多趣多様なる所に人類の生命を無限に擴充する根據を求め得れば足れりとすべきである。

さて、此の如く古典を世界に求めるに當つて、之を一々原語原典に就て究め盡すことは到底一人の力に望むことは出来ない。學術研究の場合でも之を達し得ないから、況して修養的讀書に就て之を望むことは不可能である。勿論、人々の素養に應じて範圍選擇の大小多寡は異なる

が、出来るだけ材料を豊富にして偏狹に陥らざることだけは之を一般に期待しなければならぬ。たゞ其の選擇に當つては、如何にしても種々の制限を脱し得ないから、私の述べる所はたゞ私の現在の立場から假りに列擧する所に他ならぬ。之を概括して言へば、古代の比較的純粹でまた一般人の近づき易いものを第一に擧げねばならぬ。之を抽象的に分類すれば、古い歴史を有して極めて多數の人々に知られる宗教の經典や、聖賢の言説詩歌文章併びに古代人によれる古代生活の記録等である。之を具體的に列擧すれば、支那に於ては經書及び若干の子史（例へば老莊等諸子や左傳史記の類）印度にあつては佛教前後の經典等、其他基督教關係の聖書や、希臘の古詩篇、古哲學書古史書等である。是等の中、或るものは古代の歴史若しくは傳説に屬し或るものは聖賢詩人の教訓である。さうして又是等の中直接には我々の生活と關係のないものもあるが、然し之を理解することによつて少くとも我々の見界を擴め又將來の發展に資するものがないではない。例へば我々日本人は希臘人となることは出來ず、又其の必要もないが、然し單に古代希臘人の心を知ることによつて、又自己の心を明かに知り得るのである。

以上の古典を解するに當つて、直接に古典其自身を讀むことは最も必要であり、又之によつ

てのみ目的を達し得る譯であるが、然し又古典の生活は餘りに現在の我々と隔絶するから、之を解釋するためには時として第三者の助力を要することがある。是れ註釋や解説書の必要なる所以であるが、此際飽くまで古典を古典として見る立場のものを擇び、徒らに私意を挾んで自説を主張するものや、或る立場を擁護する手段とするものに據ることを避くべきである。自己の立場で古典を解釋するものは、其の人の説として別に聞くべきものであつて、古典其のものを理解する場合には無關係である、但し世には忠實なる解説をも排斥するものがある、即ち是が第一流の原典のみを推薦して一切の末書を黜ける意見である。多くの讀書法には此の見方を説いて居るやうに思ふ。是は一應尤もである。簡単な解説書ですまして本文を見ないのは確かに誤りである。更に又汗牛充棟の註釋書などを悉く見ることは専門研究家以外には不可能である。然し如何に讀書百遍意自通といつた所で、解らないものは到底解りつこはない。先づ入門から次第に進むのが順序である。解説書を全然排斥するならば、人々は古典大著に近づく途を得ないであらう。たゞ解説書で一切を呑み込んだやうに思つたり、古典を自己流に解釋することが危険だと謂ふべきである。

既に古典の手引として解説書が必要であるとしたら、我々の讀書の範圍を最古の書物としての古典に限ることが出来ないことも其から推察されよう。全體古典といふ言葉は甚だ曖昧である。上來私は之を最古の典籍の意義に解釋して置いたが、時としては同時代或は後世の學術文藝に對して模範標準となるべきものをも悉く古典と稱することがある。此の意味に於ては相應に近世までの大著を古典の中に列することが出来る。ニュートンの物理書もカントの哲學書もまたゲーテの『ファウスト』も皆古典である。此種の書名を列挙することは到底不可能であるが、適當な文學史哲學史科學史文化史等によつて其の重要なものを摘出する他はなく、而して其のためにもまた是等史書を読むことが必要となつて来る。尤も其中には學術的文學的の立場から専門家にのみ持て囃さるべきものもあるが、一般教養のためには自ら差別が生じなければならぬ。而して此の場合に於ても亦末書即ち解説書は必しも排斥すべきものとは思はれない。時としては謂ゆる末書が深く人の腦裡に浸み込んで其人の思想を左右することもあり得るのである。私自身の經驗によれば、小學校で讀んだ十八史略や耽讀した三國志等の軍談物で得た知識が支那歴史の知識に關する根柢を造つて居る。後に讀んだ史記や左傳などの記憶も十八史略



を通して居るものが多い。是が末書讀みの弊かも知れないが、一方實益のあつたことは掩はれない。更に他の例を加へる。私の家には父が少時筆寫した『空翠雜話』といふ本がある（今は刊本の翻刻もある）。此の野村空翠といふ人は加賀の儒者で又國學の素養のあつた人である。其の書には孔孟殊に孟子を國史の立場から峻烈に批評してある。其中には無理な理窟もあると思ふが、又國史の上からは至當な見方と思はれるものもある。とにかく私は早くから此の寫本を見て、其中に自由自在に孔孟を論評してある態度に對し非常に興味を感じ、批評的精神の重んずべきことを感得したのであつた。空翠の論は十分學術的とは稱し難い所もあり、其著は明白に末書に屬するものであるが、然し其の私に對する感化力は必しも些少とは思はれない。全體孔孟から見れば漢唐宋明の諸書何れも末書かも知れない。然し其は固より極論である。西洋哲學でも希臘で盡きて居るといふ論者がある。サンタヤーナなどは然く明言して居る。然し是は無論奇矯過激の言である。所謂末書を出來るだけ多く調査することは却て専門學者の任でもあらうが、若干末書を手引とすることは教養或は修養の讀書には缺くべからざることと思ふ。若し末書一切不可といふならば、そんなことを論ずる文章もまた末書の一であつて讀むに値し

ないものと言はれるであらう。

斯様に末書には長所を認めると共に、我々の讀書の範圍は現代最近の諸書に及ぶことを避け得ないと思ふ。但し是は自己の過去を反省するといふ意味のみではない、寧ろ自己全體の反省のためと稱すべきものである。世には出版後數年を経たものでなければ讀んではならぬやうに思ふ人がある。エマソンも之を説いたが、つまり聲價が定まるまで待て、といふのである。それも一應尤もであり、今日の如く出版氾濫の時代には時と金との節約になることであるが、然し之を徹底すれば隨分奇妙な結果になる。世間には早く讀まなければならぬ書物もある。人々が皆數年を待つて少數批評家の輿論の決定に従はうとすると、往々にして型破りの物などは全く浮び上る機會がないことになる。蓋し批評家の意見は往々ある約束に制限せられて居るからである。大衆は専門的には信賴すべき批評も出來ないが、又案外捉はれない判斷を下すことも出來る。其故に人々は必しも常に數年前出版の古書ばかり讀むには及ばない。現代に生活するものが現代に適切な書物を讀むのは別に咎むべきことではない。然し此の場合には各人の選擇に任すべき所が多く、一定の規準等を設けることは困難である。

此の如く教養や修養の讀書に於ては自己の過去を反省するために根柢の書として古典に據ることが第一に必要であるが、又自己の現在及び將來に關するものとして史傳の他に現代の書物を讀むことも必要であり、之によつてまた古典の知識を活かすことを得るのである。然も此の如く範圍を擴大すると共に書物の數も増大し、各人の嗜好や能力に應じて差別を生ずることを免れないが、然も之が選擇の方針を定めて何某の書と規定することは、困難なるのみならず、寧ろ不當である。結局は人のすきすきで、所謂蟹は甲羅に似せて穴を掘るといふ古諺の通り、自分の欲する所のものを讀む他に途はない。他人の與へた良書の選擇は必しも自分には當てはまらない。たゞ各自が公平自由な態度を以て諸書に對する時、凡ての書物は又其の真相を表現して讀者に修養の機を與へ得るのである。又何ぞ良書悪書の別あらんや、といふのが私の結論である。

——一四・九日本評論——

讀書斷片

一 いたづら

昨年の夏、大勇猛心を振起して源氏物語を通讀した。今頃そんな事を吹聴したつて自慢にもならないと言はれさうである。勿論、私だつて約五十年前に其の初數卷の講義を落合先生から聽聞したこともある。爾來度々獨力であとをつゞけて見たのであるが、段々こんぐらかつて來て辛抱しきれなくなり、何時も須磨明石邊で停滯してしまふ。それで相當に大なる忍耐と決心とを以て全篇に眼を通して見たのである。然しだん／＼註釋などを一々調べる根氣もなくなつて、一卷を終る毎に『忍草』を見ると初めて筋が分つたりして來る所もある。其後例の谷崎氏の譯文が大評判となつたので、其を通覽すると、成程と思ひ當る所も多くなる。こんな程度で批評も感想もあつたものではないが、たゞ之を讀んで居る中に偶然思ひ浮んだことから話題を

引き出して見ようと思ふのである。

一體他人の尊敬したり愛好したりして居るものを傍から彼是貶すのは非禮でもあり常識のないことである。此の意味に於て獨逸文學の攻究者に對してゲーテの蔭口をたゞいて、不良少年で又不良老年らしいと言つたり、國文學者に對して源氏物語の著者を非難して、とんだ悪戯者だなどと口に出すことは慎しまなければなるまい。然し私は勿論是等古典を尊崇し、其の創作者に敬意を有するものであるが、然し古典其のものが其の内容に於て一から十まで眞實であり又教訓に富むものだと思ふ要がないやうに、其の著者も一點の缺陷のない神の如き人物だと信するに及ぶまいと考へて居る。其れで會々其の著作から其の作者の生活を推定してゴシップ的な臆断をすることも一の試みとして許されるであらうと思ふ。

平安朝の文學に女流が主要な地位を占めて居たことは何人も説く通りである。換言すれば此の時代には才媛輩出して各其技を競つて居たのである。是等の才女は固より種々の稟性を具へて、知識も情操も様々の状態を示して居たことは當然である。そして其の道德も時代の風潮に應じて別種の標準を以て律すべきものもあつたことは認められねばならぬ。斯くして古から、

才女であつても德行は如何しいといふ定評の人も居たやうであるが、此間にあつて源氏物語の作者だけは斷然衆を抜んじ貞淑溫良の才媛とせられて居るやうである。和泉式部のやうな札付きの放埒家もあるし、清少納言のやうに、少し許り男子からも小面憎く思はれたらしい才人も居たが、紫式部のみは、隨分道德的には辯護し難い資材を筆にしたのに拘らず、古來其の人物に就ては非難が殆どないと言つてよい。私は何も其に對して中傷する積りもないし、又何等中傷すべき事實を發見した譯ではない。又其の著作が全部道德教訓の書だなどと強辯する論者には賛成しかねるが、然し特別に誨淫の書だなどとは思はない。要するに當時の社會を或程度まで、寫實的に、然し之を同時に藝術化したもので、其の結果が例へば「物のあはれ」を中心とするやうな時代精神を示すことになつたのだと思ふ。それであるから我々は此書を以て世間並に世界に珍しい古代の大作だと考へ、そして一々敘述の藝術的長所は言ふまでもなく、読みやうによつては女人の教養ともなるべき點を多々含蓄して居ると思つて居る。たゞこゝに少くとも一つ私に取つて不愉快な印象を與へるものは、末摘花に關する敘述である。

『源氏』が種々の女性に關して独自の批判を下すことは其の自由であり、又之を小説風に描

寫したのは勿論別に悪くも善くもない。たゞ芥木の巻の例の雨夜の品定めは中々面白い辛辣な批評であるが、其中に著者の同僚や知人に對する當てこすりなどもありさうに見える所は、此の作者が必しも温良の君子でないことを示して居る。と言つて私は其れを悪いといふ譯ではない、其位の蔭口をきくのは當り前である。たゞ其れを無視して、蟲も殺さぬやうな貞淑人に解釋することは出来ないといふのである。

然るに此の悪口は末摘花の批評になると少ししつこくなつて居るやうに思はれる。源氏が初めに此人にあつて其鼻の異様なのに失望したのは御氣の毒みたやうなことだが、其れを残念がるのは小説として面白い。然し其れを種として紫上との戯れにするに至つては少しく無情である。然も此鼻の敘述が巻を隔て、又「初音」にも「かさねのうちきなどはいかにしたしたるにかあらん、御はなの色ばかり霞にまぎるまじく花やかなる」などと出て居る。其他にもあつたかも知れないが、最近或る關係で此巻を見たら出て居たのである。斯くまで執着して嘲弄の對象とするのは此人の如きやゝヒケ目になつて居る人に對しては寧ろ残酷である。尤も小説では源氏がかゝる人にも情をかけたといふのを賞めてある。其れはともかくとして、さて此鼻に

就ては私は何か作者自身が生活上體驗して居ることがあるからではないと思ふ。全く想像に過ぎないが、例へば清少納言とかいふやうな競争の地位に立つ人がそんな鼻の人であつたので、其が意識的にか或は無意識的にか小説中に出て來たのではあるまいか。

文學や藝術に於けるモデルの問題は種々論議されて居る。それとは少し違ふが藝術家がこつそり其の作品中で敵討をやつた例はある。ラファエルの壁畫に對して宗教道德の立場から分らず屋的干渉をした法王廳の高僧に對してラファエルは其の似顔を地獄の罪人か何かに示して竊に快としたといふ話が傳はつて居る。シェリングが對話篇風に書いた『ブルーノ』といふ書物の中ではブルーノがルチアンの説を破つたことになつて居り、而してルチアンはフィヒテで、ブルーノは勿論自分であるが、史家は之を評して、シェリングは此の書物の中でだけフィヒテを論駁し得たと言つて居る。とにかくラファエルといひ、シェリングといひ、其の創作中溜飲を下げた心持は推察せられる。紫式部がそんなことをしたかどうかは知らないが、餘りにしつこく鼻を嘲るので、一寸そんな邪推をして見たくなつたのである。文學に於ける鼻で有名なのはシラノ・ド・ベルジュラックの事蹟であるが、其れとは全く別の事である。尤もこん